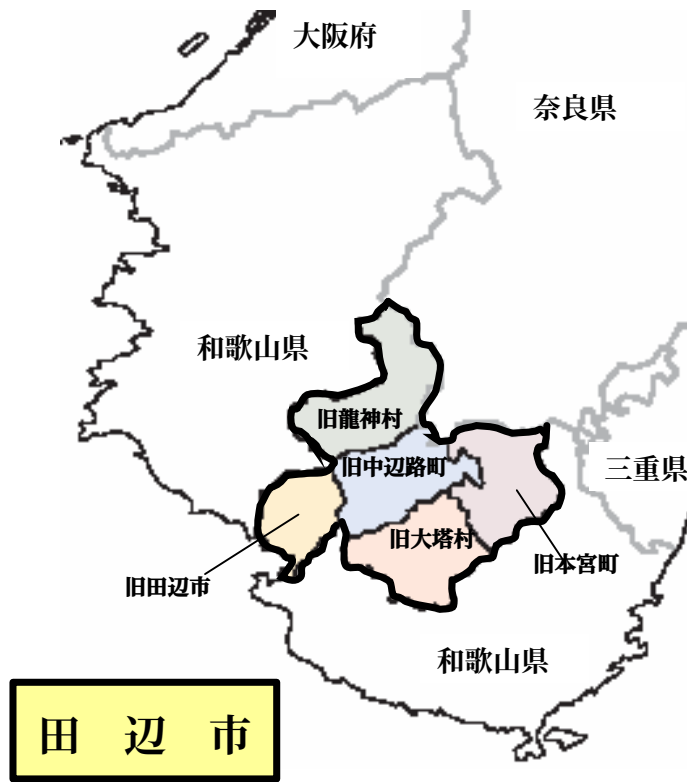


田辺市のひきこもり支援

(窓口開設5年目の報告)



(平成17年5月1日5市町村合併)

平成17年4月～平成18年3月

和歌山県田辺市

発刊にあたって

平成17年5月、紀南の5つの市町村が合併して誕生した新しい「田辺市」は、近畿地方で最も広い面積を有し、美しい海、山、川の自然と、黒潮あろう温暖な気候に恵まれた住み良いまちです。しかしながら、私たちを取り巻く昨今の社会情勢は、過疎化や少子高齢化といった問題をはじめ、地方経済の低迷、地域における連帯意識の低下などを背景に、経済的不安や人間関係の希薄化、孤立化などが一層広がりつつあり、そうしたことのしわ寄せが形を変えて、青少年の育成環境にも少なからぬ影響を与えているように思われます。



田辺市では、平成13年に「田辺市ひきこもり相談窓口」を開設し、「ひきこもり」に関する相談や支援の体制づくりに取り組んできました。開設から5年が経過し、相談窓口の利用件数は年々増加する傾向にあります。若者が社会から遠ざかり、家庭の中でさえ人との関係を断ってしまうほどの苦悩は、他からは計り知れないものがあります。「ひきこもる」という行動において、彼らがじっと守っているものはいったい何なのでしょう。その背景はとても複雑で対応も困難であることから、窓口開設当初から「田辺市ひきこもり検討委員会」を設置し、その支援について検討を重ねてきました。その結果、5年間の取り組みの中で、官民協働のネットワークが有機的に働き、そうした若者を支援する体制も生まれてきております。このことは非常に大きな成果であると思います。

また、最近では、「ニート」と呼ばれる若者の増加が新たな社会現象として問題視されておりますが、こうした若者に対する支援についても、「ひきこもり」との違いを明確にしながら、一つの方向性として、働きたいと考える若者がいつでも働くことのできるよう、その支援体制を整えていかなければなりません。

次の時代を担う若者が将来に夢をつないでいける、そうした地域社会の実現に向けて、これからも市民の皆様方のご理解とご協力をいただき、官民協働のもとに更に積極的な取り組みを進めてまいりたいと考えております。

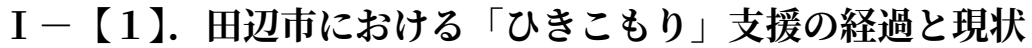
市民の皆様方をはじめ、関係各位のこれまでのご尽力、ご協力に深く感謝を申し上げますとともに、今後ともより良い地域社会の実現に向けて、なお一層のお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

平成18年3月

田辺市長 真 砂 充 敏

— 目 次 —

発刊にあたって	—— 田辺市長 真砂充敏	1
I — 【1】. 田辺市における「ひきこもり」支援の経過と現状		
	—— 田辺市ひきこもり相談窓口担当 目良宣子	5
【2】. 田辺市ひきこもり相談窓口ビラ		12
II. 田辺市ひきこもり検討委員、田辺市行政局担当者感想		13
III. 平成17年度 支援の実際		
①. 相談実績	i. 過去5年間の実績	33
	ii. 平成17年度	35
②. 家族会 (ほっこり会・女性の親の会)		39
③. 青年自助会実績		41
	交流会(1). 斎藤環氏、上山和樹氏を迎えて	44
	上山和樹さん感想	50
	交流会(2). みらいの会を迎えて	51
④. 社会体験活動		54
⑤. 啓発活動・視察・実習・問い合わせ		55
⑥. ひきこもり講演会		56
⑦. 思春期講演会	—— 講師：斎藤 環 氏	69
⑧. 軽度発達障害学習会	—— 講師：宮本 聡 氏	93
⑨. 田辺市ひきこもり検討委員会 議題／活動		96
⑩. 田辺市ひきこもり相談窓口担当者感想		100
IV. 参考資料		
(1). 保健師ジャーナル(原稿)		105
(2). 社会的ひきこもり家族の会 ほっこり会 紹介ビラ		113
(3). 居場所 ハートツリーハウス 紹介ビラ		114
(4). 田辺市ひきこもり検討委員会 設置要綱／委員名簿		115

I－【2】. 田辺市ひきこもり相談窓口 紹介ビラ・・・・・・・・ 12

田辺市における「ひきこもり」支援の経過と現状

田辺市ひきこもり相談窓口担当 保健師 目 良 宣 子

《はじめに》

昨秋の『こころの科学』123号に「ひきこもり検討委員会顛末記」と題した私の拙稿が掲載された。ここではその際の草稿をなぞりつつ、それに若干の新たな視点も加えて、5年間の私たちの取り組みの経緯と現状についてできるだけ詳らかにしてみたいと思う。



《新しくなった田辺市》

田辺市は、県南西部に位置し、平成17年5月に田辺市、大塔村、中辺路町、龍神村、本宮町の5市町村が合併し、人口は約86,000人、世帯数は約34,000世帯（合併前の人口は約70,000人、世帯数は約27,000世帯）で、県下第2位の規模をもつ市である。また総面積は1,026.63平方キロメートル（東西約45キロメートル、南北約46キロメートル）で、近畿圏内で一番広い面積を持っている新市として出発した。

《ひきこもり検討委員会の設置とひきこもり相談窓口の開設》

田辺市では、10代から30代（思春期・青年期）を中心とした「社会的ひきこもり」に対する支援を展開している。この「社会的ひきこもり」の支援が開始されることになったのは、住民からの強い要望を受けたことがきっかけである。

最初は不登校児の親の会や、不登校のまま卒業し社会に参加できずにいる青年たちのサークルとその支援者らが声をあげ、平成9年に市議会での議員質問を受けて、担当部門や関係者が話し合いを重ねてきた結果、健康増進課が中心となって考えていくことになった。その後、先進地（山梨県立精神保健福祉センター）への視察研修によって、「社会的ひきこもり」や支援活動の展開について学ぶ機会を経て、健康増進課既存の田辺市母子保健連絡協議会を活用して、当面の支援体制について協議した。平成12年12月再び議員質問があり、平成13年1月、『ひきこもり検討委員会』を設置、同年3月、『ひきこもり相談窓口』を開設するに至った。

《田辺市ひきこもり支援の体系》（図1参照）

『ひきこもり相談窓口（以下相談窓口）』と『ひきこもり検討委員会（以下検討委員会）』が、図1のように支援体系の柱となって、本人や家族を支援している。相談窓口の啓発としてのビラも参考にされたい（I－【2】P.13）。

相談窓口の担当者は、当初保健師1名が専任となり（平成16年度から1名増員）、専用

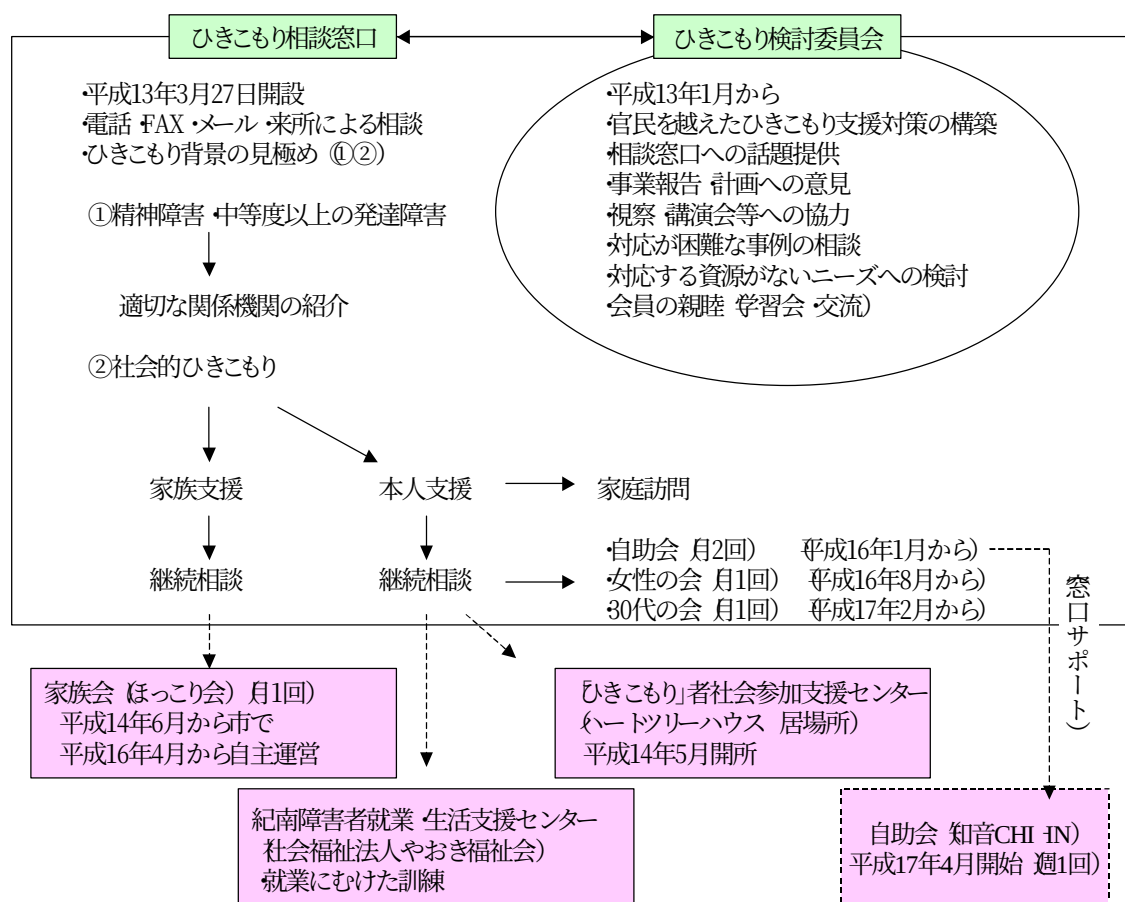
I－【1】. 田辺市における「ひきこもり」支援の経過と現状

電話の受付は平日の午後２時間（FAX・メールは随時受付）、できるだけ来所による面談につなげ、継続支援を行っている。合併による担当者の増員はなかった。

相談窓口開設から５年間で継続した実相談件数は６５件、内現在継続しているのは３８件である（Ⅲ－①－i P.33）。平成１７年度の述べ相談件数は１０９０件で、実相談件数は８６件である（Ⅲ－①－ii P.35）。年々相談件数は増加の一方である。支援の実際については、後述する。

ひきこもりの問題は、不登校の問題と同様、これといった解決法というのが見えにくい。またその性質上、支援の専門家がどの職種に当るのかも不明確である。さらに、本人が直接来所することが困難であることから、家族への支援から問題解決への糸口を見出すことになる。そして、本人と専門治療機関や既存の社会資源（地域の社会資源を後述）を繋ぐシステムが必要とされる。そしてこのシステムは、より困難な支援を要する（例えば今日の社会的な問題である虐待等への支援の）場合にこそ更に強化して活用されるものである。

図 1) 田辺市相談窓口支援の流れ（実線枠外は民間実施）



検討委員会は、ひきこもり支援を多角的に検討していくために、官民の医療・保健・福祉・教育等関係者 25 名（市町村合併後は、家族会や当事者代表、行政局代表を含む 33 名体制）で構成した（Ⅳ－（４） P.117）。これまでの検討委員会では設置要綱（Ⅳ－（４） P.115）

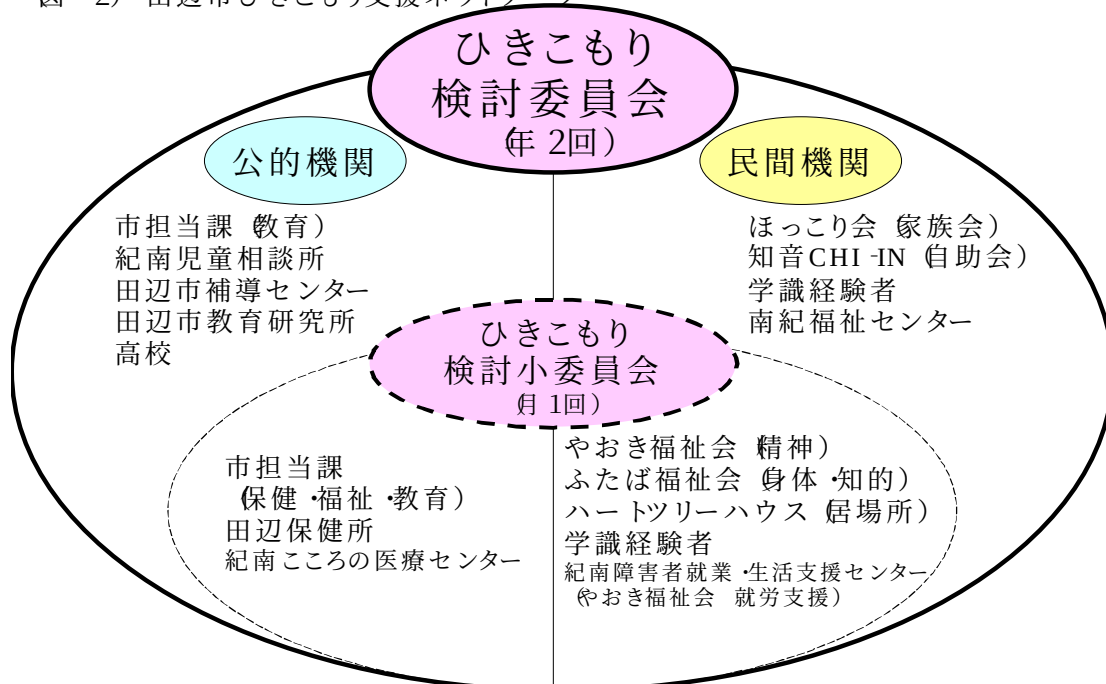
に基づき、委員の学習会や困難事例の検討会、窓口での相談のニーズから、支援としての居場所・家族会・デイケア・自助グループ・就労訓練等の必要性について意見を求め、実際に進めていく中でも助言をいただいていた。行き詰っているのが支援の出口についてであり、ニーズと照らし合わせて今後の検討課題である。

平成 17 年度は、検討委員の協力を得て、合併地域への啓発活動としての「ひきこもり講演会（Ⅲ－⑥ P.56）」を実施した。また現場での対応として、軽度発達障害を背景にもつ青年への理解と関わり方について学ぶ機会を持った（Ⅲ－⑧ P.93）。新しい検討委員の中にハローワークの相談員が偶然入り、支援の広がり大きな役割を果たしてくれるという収穫があった。

《地域の社会資源》（図 2 参照）

現在田辺地方における社会資源は、図 2 のとおり、検討委員会のネットワークの中で網羅されている。

図 2) 田辺市ひきこもり支援ネットワーク



当地方の医療機関の精神科は、公立医療機関である紀南こころの医療センター（管理者は田辺市長）と、重度心身障害児者施設と併設した南紀福祉センター附属病院の 2 箇所にある。ひきこもりの背景の見極めとしての診断、神経症状を緩和する為の治療、本人でなくても家族の相談から対応してくださる等、ひきこもり支援への理解が広がってきている。

田辺保健所は田辺市内にあり、田辺市と 4 カ町村（田辺市合併後）を管轄している。保健所の精神分野では、福祉業務が保健所から市町村に移譲されてきた平成 14 年度を機に、年々その担当者数が削減されているという実情もある。平成 16 年度からは、県下全域で、「社会的ひきこもり」相談窓口を開設されるに至ったが、現実には継続支援が困難である

と聞いている。

ひきこもり青少年の居場所は、県下では、和歌山市（一番規模が大きい市）と田辺市の2箇所にある。どちらも、平成16年度から、「ひきこもり」者社会参加支援センターとして指定されて運営している。その特徴としては、精神障害者小規模作業所運営事業に準じているが、家庭訪問に対してわずかな補助金が支給されることになっている。田辺地方においては、ひきこもり青少年の居場所「ハートツリーハウス」が、平成14年5月から開所している。検討委員会委員の有志や不登校親の会の支援者らが中心となって、民間として運営委員会を組織している。

福祉関係では、障害者を支援するいくつかの社会福祉法人があり、居場所の開設に力を入れてきたのは、精神障害者を支援する「やおき福祉会」である。田辺市にある「ふたば福祉会」は、約30年前から障害者の作業所づくり運動の中心を担ってきており、現在は知的障害者や身体障害者の施設を数多く運営している。さらにそこから精神障害者の作業所づくり運動に発展してきた。それは、国の制度が始まる前からの活動で、すでに10数年になり、田辺市はその活動に理解を示し、施設設置に際して土地を提供する等の支援と連携を積み重ねてきていた。これまでの関係が、ひきこもり支援を進めていくにあたって、関係をつなげていく基礎になっている。相談窓口にとって、地域のニーズに基づいて作られてきた障害者施設を運営する民間の社会福祉法人は、相談によって交通整理していく上での受け手になる社会資源として大きな存在である。また当初よりひきこもり支援への必要性を感じており、フットワークが軽いので支援の広がりにも多大な協力を得ている。

田辺市には大学や私立の高校はなく、近いところでも電車で1時間以上かかる。故に、市内の青年の大部分が市立の小中学校を卒業後、県立高校を経て、地元で就職するか、県外に進学又は就職していくことになる。市内の不登校児童・生徒数は、決して少なくなく、小中学校においては、不登校問題担当者を配置したり、スクールカウンセラーや子どもと親の相談員をうけたりするなどの取り組みをしている。平成15年9月からは、市の教育研究所に適応指導教室がスタートし、その成果をあげている。検討委員会の委員である教育委員会の職員を通じて連携をはかり、不登校のまま卒業した生徒の状況を高校の3年間ぐらいは把握しているらしく、支援の谷間を作らないように努力している。また、高校生の場合は、不登校から休学そして退学とすすみ、その後が把握しにくい状況がある。不登校や休学中から相談が入り、継続的な支援をしてきた場合の社会参加は早いことを実感している。高校の相談室関係との連携を深め、できるだけ早く支援のレールに乗っていけるように、また家族が孤立していかないようなシステムづくりが、今後の課題である。

田辺市における『ひきこもり検討委員会』ネットワークは、単に関係機関の代表というのではなく、代表となっている関係者同士の横のつながりが、実働部隊として強い関係にあるところが特徴である。それは、ひきこもり相談窓口開設以前から積み重ねてきたものであり、ボランティア活動を含めて対人サービスにおける連携活動を通じての人と人のつながりの深さであると感じている。例えば、ひきこもり青少年の居場所「ハートツリーハ

ウス」の運営委員長は、窓口担当者の高校時代の恩師であり、恩師とのつながりで障害児通園事業を立ち上げることに関わり、障害児通園事業の運営委員長は検討委員である精神科医であり、「ハートツリーハウス」には「やおき福祉会」から職員が派遣され、障害児通園事業は平成18年度「ふたば福祉会」に吸収され法人格になっていくといった具合である。

《支援の実際》

現在の田辺市のひきこもり支援は、相談は専用電話で受け付けるが、来所を基本としてひきこもりの背景を見極め、背景に応じた適切な関係機関に紹介するというコーディネート或いはソーシャルワークの役割と、軽度発達障害や人格障害圏のひきこもりを含む社会的ひきこもりに対する継続的な支援（個別相談から集団（ピュア）作り）へとつなぐ役割を担ってきていることである。また個人を支える手の一つでも多く広げるために、関係者や関係機関と連絡をとって、機会あるごとに当事者や支援者に関わってくださる場を作っていた。

そして相談窓口の特徴は、集団作りと並行して個別相談を定期的に行っているところにある。相談の場面が、人間関係や体験による心の葛藤へのサポートの場となっている。

〔1〕. 相談活動

個別の相談は、家族は1カ月に1回、本人は2週間に1回をベースにしている。

「ひきこもり」の相談は家族からの相談が大半で、直接本人からの相談は少ない。しかし、相談を継続していく中で、家族から本人へとつながってくる（中には本人につながらないまま家庭の中の変化により社会参加につながった事例もある）。家族は家族会へ、本人は自助会へと出入りしながら一步步つゆっくりではあるが着実に変化が見られるようになってきた。光が見えてきてもあせりだす家族の気持ちを時には抑えて、失敗しまいと緊張しがちな本人の肩の力を抜いたりするために、相談場面等関わりの機会をとらえてサポートし続けている関係がある。

訪問活動は、緊急時以外は基本的にはしない方向で支援している。ただひきこもり状態の長期化だけでなく、ひきこもりの背景を考慮しながら、または相談が長期に継続されていて家族も工夫をしているにもかかわらず本人の変化が講じにくい場合等、関係者と相談の上で、家族の了解を得て、訪問に踏み込む場合もある。その場合の注意点として、訪問が定期的に継続できるのかどうか、本人の変化への対応についても十分検討した上になる。

相談活動の中で最も重要なのは、ひきこもりの背景の見極めである。統合失調を見落とさない、青年期まで気付かなかった軽度発達障害児者への配慮である。本人・家族ともに受容の必要性、その大切さについて時間をかけてすすめていく。集団づくりの中でも、セレクトして構成している。予防的な意味でも、早期の対応は重要であると考えている。

〔2〕. 家族会の支援

昨年、家族会は「ほっこり会」として自立した。家族会の社会的な活動の第一歩として、今年度の家族会は家族の中のリーダーを中心として、地域での活動がなされた。当地域の福祉関係者で集う「おもいきり福祉まつり」に参加して、手作りのおもちゃやお菓子などを販売するバザーを出展した。その時に、「ほっこり会」についての説明や斎藤環氏による講演会（Ⅲ－⑦ P.69）のビラを配布するという形で、家族による啓発活動になった。このような家族会の更なる社会化（社会的な活動）は今後の課題である。リーダーへの負担の軽減、会員らの参加意識の高まり、関係者の協力は欠かせない。相談窓口は独立した家族会に対してどのような側面的な関わりがよいのか今一度考えていかなければならないだろう。

家族会の活動実績は（Ⅲ－② P.39）のとおりであるが、昨年からの青年自助会との交流を通じて、本年度も家族と青年が交流を持つ機会に恵まれた。「おもいきり福祉まつり」では、バザーに数名の青年が参加して家族とともに作業をするなど、交流を通じての家族の励み、青年の笑顔など多くの感動があった。

〔3〕. 青年自助会の取り組み

青年の自助会についても家族会の後についていきたいところであるが、独立するには課題が多々ある。ひきこもりという現象が人生の一通過点としてとらえるならば、又、徐々に社会参加を始めた青年にとっては、今この体験が余力のない状況下において、仲間を支えるだけのエネルギーに至らず、持ち前の優しさが自身をも苦しめてしまったりする。仲間の中で支えあうこと以上に一人一人が適度な刺激を受けながらも「ゆっくりできる」「エネルギーがためられる」「明日の力になる」そんな場でありたいと考える。

自助会を大切に思っている青年が集まってくる。語ることは大切だという青年もいる。黙っているけれど人の話を聞いて心を動かしている青年もいる。他の支援団体との交流会等の際感じるのだが、交流会に向けての話し合いや取り組みが仲間同士を近づけ、他の団体の青年らの様子を見て自分たちの姿をかえりみ、自分たちの自助会をどんなものにしていきたいかを考え始める。支援者は彼らの思いに耳を傾け、寄り添いながら彼らの目標達成を目指して支援し続けていきたい。

青年自助会の活動実績は（Ⅲ－③ P.41）のとおりである。集団作りの中で、青年の年齢が高くなるほど支援の難しさを感じている。年齢を重ねている分思慮深くなっていること、自分の内面を若い人たちに容易に見せない等で、仲間の中になじみにくかったりする。しかし今年度、斎藤環氏や上山和樹氏との交流会（Ⅲ－③－（1）P.44）や「みらいの会」との交流会（Ⅲ－③－（2）P.51）等を通して、話し合いを重ねてきたことや共に行動することが増えていく中で、本当に少しずつだがもつれた糸がほどけてくるように、こころが解けていっているような様子が伺える。

青年自助会の中で、仲間の話から刺激を受ける。そのことが、自動車免許を取得しに出

かけたり、就労支援を受けたり、更にハローワークで仕事を探してきてアルバイトを始めたことにつながってきた。青年は活動が広がりつつも、人との関係で詰まったときには、支援者に電話やメールで連絡してくるというような関係が続いている。

〔4〕. 社会体験活動・就労支援（Ⅲ－④ P.54）

生きづらさをかかえる青年への支援として、国のほうでも各省庁から支援策が打ち出された。アンテナを高くして情報を得て、活用できる支援には参加させてもらった。

内閣府の「長期ボランティア活動を通じた若者の自立支援プログラム」は、参加するものにとって経済的に活用しやすいものであった。更に多くの青年が活用できて、将来に希望が持てるものに発展してほしいと願っている。

就労を希望している青年が、「紀南障害者就業・生活支援センター」で就労訓練を受ける機会を得た。しかし、その支援を裏付ける予算はない。「仕事がしたい」というニーズは多いにもかかわらず、人間関係の不安などで一般就労にはまだまだ踏み込めない。そんな青年が就労訓練の場を通して人間関係についても体験できる場が、選択肢の一つとしてあればよい。新しい社会資源を開発していくこと、様々なニーズに対応する社会資源が地域の中に点在していくことが必要であると考える。

〔5〕. 啓発活動と視察や問い合わせ（Ⅲ－⑤ P.55）

本年度、力を入れてきたのが合併町村への講演会である。「^{ちいさ}知音」（将来自分たちだけで運営していくことを目指している青年自助会）の代表であり、検討委員でもある青年が、3地域で体験発表をした。当事者の声は、参加されている方のところに最も響くようである。まだまだ相談窓口につながってこない潜在的なニーズを拾い出して、青年への支援を充実していきたい。

《おわりに》

ひきこもり青年に限らず、今日の若者を取り巻く社会の状況は、決して夢が持てる状況にあるとは言えない。彼らとの関わりの中で、彼らは何を求め、何にもがいているのか、訴えに耳を傾け、言葉にならない叫びにこころを寄せて、彼らのニーズを拾い出し、改善と必要に応じた社会資源を改革していく。行政だけでは限界があり、今後ますます民間の活力が求められるだろう。官民が協働で取り組んでいける体制作りと、市民全体で町づくりとして考えていかなければならない課題である。

ひきこもり相談窓口の紹介

不登校のまま卒業あるいは中退後自宅中心の生活をしている青年、
進学あるいは就職したけれど途中でやめて社会参加をしていない青年・・・ご家族や当事者だけで悩んでいませんか？

田辺市健康増進課には専用電話（0739-26-4933）を設置して
平日の午後2～4時に相談を受けつけています。年々相談件数は増えて
いますが、相談を定期的に続けていくうちに徐々に元気を取り戻
していく青年が自助会で活動中です。

問い合わせ： 田辺市健康増進課

TEL：0739-26-4901 （平日8：30～17：00）

○ ひきこもり相談窓口専用

TEL：0739-26-4933 （平日午後2時～4時）

FAX：0739-26-4933

H P：http://www.city.tanabe.lg.jp/kenkou/hikikomori/index.html

E-Mail：shc@city.tanabe.lg.jp

自助会（田辺市）

○月2回の集まり

○女性の会（月1回）

○30代の会（月1回）

（その他社会資源を紹介します）

家族会（ほっこり会）

※月1回の集まり

- ・ひきこもりの子どもを持つ家族
同士の心の交流
- ・家族の対応支援方法
- ・社会的ひきこもりの理解をして
もらうための啓発活動などを
行っています

居場所（ハートツリーハウス）

居場所・相談・家庭訪問・イベントな
ど実施

対 象：ひきこもり状態にある青年
（15～30歳代までの男女）

入会金：なし

利用料：（1ヶ月）5000円

※見学・体験利用も可能です

自助会

（知音 CHI-IN）

※週1回の集まり

自助会で集まった
メンバーが自分た
ちで様々な活動を
しています

Ⅱ. 田辺市ひきこもり検討委員、田辺市行政局担当者感想

タ イ ト ル	所 属	氏 名
Only one	ふたば福祉会 (委員長)	米川 徳昭
「ひきこもり検討委員会寸感」	学識経験者 (副委員長)	布袋 太三
今、必要なこと	やおき福祉会 (副委員長)	寺沢 啓三
	やおき福祉会	横矢 弥生
	ふたば福祉会	野長瀬 祐樹
田辺市ひきこもり検討委員会 (検討小委員会)に参加して	田辺保健所 精神保健福祉相談員	栗田 直嗣
歩きながら考える	紀南こころの医療センター 精神科医	山本 朗
田辺市ひきこもり検討委員の活動から	田辺市 学校教育課	中本 克彦
「ひきこもり支援」について	田辺市 児童育成課	佐藤 真
	ハートツリーハウス	酒井 滋子
田辺市ひきこもり検討委員になってこの1年	紀南こころの医療センター 精神保健福祉相談員	和田 光弘
5年目を終えて	南紀福祉センター 精神科医	宮本 聡
ひきこもり検討委員になってこの1年	紀南児童相談所	古川 茂代
田辺市ひきこもり検討委員になってこの1年	主任児童委員	佐武 末子
	龍神行政局 学識経験者	五味 貢
ひきこもり検討委員に就任して	龍神行政局 学識経験者	山本 尚司
	中辺路行政局 学識経験者	飯田 公子
Aさんとの出会い	中辺路行政局 学識経験者	横矢 豊子
ひきこもり検討委員に参加して	本宮行政局 学識経験者	九鬼 聖城
ひきこもり検討委員になってこの1年	本宮行政局 学識経験者	芝 栄子
	和歌山県立田辺商業高等学校	上野 剛志
田辺市ひきこもり検討委員になってこの1年	和歌山県立南部高校龍神分校	田城 麻紀
ほっこり会より	社会的ひきこもり家族の会	ほっこり会
田辺市ひきこもり検討委員になってこの1年	田辺市 生涯学習課	小川 雅則
田辺市になってこの1年「ひきこもり」について	本宮行政局 保健福祉部	倉谷 光穂
	中辺路行政局 保健福祉部	川口 江美子
	大塔行政局 学識経験者	尾崎 史予水
田辺市ひきこもり検討委員になってこの1年	大塔行政局 学識経験者	谷口 敬子
	大塔行政局 保健福祉部	松本 敦子
「ひきこもり」検討委員会に参加して	龍神行政局 保健福祉部	後藤 光代

II. 田辺市ひきこもり検討委員、田辺市行政局担当者感想

Only one

田辺市ひきこもり検討委員会委員長 ふたば福祉会 米川 徳昭

田辺市に「ひきこもり」の検討委員会が設置され、5年も経過した。地域の小さな部屋の片隅で蠢いている青年と、不安になりながら共に苦しむ家族の姿とに、我々は多く出会った。最近、福祉研修会の交流の場で、ある若い職員は、「結婚はするが、次の子どもの時代を考えるとかわいそうでつukれない」という発言をしたことが大変印象に残った。

一方は、社会からの離脱をし、本音は社会への復帰を願いながらもままたらぬ青年と、今の社会で生きながらも、社会への不信や絶望を言葉にする青年。彼らは今の時代をどう見えているのだろうかと思った。

前で紹介した青年例は、どちらかが健全であるかという問題ではなく、共通して、「私は社会を構成する一人である」という自分の位置とその価値を見つけられないことが問題だと思う。

障害者の作業所をしていると、いつも「人の価値とは何か」と考えさせられる。障害者自立支援法がとおり、障害者の経済活動(就労)を中心とする施策が重点となる。自立＝就労という定式は確かに今の日本社会では生きるために必要ではあるが、人の価値が経済活動に参画できる者が高いということであれば、大変危険を感じる。

ふたばにきている障害がある仲間たちの多くは、たくさんの仕事ができなくとも、優しい笑顔があり、強い友情があり、そして、自分の力を振り絞り、力いっぱい頑張っている姿がある。実習をする多くの青年はそんな姿に感動し、自分の周りにはないものを感じ、そして、帰っていく。

つまり、ひとつの定式化の生きかたやあり方に、人の価値を決めるとすれば、例えば、金をもうける人が偉く、もうけられない人が偉くないとすれば、大変恐ろしい社会になる。それに続く道をすでに私たちは今、歩いてしまっているのではないか。少し前に、スマップの「世界にひとつだけの花」が大ヒットした。ヒットした理由が単に、人気グループや曲や詩がいいということだけではなく、詩の中に、「オンリーワン」という言葉が入るが、「ひとり一人が価値ある人だよ」という国民に深い内在している本当の願いからではないかと思う。

国はニートを含む、様々な青年の状況に僅かの対策予算をたてた。現在の税の納付状況や年金等、そして、少子化問題、これからの財政基盤が成り立たない危惧からであろう。しかしながら、その額から推察すれば、まだまだ本気でないことがうかがわれる。本来、時代や国を担う子どもたちであれば、多くを家族任せではなく、しっかりと「宝」であることを再確認し、施策を講じるべきである。

ひきこもりの対策は単なる支援ではなく、将来の日本をつくる大事業だろう。

「ひきこもり検討委員会寸感」

田辺市ひきこもり検討委員会副委員長／学識経験者 布袋 太三

私が誘われるままにこの「検討委員会」のメンバーに名を連ねてからそろそろ三年になろうとしている。しかし、正直に言うと私はほんの最近までこの委員会の論議になかなかついていけず、大方はなにか整理されない思いの残る時間を費やしてばかりいたのである。そんな私をさしあたり柵にあげて、少し感想めいて思うことを言ってみたい。

ひとつは当初から気になっているのは、委員のほとんどが当事者やその家族と直に会っていないということについてである。まったく見知らぬ青年やその家族についてほんの短いレポートでイメージを結んでいくのは誰にとってもかなり至難でもどかしい。これでは相談の状況や取り組みの有り様に疑念や論評をさしはさむことをやはりためらわざるをえないし、結果として委員会論議がどうも沈滞していつてしまう。

そこで、これは自戒もこめてだが、せっかく自助グループや親の会と出会う機会がそれなりに準備されているのだから、今後は委員としてはそうした場所にできるだけ積極的に出かけてみるようにしてはどうかと思う。

それから、この際あえてディティールにこだわった質感のある「事例研究」をもうひとひねり工夫してみてもどうかとも思っている。

その他にいま気にかかっていることの一端は「個別の相談の過程でどんな心理技法が使われているのか、あるいは何も使われていないのか」「高校とのひきこもりや不登校事情の情報交換について」「コミュニティ・アンクル・プロジェクトのようなものがこの地域で作れないか」「農林水産関係の就労の受け皿づくりについて」などである。

最後に、私としては今年はどうにか時間をやりくりして当事者や家族と接する機会を持続的につくっていきたいと考えている。

今、必要なこと

田辺市ひきこもり検討委員会副委員長／やおき福祉会 寺沢 啓三

検討委員会設立・相談窓口開設以来5年、相談窓口担当者が、相談に来られた家族や本人の個々の悩みを聴き共感しながらニーズを掴み、解決の方向を一緒に模索し続けてきている。この支援の過程を通じて、家族や当事者が成長してきているように思える。それは、相談窓口担当者が、家族や当事者の悩み・ニーズを大切にし、常に課題解決の方向を意識的に追求しているからであろう。言うまでもないことかも知れないが、「今、必要なこと」の第一には、家族や本人のニーズを大切にする姿勢をもち続けることである。

第二番目には、家族や当事者が支え合(会)える集団を作っていくことである。窓口開設後、必要に応じて、居場所や家族会や自助グループ等の支援集団をつくったり、公共機関や民間法人等他の機関との連携を広げ強めたりしてきた。これら支援集団の輪の広がりとともに、家族や当事者が社会との繋がりを広げている。田辺市ひきこも

り相談窓口の特長は、検討委員会を基礎にした関係機関との生きたネットワークである。今のメンバーのニーズからは、就労をサポートする支援組織が必要なのではないだろうか。

第三番目には、ひきこもり状態にある人を含めて、国レベルでの総合的な青少年育成支援策が必要である。検討委員会でひきこもり支援を考えてきたが、ひきこもりの根は内部で深く現代社会と絡み合っており、この絡み合った根を解きほぐしていくには、教育・保健・医療・福祉・就労・地域等全分野にわたる総合的な施策が求められる。ここ数年、「不登校やニート対策」として別々の省庁から、微々たる予算の事業が出されてはきているが、あまりにも貧弱で活用しにくい。青少年の問題は国の将来がかかったとても重要な課題であるということを、うたえて続けていく必要があるだろう。

紀南障害者就業・生活支援センター 横矢 弥生

1 年間ひきこもり関係に携わってみて正直まだまだ分からないことばかりです。精神とは違うところもありながら似たところもあるように感じました。就業センターでは現在3名の対象者を受け入れています、徐々にではあるが当初より表情がいきいきとしてきています。社会資源もまだまだ少ないですが、増えつつある中で活用していけば就労の機会も増えてくるのではないのでしょうか。

ふたば福祉会 野長瀬 祐樹

ひきこもりの支援と言うと家に閉じこもっている人を外に連れ出すことに目が行きがちだが、外に出て行けるようになり、本人が外との関わりに関心が向いてきた時、適切な判断・支援が必要になるのではないか。

大人として外に出て社会との関わりを持とうとした時、そこには必ずと言って良いほど就労の問題が出てくる。そして外に出て行けるようになれば就労に対して親も、周りも期待する。なんとか職を見つけ徐々に馴染んで行こうと本人が考えていても 世間のスピードは自分には合わせてくれない。現実社会の厳しさ、マイペースで出来ない辛さなど、甘いと言われればそれまでだが、本人に多くのプレッシャーとなり襲ってくる・・・。

本人は他の人には計り知れない不安を抱えて外の世界に旅立つ。多くの勇気を振り絞り外に出て行ったのに、そこには乗り越えて行かなければならない壁が多く、その前に屈してしまう事もある。

II. 田辺市ひきこもり検討委員、行政局担当者感想

その壁を、不安を自身の力で乗り越えてこそ強くなれるのだが…、ひとりの力では乗り越える事が出来ない時には力になってくれる人、相談できる人、支援してくれる人がいれば随分助かるのではないかな。

支援の力を借りて良い経験をつんで行き、成功も失敗も経験するうちに自信が生まれ、一人で困難を乗り越える力、チャレンジする勇気が湧いてくるようになるのだと思う。

あくまで押し付けで無い本人の気持ちを尊重した、何気ない支援が地域の中で今後生まれる事を願い、私自身少しでも協力できればと思う。

田辺市ひきこもり検討委員会（検討小委員会）に参加して

田辺保健所 精神保健福祉士 栗田 直嗣

8年ぶりに田辺に戻り委員会へ参加させていただくことになった。それまでは保健所の相談業務や、精神保健福祉士の地域活動をとおり個別の関わりや学習を行ってきた。

委員会、特に小委員会の中では今までにはないネットワークの中で具体的な検討がなされ、講演会や啓発事業に対しても参加者が多岐多用の分野に広がっていることに（予想はしていたが）改めて驚くやら感心するやらであった。自分の今までの取り組みは、まず相談を受け、相談来談者との関係を構築し個別対応をする傍らで状況に応じて自分がその場その場でネットワークを作り出していかなければならなかった。それが田辺では社会資源や行政、教育、そして人がすでに結ばれており、個別対応にしても事業や啓発活動、学習の場にしてもスピーディーに展開出来る環境整備が出来つつある。

ただ、「ひきこもり」「ニート」「不登校」と呼ばれる社会的課題への対応は全国的に見ても一部の突出した地域に限られ普遍的な取り組みには至っていない。和歌山県においても同様である。今後はこの取り組みを田辺市近隣地域に広げ定着させ、大きな「こころの健康」をまもり、育む活動が大切だと言うことを再認識させられた。

今後、微力ではあるが検討委員の片隅に身をおかせて頂きながら学んでいきたい。

歩きながら考える

紀南こころの医療センター 精神科医 山本 朗

スウィフトの書いた「ガリヴァー旅行記」は日本語にも翻訳され、広く知られています。その中で、ガリヴァーの旅したフウイヌム国では、私達が“馬”と呼ぶ動物が国を支配し、ヒトは“ヤフー”と呼ばれ、支配されています。“ヤフー”は悪知恵が働

き、意地悪で喧嘩好きな動物と記されています。他にも悪い点がたくさん書かれています。

“人間”は悪い点をいっぱい持っています。でも“人間”には、いい点もいっぱいあります。愛、友情、思いやり……。私達の住む社会はそんなに捨てたものじゃない、と思います。いろいろあっても、現在、そして未来を見つめ、歩いていく。そして、皆が何か生きる価値を見いだせる社会が、いい社会ではないでしょうか。

ひきこもり検討委員になって感じたことを少し書きました。ひきこもり支援の輪がますます広がることを期待し、応援しています。

田辺市ひきこもり検討委員の活動から

田辺市 学校教育課 中本 克彦

最近の社会的ひきこもりを考える上で、フリーター・ニートの問題との関連がクローズアップされてきています。このことは、斎藤環先生の思春期講演会でも取り上げられましたが、フリーター・ニートの問題は、我が国にとって深刻な課題になっています。また、ひきこもっている人たちの就労支援も重要な課題となっています。

社会的ひきこもりやニートの状態の人たちを、どう支援していくかとともに、ひきこもりやニートの状態にならないための支援をどう進めていくかということも必要になってくると考えます。

学校教育では、子どもたちに正しい勤労観や職業観を身に付けさせ、社会で生きていく力をつけていくためのキャリア教育の充実を進めているところです。具体的には、職場見学や、様々な実技体験活動、職場体験学習などを通して、子どもたちが自分の将来を考えたり、周りの人との交流を深めながら、コミュニケーション能力を高めたりして、「学ぶこと」、「働くこと」そして「生きること」をつなげていくために研究を進めているところです。

今後、社会的ひきこもりやニートの就労支援を考えたとき、小中学校でのキャリア教育の必要性は、大きいと考えます。

「ひきこもり支援」について

田辺市 児童育成課 佐藤 真

「ひきこもりへの対応ガイドライン」によれば、「ひきこもり」は対人関係の不安や自分に自信がもてないことなどを背景に、社会に一步を踏み出せないでいる状態のことで、「怠け」や「反抗」などとは異なると記されている。しかし、周囲の人の率直な意見を聞くとやはり「怠け」や「甘え」といった言葉が少なくない。ガイドラインにおけるこのような認識は、広く一般にも理解されなければならないことであり、このことは支援を推し進めていくうえで前提となる重要な課題である。

また、本来ひきこもりの原因やその状態は様々であり、それぞれの事例に応じた対応が必要であるといわれている。ひきこもり状態から脱出したいが抜け出せず、何ら

II. 田辺市ひきこもり検討委員、行政局担当者感想

かの支援を求めている人も少なからずいることは事実であろう。支援を求める人がいて、また様々な面で社会問題となりつつある以上、一定の支援は必要である。ただし、その効果についても充分考慮されるべきであり、適切な支援が求められる。

一方、ひきこもりの原因は当事者自身の問題というより、親や社会といった要因によるところが大きいと言えるのではないか。つまり、現在ひきこもり状態の人であっても、そのほとんどが、小さい頃にはごく一般的な子どもであったに違いない。しかし、その成長課程におけるそれらとの関わりのなかで様々な相違が生まれた結果なのではないだろうか。そうであれば何か溝を埋めるような施策が必要である。

最近の国の施策に「ニート対策」といわれるものがある。ひきこもりとニートとの差は対人関係の有無であるといわれているが、その境界は曖昧であり両者には重なる点も多い。当初の個別相談を中心とした支援から就労支援へつなげていくなかで、当事者の問題はもちろんのこと、将来にわたっての経済基盤の安定や社会保障システムの維持、あるいは少子化への歯止め等を目的にあげていることは、世間の理解を得ていくうえで一つの理由となる。

特に「ひきこもり支援」については、当事者への理解とともに大きな視点でその目的を明確に示すことが大切であり、多くの人の理解があってこそより大きな支援が得られる。しかし、同時に親や社会の側にも変化を促す施策が重要であることを忘れてはならない。

田辺市ひきこもり検討委員になってこの1年

紀南こころの医療センター 精神保健福祉相談室 和田 光弘

田辺市のひきこもり検討委員会の委員となり、1年が経過しました。今年度は、十分な出席ができませんでしたが、委員会では様々な専門的立場からの話を聞く機会に恵まれ大変勉強になりました。

委員会で議題にあがる事例は様々で、相談場面では、専門的な視点からの問題整理が必要です。精神保健福祉相談室への相談の多くは、医療機関への受診への導入の段階で寄せられます。精神科への受診は、大変なためらいを伴い未だ敷居の高いものです。本人、家族に対する十分な配慮が必要となります。委員会で学び、吸収したことは今後の相談の準備や工夫に繋げていきたいと思っています。

私自身、医療機関の相談窓口の立場からも来年度は更に協力を深めていきたいと思っています。そして、田辺市のひきこもり相談窓口の更なる充実を願っています。

5年目を終えて

精神科医 宮本 聡

全国のひきこもり事情が、ニート関連で持ち直していると斎藤環さんから伺い、あらためて精神科医療のあり方を考えさせられます。そして自らの関わり方についても。

斎藤さんの一文を、講演会につづき引用し、五年の「まとめ」といたしたいと思います。

—あなたに彼らを「愛する」自信がないのなら、どうかせめて、無関心のままでいてはくれまいか。若者の非社会性などという似非論壇めいた問題意識は、どうか忘れてはくれまいか。それは、あなたに直接害を加えない他者への、最低限の礼儀というものだ。そして「礼儀をとるか愛をとるか」こそは、まさに「公正さ」の入り口に横たわる問題なのである（「負けた教」の信者たち 2005）—

ハートツリーハウスで想うこと

ハートツリーハウス 酒井 滋子

春なのにまだ寒さが残る三月、ひとつの別れがあった。ハートツリーハウスを利用して来ていた一人の青年（Aさんとしておこう）がメンバーたちの祝福と励ましを受けて次のステップへと一步を進めるのである。繊細で、思慮深く、自分でどうにもできない地獄も覗いたであろう体験を持つ少年が、「どこかにつながる」思いでハートツリーハウスを利用して四年。今、自分がやりたいことを掴んで進学する。Aさんにとってはまた新しい課題への挑戦が始まる。親御さんはAさんを誇らしいと思うと同時に不安もある。ここまで、ことはすべて順調に進んだのではなく、絶えず揺れ動いた。Aさんはまわりの信頼できる人に「助け」を求めることができ、それに真摯に応えてくれる人が何人かいたことも大きな支えになり、そのプロセスを共有できたこともAさんを多面的に支えることにつながったと考える。私たちは一人ひとりを大切に思うということはどういうことなのかをAさんを通じて学び得たことをありがたく思う。Aさんの人生を考えるとハートツリーハウスはほんの一つの点。これからどんな展開があるのか、私たちにとっても未知の世界。新しい体験が始まる。Aさんに送った「心からおめでとう」のメッセージの一節に「いつまでもあなたを応援し、見守っていますから。」は余計だったかな。

ハートツリーハウスはひきこもっている本人、家族に対して「いつも開かれていること」を第一と考えて来たが、様々な選択肢を提供するためには地域の今ある支援のネットワークを複合的、有機的にしていくために積極的に動いていくことが必要であると考え。ひきこもりのその先の支援である就労の問題にウェイトが置かれる傾向にあり、ニート対策が前に出て来ている現状であるがひきこもり問題は解決されたものではない。斎藤環氏が、座談会「ひきこもりの現状」で「ひきこもり問題が飽きられなかったところで…」と語っていらっしゃるのが気になる。

「ハートツリーハウスは進化を続ける」と言いながら課題は多い。スタッフをやおき福祉会から派遣してもらうことが続いていて、人材を育てるところまで至っていない。が、この件について06年度、待望の新人（男性）をスカウト。すでに運営に関わってもらっている。彼のやる気にどれだけ応えられるかを問われている。研修を重ね

II. 田辺市ひきこもり検討委員、行政局担当者感想

てもらい、根本にぶれないことを押さえながら若い発想での支援を思い切り展開してもらおうと思っている。福祉政策が大きく変わることによってハートツリーハウスの利用も多様化せざるを得なくなることと思う。それに対応するために、ソフト、ハードをどう組み立てるか。いろいろ研究しながら方向を探っていくことも新しい課題となっている。玄田有史氏が「ニートとひきこもり」のレポートの中での斎藤環氏の指摘として「熱い思いを持って活動を始めながら、地域の理解が得られなかったり、十分な経営基盤を持たないことから、ころころ閉鎖や活動休止に追い込まれる例も少なくない。」という記述にギクッとする私がいる。

今年の2月18、19日に和歌山市で開催された「第一回社会的ひきこもり支援全国実践交流会」は多くの課題を残しながらも私たちに、現在点を確認し、これからを考えるための提起があった集会であったと思う（残念ながら、私は体調が悪く参加できず）。和歌山市や田辺市のひきこもり支援が私たち住民にとって、あって当たり前のだけでなくそれを作り上げて来た過程、充実、発展のための絶え間ない努力を憶えてほしい。取り残される人のいない社会をつくるために力を少しでいい貸してほしいと思っているこの頃である。

紀南児童相談所 古川 茂代

木の芽がふくらみ、新たなスタートを感じさせる今日この頃。

あっという間に1年が過ぎてしまいました。年々月日の過ぎるのが早いこと！

人生の先の見えない頃は、早く月日が過ぎることを願っていたのに今は惜しい限りです。

社会的ひきこもりの人たちへの支援を田辺市は先駆的に取り組んできていますが、まだまだこれからの課題も多くあると思います。社会との関わりを取りにくい子どもたちもいます。ひきこもりにならないように理解を深め、地域の中で予防する取り組みも必要だと思います。子育て、療育、教育、医療、就労などの支援が、子どもから大人まで引き継げるようなシステムができあがるといいですね。

委員とはいえ名ばかりで、事業に殆ど参加できませんでしたが、いろいろな機関の方たちとのつながりをもてたことはとても良かったと思います。

私たちは常々関係機関との連携が大切と考えていますが、ネットワークの中の機関として、それぞれの仕事内容や役割を理解することがとても大事だと思うし、機関をつなぐのは、やはり顔と顔を通した信頼関係による人つながりではないかと思っています。人とのつながりを構築していくことが、それぞれの仕事の巾を拡げ、協力を得ることができると思っていますので今後ともよろしくお願いします。

田辺市ひきこもり検討委員になってこの1年

主任児童委員 佐武 末子

ひきこもり、という状態を、自分なりに理解していたつもりですが、昨年、斎藤環先生の、ひきこもり、についてのお話を拝聴し、改めて、言葉の持つ重みを実感致しました。

先生は、子どもが安心してひきこまれる環境づくりの必要性を話され、まず、会話を通してコミュニケーションをはかる事が大事、親も息抜きが必要である。家庭内暴力が起きた時の対処法、等など、日頃の経験の上にたったお話だけに、説得力があり、気を抜く暇ありませんでした。ひきこもっている人達にとって、社会参加への一歩は、容易ではない事を再認識しました。

「田辺市ひきこもり相談窓口」への相談件数も年々増え、平成16年度には、かなりの数の相談が寄せられた、と聞いております。ひきこもりについて悩んでおられる人にとって、相談窓口は、頼りになる存在だと感じました。

ひきこもり検討委員になっての一年は、会議や講演会に出席をし、ひきこもりについての勉強をさせて頂いた、いわば聴講生の様な状態だったな、というのが実感です。

学識経験者 龍神行政局 五味 貢

合併後、ひきこもり検討委員を受けましたが、外の会議等で検討委員又は研修に出席できず誠に申し訳ございません。平成17年度龍神地区で二回に渡り講演会を実施して頂きました。出席した民生委員のみなさんは、たいへん参考になったと喜んでいました。

不登校、ひきこもりの子ども、二、三人はありますが、学校、保護者、民生児童委員が指導にあたっています。又、研修会等で斎藤先生の講演を聞かせて頂き、たいへん参考になりました。今後におきましても地区民協として地域ぐるみで積極的に取り組んで行きたいと考えています。

平成18年1月25日に県と田辺市西牟婁郡民協主催での不登校、いじめ、虐待、子育て、ひきこもり等の講演会がありました。白浜町教育相談室の小野洋男先生の講演では実際に現場で指導にあたっての、経験されたことのお話を聞かせて頂きました。これもたいへん参考になりました。

今後とも、何かと御指導の程よろしくお願いします。

ひきこもり検討委員に就任して

学識経験者 龍神行政局 山本 尚司

5市町村が合併するまで、児童（生徒）の不登校問題は少しばかり認識し、その保護者の方と面談したことがありましたが、「社会的ひきこもり」については認識が薄く、これほどまで深刻で重要な課題であるとは思っておりませんでした。一時期は、むしろ「ひきこもり検討委員」に就任しなかったほうが良かったと思ったことがしばしばありました。

しかし、龍神市民センターでの研修会や斎藤環先生の講演さらには「第1回社会的ひきこもり支援全国実践交流会」で様々な事例を学びました。

特に、「第1回社会的ひきこもり支援全国実践交流会」におけるセッション2「家族のエンパワメント」では生々しい事例報告があり、のちにレベルの高い意見交換がなされ大変勉強になりました。今でも「理解すると言うことはどのようなことなのか」解らないところがありますが、いわゆる「社会的ひきこもり」状態の方に対する理解と保護者への支援に少しでも役立ちたいと考えております。そして、当地域に見られるように家族のみで抱えているケースが多くあるので、関係者と連携しながらサポートしやすい環境づくりに努めたいと思っております。

Aさんとの出会い

学識経験者 中辺路行政局 横矢 豊子

1月のある日のこと仕事から帰ると、郵便受けに見慣れた茶封筒の手紙が入っていました。「あっ、Aさん、仮免取れたのかな？」私は着替えもそこそこに手紙を読みました。私の予想は見事的中しました。「よく頑張ったね。おめでとう。」その夜、私はAさんに電話をかけました。

私がAさんと初めて出会ったのは、田辺市南部センターでの一室でした。昨年4月から職業安定所で職業促進相談員をしている私は、月に一度各センターへ巡回相談に出向いています。そんな10月のある日、Aさんが担当の方と共に南部センターに来てくれたのです。

Aさんと私はいろいろな話をしました。Aさんと私はというよりもAさんの方が私の問いかけに対していっぱい話をしてくれました。家族のことや小学生から中学生時代のこと、一時、大人を信じられなくなった出来事などを淡々と話してくれました。私は話を聞きながら、「Aさんはとても純真で優しい心の持ち主だな」と感じました。Aさんは「まず車の免許をとって、それから仕事を探すつもりなので、その時また相談にのってほしい」ということでした。その日は一時間半ほど話をしてまた会うことを約束して別れました。

次の日、私はAさんに手紙を書きました。「Aさんの人生は今始まったばかり。何事もあせらず！あわてず！あきらめず！」と。しばらくして、Aさんから「返事を書きたいので住所を教えてほしい」と電話がありました。それにしても若いAさんが私に返信を？と信じられない気持ちでした。と言うのも、私は今まで就職などの相談を受けた人には必ず手紙を書いて送りましたが、ほとんどの人は電話での返事だったり音沙汰なしだったりで、手紙をくれた人は数えるほどしかいなかったからです。

一週間ほどしてAさんから手紙が届きました。自動車学校で頑張っている様子が白い便箋に丁寧な字で書かれていました。手紙は「近ごろ寒くなってきましたね。風邪をひいたりしていませんか？元気で過ごせているのなら嬉しいです。お仕事頑張ってください。応援しています。」という優しい言葉で結ばれていました。

それ以来、Aさんと私の文通が続いています。

先日の手紙には車の免許を取得したことに続いて「仕事のことにについて今まで以上に前向きに考えていきたいので、相談にのってください。」と書かれていました。

Aさんは今、自立に向けて一歩踏み出そうとしています。

私はAさんに限らず、就職の相談など何かみなさんのお役に立つことがあれば幸いです。

(※文中に出てくるAさんには冊子掲載の了解を得ています。)

ひきこもり検討委員になってこの1年

学識経験者 本宮行政局 芝 栄子

初めて検討委員会に出席させて頂いた時、勉強不足でなんとなく場違いの所に来てしまった様に思え、存じ上げている方も居なくて「わ、どうしよう」という感じでしました。旧田辺市が早くから取り組んでいる事も始めて知りました。色々様々な組織やグループが相互に協力しあって、様々な理由でひきこもっている人たちをサポートしていることもわかり、その上自助会の知音のリーダーである楠本さんは自らが経験したひきこもっていた頃のお話をたくさんの人の前でできるようになったと感動しました。初め楠本さんとお会いした時はまだ伏目がちで今にも倒れそうな感じでしたが、2回日本宮へおいでいただいた時はすごくたくましく笑顔の優しい好青年になっていました。何か自信に満ちていて本当に驚きました。あまり委員会へ出席できる機会も少ないですが、私も少しでも地域に役立つように頑張っていきたいと思っています。

ひきこもり検討委員に参加して

学識経験者 本宮行政局 九鬼 聖城

全くの勉強不足を毎回毎回の会議で思い知らされる日々でした。主任児童委員制度が始まってすぐに委員に任命されて今日までいったい、いかほどの仕事＝お役に立てる働きをしてきたのか自分でもあきれる程でした。毎回頂く たくさんの資料を前に「ウーンこんなに頑張っておられる方々がいるんだ 自分も見習なきゃ」と言い聞かせ目を通してきました。

社会的ひきこもりと精神病でのひきこもりとの違い、ひきこもりから立ち直ろうと努力している様子、周りのサポートの状況、家族の大切さなど実際の活動を通じての報告は大変勉強になりました……勉強なんかではダメなのですね、地域でひきこもりで苦しんでいる方の少しでも手助けできるように 実際の行動をして初めてこの委員会に参加出来た意味があるのですから。

この一年間は、新田辺市となったことで このひきこもり検討委員会もそうですし子育てサポートなど、たくさんの方々との出会いが多くて楽しい日々でした。人と人

II. 田辺市ひきこもり検討委員、行政局担当者感想

とのつながりがいろいろなところで助けて頂けるなど実感しております。

「相互理解と仲間づくり」この事は子育てにも地域づくりにも全てにいえることだなど再認識しながら先は永いと自分に言い聞かせ皆様方から教わる日々です。

高校教員 上野 剛志

先日、和歌山市で開催された第1回社会的ひきこもり支援全国実践交流会に参加させていただきました。ひきこもりの方々や家族の方々との交流経験がないに等しい私にとっては、社会的ひきこもりそのものの勉強になったことはもちろんなのですが、高校教員という職業的な経験から、違うことにも思いを馳せることとなりました。今回はそのことについてひとこと書かせていただきたいと思います。

「ひきこもりとはガソリンがなくなった状態です。」「心のガソリンは心を動かすことで少しずつ溜まるのです。」これは集会の中でNPO「わたげの会」の秋田敦子さんがおっしゃっていた言葉です。この話を聞いたとき、私の心には、なぜか普段の授業中の生徒の顔が思い浮かびました。小さいときには好奇心旺盛だった子どもたちが、思春期を迎える頃には「学び」そのものに拒否反応を起こす。そうして、ただ嵐が通り過ぎるのを待つかのようにじっと授業中の教室にいる。こういう生徒がどんどん増えてきているのです。「心にガソリンがなくなっている」という点では、これは立派な「閉じこもり」ではないでしょうか。

いま子どもたちが苦しんでいます。矛盾が渦巻く社会で、学校の授業で、そして大人が作り出したシステムで。社会の矛盾を正すことは大人の責務ですが、一方では、そんな社会を乗り越える力も、子どもたちにはゆっくりじっくりと身に付けてもらいたいです。いま私にできること。それは子どもの「心が動く」学校づくりに努め、ガソリンを少しずつ溜めることなのかなと考えさせられました。

田辺市ひきこもり検討委員になってこの1年

南部高等学校 龍神分校 田城 麻紀

平成17年より検討委員をさせていただいております。この1年の活動は会議に出席することと龍神で行われたひきこもり講演会に参加することしかできませんでした。

高校では途中で休学・退学・転校していく生徒がいます。気になる場合でも結局何もできませんでした。やはり学校という枠がなくなると相談するところ、気にかけてくれる人が少なくなってしまう。ひきこもってから時間が経つにつれ関わることは難しくなるということで、やはり在学中からの支援、学校をやめた後の支援を考えル必要があります。在学中の支援については何をしたらいいのかまだよく分かりませんが、自分を大切に思えること・コミュニケーション能力を高めることなどの支援が必要ではないかと考えています。これらのことはたとえば学校で講演会などをするだけでなく、日頃生徒と接する中でしていかなければならないことだと改めて感じまし

た。

龍神で行われたひきこもり講演会で、楠本さんのお話を聞くことができました。やはり当事者の話を聞くことは心に響くものがあり、非常に良かったです。ひきこもりするのはその家庭が悪いなどと犯人探しをするのではなく、誰にでもあり得ることと考え、自分に身近な問題として捉えることが必要です。委員とならなければひきこもりについて深く考えることもなかったでしょう。今在学している生徒のことだけでなく、卒業後のこと・学校から離れてからのことを想像しながら、何かできることはないか考えていきたいと思います。

ほっこり会より

紀南地方社会的ひきこもりの家族の会 ほっこり会

市町村合併による行政区域の拡大、三位一体改革による自治体財政の仕組み再構築、加えて少子高齢化など社会状況全般の質的变化ほか行政課題山積のなか市長様はじめ市職員各位の御尽力御苦勞をお察し申し上げます。

また2年程前私どもが「ひきこもり相談窓口」の充実を望んで種々お願いしたところ矢継ぎ早に施策下され誠にあつく感謝いたしておる次第であります。

いまや田辺市は他府県同規模の自治体に比べても福祉の先進地域として全国的に注目を集め、県の中央部に位置し本市には県下の「ひきこもりの子を持つ悩める親たち」が「窓口」に駆け込み寺かのように相談に参っております。

「ひきこもっている本人」はもがいております。口ごたえし、あるいは家族との会話を拒否し部屋に閉じこもり時には自傷や器物破損を繰り返す。暴力をふるう者もいます。すべていらだって「何か」を逆表現しているのだと思われます。内心では非常に苦しんでいます。助けを求めてもがいております。家族は驚き、ショックを受け、理解出来ず、どうしていいかわからず悩んでいます。家族も苦しんでいます。それでいて病気ではありません。

2001年厚生労働省発表の「社会的ひきこもりをめぐる地域精神保健活動のガイドライン（以下ガイドライン）」によれば『ひきこもりは「いじめのせい」「家族のせい」「病気のせい」など単一の原因によると決めつけるのではなく生物・心理・社会的要因の複合としてとらえることが大切である』と指摘しています。

こうした穴倉に自らを追い込み、悩みの淵に身を沈めたのは、本人の「身勝手」「気まま」「甘え」「怠け」「性格が悪い」「堂々めぐり」、親の「育て方が悪かった」「社会が悪い」等々、いくら過去にさかのぼって原因を追及してもほとんど無意味であります。ただ現に不幸な状況が世間には多々あり、しかもこのような家庭が匿されて増え続けていると、ご認識頂ければ幸いで有ります。

II. 田辺市ひきこもり検討委員、行政局担当者感想

不登校や、いわゆるニート族を含め200万人を超える若者が社会に適応できず、あるいは社会のニーズに応えようとしない層が年々増加傾向にあり、早くも社会問題化しています。やがて来る少子高齢化、労働不足の近未来社会において大きな社会的損失となるばかりでなく、将来本人が生活保護を受けざるを得なくなる様相をするならば、今後自治体の福祉行政にも何らかの影響が生じてくると考えられましょう。家庭、学校、職場などで長期にわたって社会的参加を拒否してきた結果、疾患でないにもかかわらず部外に対して適応障害をおこしている当事者本人を社会復帰させるには問題の多様性からして、ひきこもった期間の何倍もの根気強い心理的支援が必要であります。

本市では平成13年「ひきこもり検討委員会」「ひきこもり相談窓口」が設けられ緊密な連携のもと各種企画活動がなされて参りました。上記ガイドラインによれば「支援をすすめるときの原則」として「まずは家族支援を第一に考え、家族自体がひきこもりがちになることを防ぎ、罪悪感、孤立感を和らげることが大切」とあります。また「相談の面接を継続していくときに有効な技法」として、(一) 家庭訪問、(二) 心理教育グループ、(三) 居場所（親の会）などの運営を支援、本人回復過程の中で、ひきこもりと実社会中間領域、いわばリハビリテーションが出来る場を立ち上げる取り組みを支援することが重要」と提案しています。

田辺市ひきこもり検討委員になってこの1年

田辺市 生涯学習課 小川 雅則

ひきこもり検討委員になったものの、恥ずかしながら当初は、「ひきこもり」について、精神障害が原因で起こる特別な状態であるとの認識しか無かった。

検討委員会で、ひきこもりの当事者、その家族、支援者の方々の話を聞き、初めてひきこもり状態の苦しみ、葛藤を肌で感じる機会を得た。また、相談される方々が多いのにも驚いた。

そんな中、昨年12月に思春期講演会として斎藤環先生の講演会を拝聴した。「社会的ひきこもり」の定義として先生は著書において、20代後半までに問題化し、6ヶ月以上自宅にひきこもって社会参加をしない状態が続いている、ほかの精神障害がその第一の原因とは考えにくいとしている。先生の定義を読んで、初めて「社会的ひきこもり」とはどういうものを理解することができた。

また、斎藤先生は「社会的ひきこもり」は不登校から長期化するケースがあり、ひきこもり事例は100万人は超えていると考えているそうで、これはもはや大きな社会現象ととらえていいのではないだろうか。

しかし、私もそうだったように、社会的認知の不足、それに関わる支援者の不足など、課題は大きい。

この1年間検討委員会に参加させていただき、事務局の真摯な取り組み、関係者の

皆さんの熱意に感心させられることばかりでしたが、私も今後ますます情報を共有し、皆さんと力を合わせて、今後の支援のあり方について検討していかなければならないと考えている。

田辺市になってこの1年「ひきこもり」について

本宮行政局 保健福祉課 倉谷 光穂

平成17年度では、ひきこもり講演会を開催し、延べ42名の参加があり、理解を深めることができました。また、ひきこもりでの相談も2件あり、1件は、田辺市での相談窓口へつなげ、また1件は、保健所での精神相談事業へとつなげ、支援をしているところです。

このように、ひきこもりでの相談が、合併までは、保健所への相談だけだったのが、市の相談窓口や、他の社会資源（家族会・居場所・自助会など）の活用など広がっていることが、保健師として支援していく上で、とても心強いです。

また、検討委員会を設置し、関係機関が相互に連携して一体となって取り組むことも大きな意義があると思います。これからも、検討委員の方と連携しながら、ひきこもりの方への支援をしていきたいと思っています。

中辺路行政局 保健福祉課 川口 江美子

青少年がひきこもる原因は多様とは思いますが、また、その経過においても一時的なものから心の病をも範疇にいった観察が必要なもので多岐にわたります。いずれにしても人の発達過程において大切な時期が停滞しているように感じられ、本人の苦悩はもちろんのこと家族のあせりもいかほどかと思っています。

このようなとき、行政保健師としてどのように支援していけばよいのかと自問自答したとき、結局のところは自ら道を切り開く状況（環境）を整えていくことなのかと考えております。その意味において、ひきこもり検討委員会のなかでの支援体制づくり、あるいは自助グループ「知音」家族で形成する「ほっこり会」の存在は、意義ある会と心強く感じております。

一保健師としては微力ですが、ひきこもり渦中で苦悩されている方、それを見守る家族、皆様のご意見を頂きながらその支援体制の一助を担うことができれば幸いに存じます。

最後に、ひきこもりの講演等では、単にひきこもりの研修というだけでなく、人としての生き方を考える事があります。このような機会にご尽力頂いたひきこもり検討委員会の皆様に厚くお礼申し上げます。

II. 田辺市ひきこもり検討委員、行政局担当者感想

「田辺市ひきこもり検討委員になってのこの1年」

大塔行政局 学識経験者 尾崎 史予水

大塔行政局 学識経験者 谷口 敬子

大塔行政局 保健福祉部 松本 敦子

ひきこもり検討委員になって1年、事務局はじめ他の委員さんの熱意に感動しているうちに、何もしないまま1年がたってしまったというのが正直な感想です。

この1年の間にひきこもりの知識や考えはとても深まったように思いますが、委員として地域にどのようなことができるのか、何をすべきなのかはまだ、よくわかりません。

大塔行政局の委員さんの中には、相談があれば「田辺市の健康増進課で相談にのってくれるよ」と紹介して活動している方もおられますが、まだ、ひきこもり検討委員の認知度は低く、多くの相談が持ち込まれるようにはなっていません。

会議でも出されていましたが、我が地域でも不登校からそのままひきこもりにつながるケースがみうけられます。

希望としては学校を卒業した人を対象にするのではなく、もう少し早くから、より学校と連携を密にし臨機応変に対応できる状況が整えば、なおすばらしい活動へと発展していくのではないかと思います。

田辺市のひきこもり支援の運動がより強く、大きくなっていくために何ができるか考え微力ながら活動していけたらと思います。

「ひきこもり」検討委員会に参加して

龍神行政局 保健福祉部 後藤 光代

平成17年5月合併以来「ひきこもり」検討委員会の行政局の担当をさせて頂き、合併前には詳しく分からなかった、「若者を取り巻く問題はひきこもり問題からニート問題と様々に形を変えて社会に訴えかけられている」現状が学習でき、又、支援ネットワークや社会資源等についても改めて修得できました。

特に行政局では、2回の講演会を開催し、民生委員協議会や学校関係者の方々が参加し医師による専門的な講話や当事者の方からの体験講話については、参加者からは「わかりやすかった」「正しく理解できた」「これからは地域で支援をしていこう」「他の人たちにも聞かせたい」「民生委員協議会でも今後取り組んで行こう」等の感想が後日聞かれました。

行政局としては、新年度も是非、地域での啓発のための活動が展開できるように健康増進課と連携をとり、取り組んで活きたい。

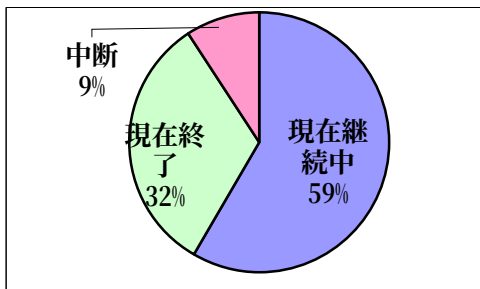
①. 相談実績 i. 過去5年間の実績

田辺市ひきこもり相談窓口開設以降5年間（平成12年～平成17年）の相談実件数は309件であり、背景を見極め適切な関係機関等の紹介や継続支援をしてきた。以下は相談窓口が支援の対象として3ヶ月以上継続支援をしたケース（65件）の背景と状況をまとめてみた。

過去5年間で3ヶ月以上継続した実件数…65件

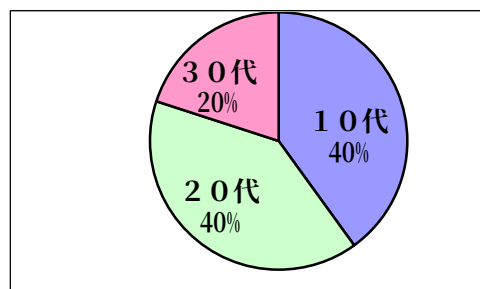
○現在の状況（65件中）

現在継続中	38 件
現在終了	21 件
中断	6 件



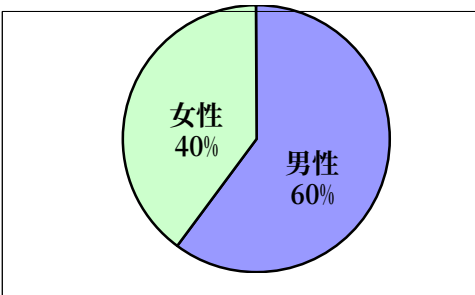
○相談時点での本人の年齢（65人中）

10代	26 人
20代	26 人
30代	13 人



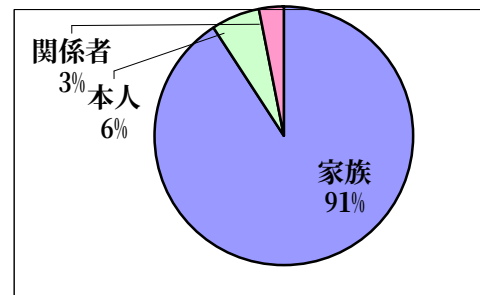
○男女比（65人中）

男性	39 人
女性	26 人



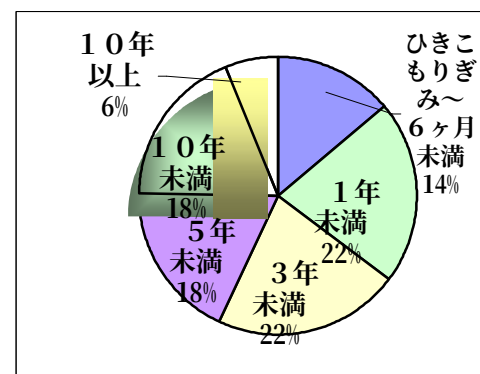
○初回相談者（65人中）

家族	59 人
本人	4 人
関係者	2 人



○ひきこもり歴（65人中）

ひきこもりぎみ～6ヶ月未満	9 人
1年未満	14 人
3年未満	14 人
5年未満	12 人
10年未満	12 人
10年以上	4 人



○継続相談後、診断がついた事例

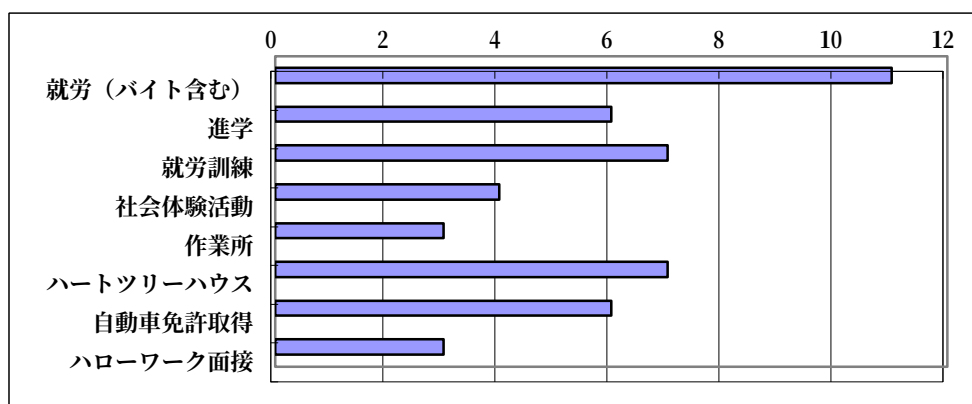
支援を継続していく中で精神疾患や知的障害を疑い、医療機関へ受診につながるまでに時間を要することがある。

精神疾患	5 人	（内4件終了）
軽度発達障害	2 人	
知的障害	3 人	（内2件終了）

○社会的行動の変化

継続相談の中で、窓口（相談や青年自助会）以外の社会的行動の変化がみられた事例は26例ある。以下はその内訳（重複あり）

就労（バイト含む）	11 人	（自動車免許取得後就労2名、ハローワーク面接後就労1名）
進学	6 人	（アルバイト後進学1名）
就労訓練	7 人	（自動車免許取得後就労訓練1名、進学後就労訓練1名）
社会体験活動	4 人	
作業所	3 人	
ハートツリーハウス	7 人	
自動車免許取得	6 人	
ハローワーク面接	3 人	（単車免許取得後ハローワーク面接1名）



○まとめ

家族の相談を継続する中で本人に出会うことがないままに本人が自宅中心の中から社会的な行動へと変化していく事例も少なくない。支援の出口としての選択肢の一つの就労では、11事例中6例が本人と会うことはなかった。また、進学についても3事例中1例がそうであった。

本人面接につながり、自助会に通い始めると仲間の中で刺激を受けて次々と自動車免許を取得し始め、取得後、就労訓練や就労につながりだした事例も多い。支援者の方から面接の中で、就労や進学をすすめるということではなく、本人の自発的な気持ちに添いながら希望に応じてハローワークの面接などにつないでいる。

5年間の継続支援の状況をまとめる中でひきこもり支援における家族支援の有効性と本人に出会えたときには、仲間とおしの支援が彼らにエネルギーをもたらし、次の行動へのステップとなっていることを実感する。

① 相談実績 ii. 平成17年度

相談窓口開設以降平成18年3月末までに、293家族 309件の相談あり。

(内 平成16年度までに244家族 255件)

○ 年度別相談件数

	H13	H14	H15	H16	H17
実件数	44	79	89	105	86
述べ件数	138	337	481	1097	1090

《平成17年4月～平成17年9月までの状況》

○ 月別相談件数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	上半期合計	
電話	47	30	31	13	13	46	180	
来所	46	34	59	41	41	48	269	
メール	22	25	22	21	17	26	133	
訪問	2	2	2	2	2	6	16	
合計	117	91	114	77	73	126	598	
	10月	11月	12月	1月	2月	3月	下半期合計	総合計
電話	15	25	22	14	21	17	114	294
来所	49	49	39	47	36	54	274	543
メール	6	23	12	16	19	16	92	225
訪問	3	4	2	2	0	1	12	28
合計	73	101	75	79	76	88	492	1090

○ 相談件数

	実 件 数		延べ件数	(内訳)
	初 回	継続初回		
電 話	32	10	294	(69)
来 所	16	22	543	(60)
メー ル	6	0	225	(18)
訪 問	0	0	28	(7)
合 計	54	32	1090	(154)
	86			

医師による相談 (4件含む)

○ 相談者 (初回)

母	父	両親	本人	兄弟姉妹	祖父母	親戚	関係者	その他
23	6	0	7	4	1	0	12	2
計	関係者・・・医師、教師、市職、検討委員、保健師、ケースワーカー							
55	1件が重複。内訳・・・母と兄弟姉妹 1)							

○ 相談者 (継続初回)

母	父	両親	本人	兄弟姉妹	祖父母	親戚	関係者	その他
18	1	1	17	0	0	0	1	1
計	関係者・・・教師							
39	7件が重複。内訳は母と本人 6)、本人とその他 1)							

Ⅲ-①-ii. 相談実績 (平成17年度)

○ 相談者(延べ)

母	父	両親	本人	兄弟姉妹	祖父母	親戚	関係者	その他
338	50	33	671	45	2	10	18	4

計 関係者・・・医師、教師、市職、検討委員、保健師、ケースワーカー

1171 81件が重複。以下は内訳

本人、母 57) 本人、兄弟姉妹 2) 本人、その他 1) 父、親戚 2)
 本人、父 1) 本人、親戚 2) 母、兄弟姉妹 8) 兄弟姉妹、親戚 1)
 本人、両親 2) 本人、関係者 1) 本人、母、兄弟姉妹 2)

○ 年代別男女別件数(86件中)

	～10代	10代	20代	30代	40代	年齢不明	計
男	2	11	22	15	2	0	52
女	0	11	13	2	0	3	29
性別不明	0	1	0	0	0	4	5
計	2	23	35	17	2	7	86

○ 居住別(86件中)

市内	53
市外	29
不明	4
計	86

○ 相談結果(86件中)

継続	38	継続	相談の継続、自助G、家族会、HTHの利用者を含む
終了	1	終了	就労
中断	2		
紹介	6	紹介先	精神保健福祉センター 2) 教育研究所 2)
その他	39		ハートツリーハウス 1) 病院 1)
計	86	その他	関係者からの相談のみ 8) 本人、家族から相談のみ 30) 既に利用機関あり 1)

《継続について》

○ 継続分類(38件中) ○ 継続状況(重複あり) ○ 居住別(38件中)

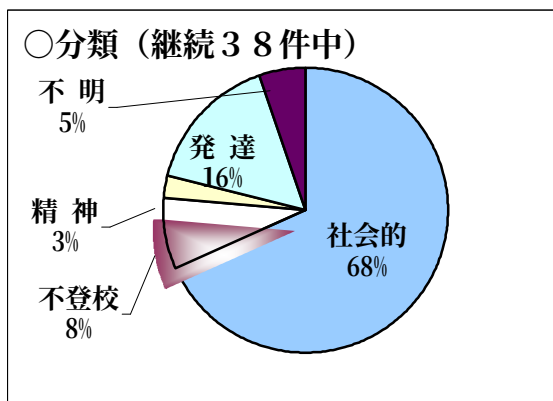
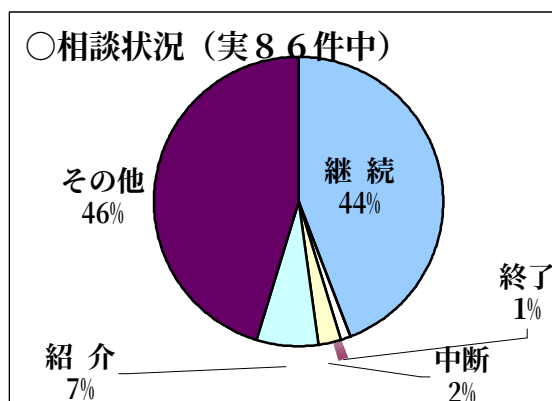
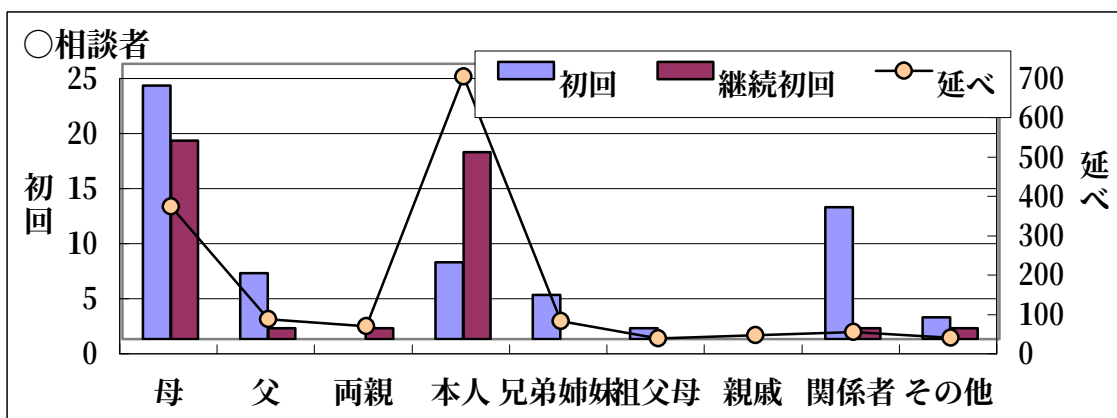
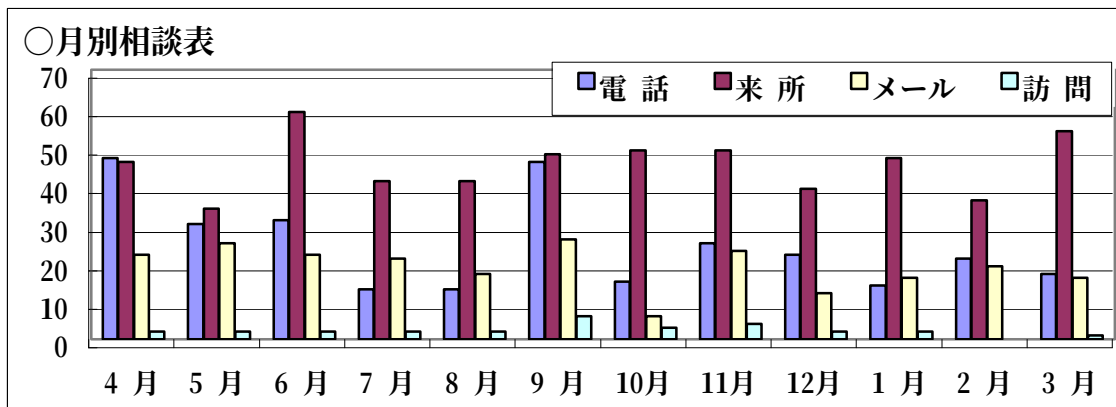
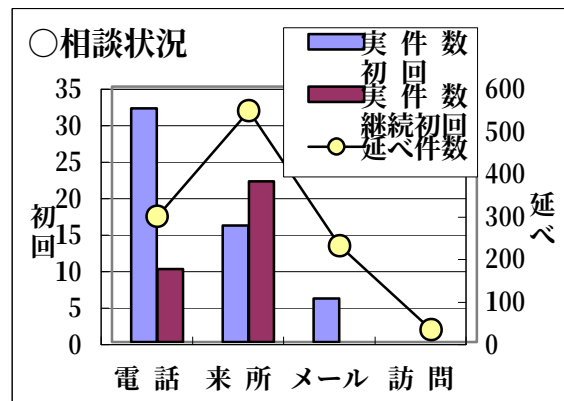
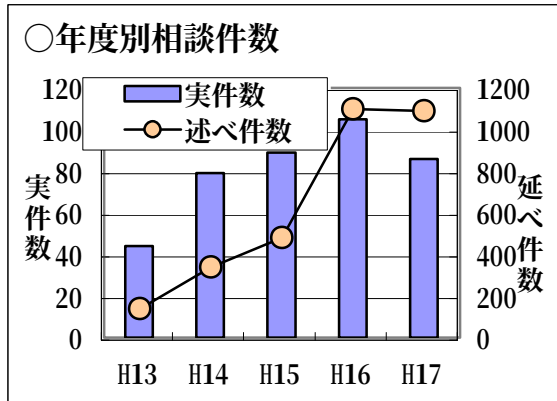
社会的	26
不登校	3
精神	1
発達	6
不明	2
計	38

自助会	13
家族会	12
医療	19
ハート	2
就労	4
その他	13
相談のみ	8

市内	27
市外	11
計	38

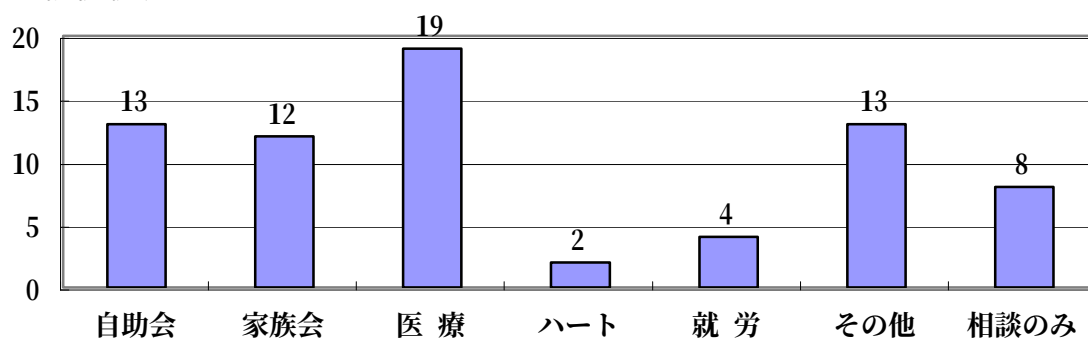
○ 年代別男女別件数(38件中)

	～10代	10代	20代	30代	40代	年齢不明	計
男	1	4	8	8	0	0	21
女	0	7	8	2	0	0	17
性別不明	0	0	0	0	0	0	0
計	1	11	16	10	0	0	38

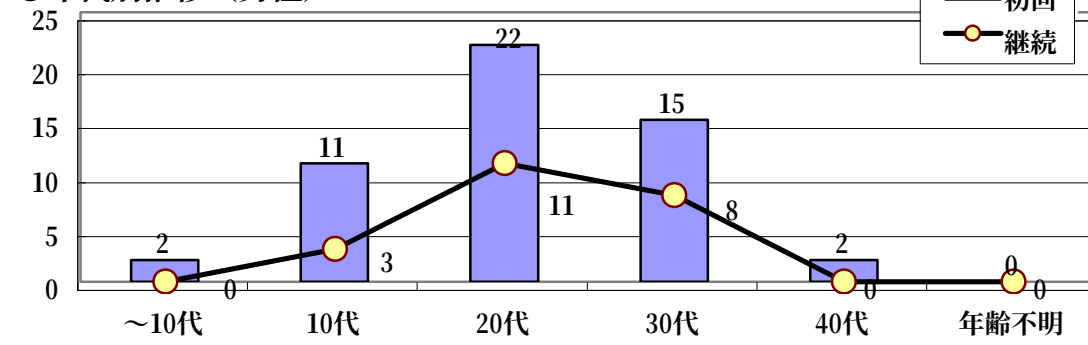


Ⅲ－①－ⅱ．相談実績（平成17年度）

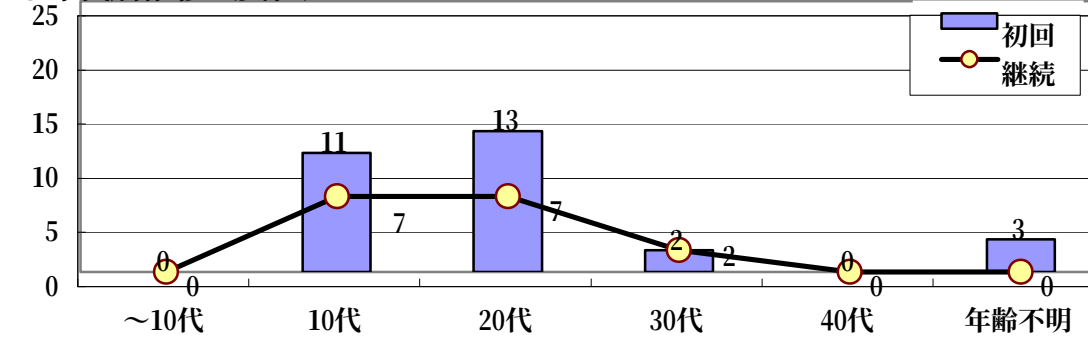
○継続状況



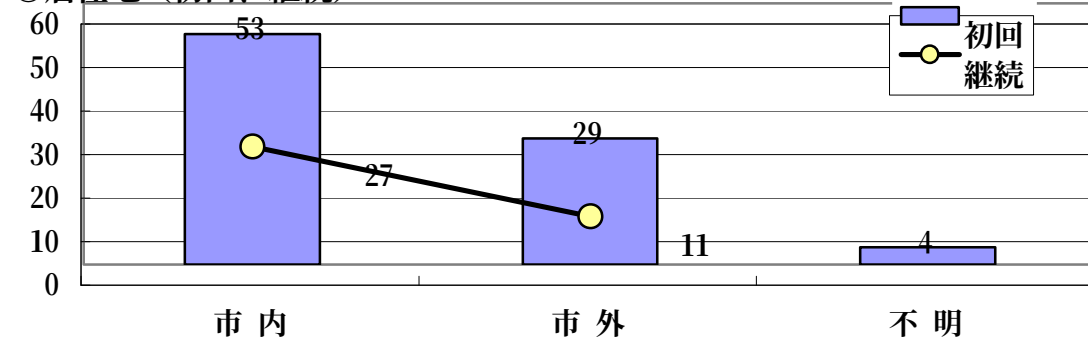
○年代別推移（男性）



○年代別推移（女性）



○居住地（初回、継続）



③. 家族会実績

ほっこり会 (紀南地方社会的ひきこもり家族の会)

(平成16年4月より自主運営)

定 例 会 実 施 日		内 容	出 席 者				参加数	参加 家族数	対象 家族数
			父	母	その他	窓口			
H17.4.12	午前	話し合い	3	10	0	2	15	10	13
H17.5.10	午前	話し合い	3	9	0	2	14	10	
	午後	話し合い	3	5	0	2	10	6	
H17.6.14	午前	話し合い	4	6	0	2	12	8	
H17.7.12	午前	知音代表による体験発表	4	7	3	2	16	9	
	午後	みらいの会より話	2	7	3	2	14	7	
H17.8.9	午前	話し合い	3	6	1	2	12	7	15
	午後	話し合い	2	3	0	2	7	3	
H17.9.13	午前	福祉まつりについて	3	5	0	2	10	6	
	午後	話し合い	2	4	0	2	8	4	
H17.10.11	午前	福祉まつりについて 準備	4	7	0	2	13	8	16
	午後	カラオケ	3	3	0	0	6	4	
H17.11.8	午前	話し合い	5	9	0	2	16	11	17
	午後	話し合い	2	4	0	1	7	4	
H17.12.13	午前	話し合い	5	6	0	2	13	9	18
	午後	食事会／カラオケ	5	5	0	2	12	6	
H18.1.10	午前	話し合い	4	6	0	2	12	8	19
	午後	話し合い	3	4	0	0	7	5	
H18.2.14	午前	話し合い	3	9	0	2	14	11	
	午後	話し合い	4	1	0	1	6	4	
H18.3.14	午前	総会	5	10	0	2	17	11	
	午後	話し合い	4	9	0	2	15	9	
		平 均	3.45	6.14	0.32	1.73	11.64	7.27	
イベント									
H17.6.12	午後	親父の会	5				5	5	5
H17.10.9	1日	宮西先生、上山和樹さん講演	2	2	8	1	13	2	15
H17.10.23	1日	おもいっきり福祉まつり	3	6	4	1	14	6	15
H17.12.18	午前	交流会	4	8	3	2	17	9	18
H18.2.19	1日	エルシティオ全国大会	1	4	12	2	19	4	19
H18.2.24	午後	みらいの会 交流会	1	0	16	2	19	1	
H18.3.25	1日	京都 しごと館	1	5	17	2	25	5	

Ⅲ－②. 家族会 （女性の親の家族会）

女性の親の会（市で実施）

実 施 日		内 容	出 席 者				参加数	参加 家族数	対象 家族数
			父	母	その他	窓口			
H17.4.26	午前	話し合い	0	4	0	2	6	4	5
H17.5.25	午前	話し合い	0	4	0	2	6	4	
H17.6.28	午前	話し合い	0	4	0	2	6	4	
H17.7.26	午前	話し合い	0	3	0	2	5	3	
H17.8.23	午前	話し合い	0	5	1	2	8	5	6
H17.9.27	午前	話し合い	0	1	0	2	3	1	
H17.10.25	午前	話し合い	0	2	0	2	4	2	
H17.11.22	午前	話し合い	0	2	0	2	4	2	
H18.1.24	午前	話し合い	0	3	0	1	4	3	
H18.2.28	午前	話し合い	0	3	1	2	6	3	
H18.3.28	午前	話し合い	0	2	0	2	4	2	
平 均				3.11		1.89	5.11	3.11	

③. 自助会実績 (月2回の集まり)

実 施 日		内 容	出席者	実数	対象数
H17.4.5	午前	自助会の名前決め	5	8	10
	午後	『自分のこと、語れるか』	7		
H17.4.19	午前	近況について	2	8	
	午後	『今、一番悩んでいること』 (言える範囲で)	8		
H17.5.17	午前	近況について	1	2	
	午後	恋愛話	2		
H17.6.7	午前	友について 親の理解について	2	5	
	午後	仕事について イベントについて	5		
H17.6.21	午前	近況について 食べ物の好き嫌いについて	2	2	
	午後	近況について	1		
H17.7.5	午前	近況について	2	3	
	午後	知音について	3		
H17.7.19	午前	近況について	2	3	
	午後	異性について	3		
H17.8.4	午前		0	1	
	午後	近況について	1		
H17.8.18	午後	知音について 『今、一番悩んでいること』	7	11	
H17.9.1	午後	知音について 近況について	2		
H17.9.15	午後		0		

実 施 日		内 容	出席者	実数	対象数
H17.10.6	午後	学校はおもしろいところなのか 『どうすれば本音で語れるか』	5		11
H17.10.20	午後	交流会準備	6		12
H17.11.17	午後	古道ヶ丘について	10		14
H17.12.1	午後	お金について	10		
H17.12.15	午後	交流会の準備	9		
H17.12.18	交流会	斎藤環・上山和樹 交流	8		15
H18.1.5	午後	交流会の感想	4		
H18.1.19	午後	みらいの会交流会の打ち 合わせ	11		16
H18.2.1	午後	仕事について』	7		
H18.2.16	午後	交流会準備／人と話すこと	9		
H18.2.24	交流会	京都みらいの会と交流会	10		
H18.3.2	午後	交流会感想	7		
H18.3.16	午後	自助に来てみて	7		
平 均			4.94		

Ⅲ－③. 自助会実績 (女性の会、30代の会)

○女性の会実績

実 施 日		内 容	出席者	対象数
H17.4.26	午前	車の免許 いじめについて 親の関わり	5	6
H17.5.24	午前	近況について	4	
H17.6.28	午前	好きなものについて	4	
H17.7.26	午前	女性の会について 親について	2	5
H17.8.23	午前	家族の会に合流	1	
H17.9.27	午前		0	
H17.10.25	午前		2	
H17.11.22	午前	自助会について／年齢について／友だちについて／自動車免許について	3	
H18.1.24	午前		0	
H18.2.28	午前	家族の会に合流	1	
H18.3.28	午前		0	
		平 均	1.00	

○30代の会実績

実 施 日		内 容	出席者	対象数
H17.4.26	午後	近況について	1	4
H17.5.24	午後		0	
H17.6.28	午後	遊びについて 恋愛について	2	
H17.7.26	午後	ひきこもりについて 家族について	1	
H17.8.23	午後		0	
H17.9.27	午後	知音について 当事者の語りについて	1	
		平 均	0.83	

○知音（自主運営、参加要請の場合に参加）

年.月.日	内 容	参加人数	年.月.日	内 容	参加人数
H17.4.6	これからの知音をどうしていくか 話し合い	4	H17.10.5	話し合い	3
H17.4.13	話し合い	4	H17.10.12	話し合い	1
H17.4.20	話し合い	3	H17.10.19	話し合い	1
H17.4.27	話し合い	2	H17.10.26	話し合い	2
H17.5.4	話し合い	2	H17.11.2	話し合い	2
H17.5.11	話し合い	2	H17.11.9	窓口担当者不参加のため利用者不明	
H17.5.18	話し合い	2	H17.11.16		
H17.5.25	話し合い	2	H17.11.30		
H17.6.1	話し合い	3	H17.12.7		
H17.6.8	話し合い	5	H17.12.14		
H17.6.15	話し合い	5	H17.12.21		
H17.6.22	話し合い	4	H17.12.28		
H17.6.29	料理（カレー）	4	H18.1.11	話し合い	2
H17.7.6	話し合い	4	H18.1.18	話し合い	2
H17.7.13	話し合い	5	H18.1.25	話し合い	3
H17.7.20	話し合い（集習生1名参加）	6	H18.2.1	卓球	3
H17.7.27	カラオケを予定するが人数が 少ないため中止して話し合い	3	H18.2.8	卓球	4
H17.8.3	話し合い	3	H18.2.15	話し合い	6
H17.8.10	話し合い	2	H18.2.22	話し合い	5
H17.8.17	話し合い	2	H18.3.1	話し合い	4
H17.8.24	話し合い	3	H18.3.8	話し合い	4
H17.8.31	話し合い	3	H18.3.15	話し合い	4
H17.9.7	話し合い	5	H18.3.22	話し合い	5
H17.9.14	話し合い	3	H18.3.29	花見 / 話し合い	6
H17.9.21	話し合い	1	平 均		3.26
H17.9.28	話し合い	1			

交流会（１）、斎藤環先生、上山和樹さんを迎えて

日 時：平成 17 年 12 月 18 日 午前 10 時～午前 12 時
場 所：田辺市民総合センター 4 階 交流ホール
参 加 者：斎藤環先生、上山和樹さん、自助会メンバー 8 名、
ひきこもり検討委員 2 名、窓口担当 2 名

内 容：

《はじめに》

司会（メンバー）：田辺でこんなに雪が降るのは何年ぶりでしょうか。去年は京都オレンジの会と交流会をしました。僕が自助会に参加したのは去年の 4 月くらいからで体験を語り合ったりしています。本日は各自担当をもって進行をしていきます。まずははじめのあいさつ、お願いします。

あいさつ（メンバー）：みなさん、こんにちは。知音の副代表をしています。斎藤先生、上山さん、本日は田辺市まで来ていただき、ありがとうございます。本日は、相談窓口の行事のひとつとして、私たちメンバーが支援者とともに企画した交流会です。心ゆくまで交流がはかれたらと思っています。最後までお付き合い下さいますようお願いいたします。

司会（メンバー）：ありがとうございました。続きまして来賓紹介をお願いします。

来賓紹介（メンバー）：斎藤先生、上山さん、遠いところからありがとうございます。まず、斎藤先生、昨日も講演会、ありがとうございました。次は上山さん、後で体験発表の方、よろしくお願いします。次は田辺市ひきこもり検討委員さんです。布袋さん、田辺市ひきこもり検討委員副委員長です。元高校の教員で田辺市にある定時制高校で長く勤められました。栗田さん、田辺市ひきこもり検討委員さんです。田辺保健所の精神保健福祉士です。今日はご出席ありがとうございます。

スケジュール説明（メンバー）：今日一日皆さんで交流を深めていくにあたって本日のスケジュールについて説明します。まずこの後全員の自己紹介になります。次に体験発表になります。まず上山さんをお願いしてその後自助会メンバーをお願いします。その次は「体験を話すこと、聞くこと」というテーマで意見交換をしたいと思います。時間は一時間を予定しています。話し合いの後、斎藤先生からのコメントをいただき、斎藤先生、上山さんに色々聞かせてもらって検討委員さんからも一言いただきたいと思います。終わりのあいさつの後、皆さんでこの部屋を片付けてもらって 12 時には終了したいと思います。あと、今日一日ではなかなか名前を覚えられないと思いますのでこの会場にいる間は名札をかけておいて下さいますようお願いいたします。名札は終了時にお返しください。また、今日のスケジュールには休憩時間をとっていませんので疲れたりトイレに行きたいときなどはご自由に席をはずしてもらっていいのですが、全員の自己紹介が終わってからにしてください。休憩できる控え室として隣の会議室を用意しています。本日は最後までお付き合いよろしくお願いします。

《来賓自己紹介》

栗田委員：保健所で精神保健福祉士をしていてこころの健康相談を受けています。8年ぶりに田辺に来ました。その前は民間の精神科でケースワーカーをしていました。こうして田辺に戻ってきて、みんなの集まりの場が増えてとても楽しみに思っている。今日はよろしくお願いします。

布袋委員：2年前に先生を辞めた。今は色んなことやってる。この間、次男の息子が僕の誕生日と同じ日に生まれた。僕と同じ誕生日ならしぶとく生きると思っていた。でも3日間しか生きられなかった。いろんな障害をもっていたが結局生きられなかった。親父は96歳で生きている。お袋も91歳で生きている。親父は全盲で目が見えない。でも生きている。この間生まれた子は3日で亡くなった。不条理と言うか何と言うか。どう考えたらいいかわからないが、でも僕は根が元気で明るいからめげずにがんばる。検討委員会は2年やらせてもらっている。今日はよろしくお願いします。

上山和樹さん：上山と申します。始めまして。今日はお招きいただきありがとうございます。非常に光栄に思っています。僕は37歳です。ひきこもりの体験をずっと隠していたんですが、自分がかんばってしゃべることでは何かできる活動はないかと思ってチャレンジしている。よろしくお願いします。

斎藤環先生：おはようございます。斎藤です。今は千葉の佐々木病院で精神科医をしています。その傍らで呼ばれれば講演に出て行くし、頼まれれば文章を書いている。ひきこもりに関わり始めたのは随分前で1986年のとき。最初からそういう状態の人たちに会う機会があった。1998年に「社会的ひきこもり」という本をだして、当時は反響なかったが、2000年にいろんな事件があり、広まった。ひきこもり問題というのは今までは精神医学として、治療の対象として治すべきものとして関わって来ざるをえなかった。しかし、それだけではない、いろんな問題意識が絡み合い複雑な問題になっている。だんだん認識が変わってきている。普段はひきこもりの方は患者さんとして接しているが今日は直にお話ができる事を非常に楽しみにしています。

《上山和樹さん体験発表》

中学2年で心身症がひどくなった。一番苦しかったのは下痢症状。精神的な緊張感や動揺が身体の方にきてしまう。こころと体の関係が壊れてしまい、どうしても人の流れに乗っていきなかった。あえてしんどさを言葉で表すとすれば、「自分をどうやって支えていいかわからない」という感じ。小さい頃から、「こうしなくちゃいけない」という凝り固まった考えを持っていたと、10代の半ばくらいに気がついた。最初14歳で心身症が始まったとき、このままだと社会から脱落してしまう、とおびえていたが、だんだんと「自然にやりたいことをやろう」と思うようになった。でも何がしたいのかがそもそもわからなくて、自分のやりたい事を合理的に根拠付けようと思った。自分を説得できるものを一生懸命探した。みんな自信を持って生きているように見えて、自分だけ自信がないように思えたから。一人になったとき、どうしていいかわからなかった。それで自分を支えるため、「自分はこれでいいんだ」と思える根拠を探した。家にずっといると怠け者にしか見えないと思うが、実は一生懸命探していた。探す作業は、探せば探すほど苦しくなる。今日はこうやって呼んでもらえたり活動をし

ているが、かっちり納得してわかったことをやっている、というわけではなくて、自分ではまだよくわからないまま、これでいいのかな、と思いながら、でもやっている。

「どうやって自分を説得できるか」というのは変な言い方だが、「これでいいんだ」と思えないと、自分を支えられない。常に、自分が消えてしまいそうな苦しさがある。僕が今日いちばん言いたいのはこの部分です。

《自助メンバー体験発表》

自分は26歳。20歳まで専門学校。卒業して、自動車会社で仕事をするようになった。3年間整備士と1年営業をした。職場で複雑な人間関係があり苦しいな、と思っていた。「このまま仕事辞めようか、死んでしまおうか。」と考えるようになってきた。たまたま同業者に相談すると、「もうやめなさい。」と言われ、田辺に帰ってきた。田辺で就職活動をしないといけないが、失業保険ももらいに行けず、苦しすぎてどうかなってしまうんじゃないかと思っていた。こういうときは人と目を合わせるのができない。映画好きだが借りにも行けなかった。そうしたとき、田辺で相談窓口がある事を知る。しかし、母親はそういうところに相談に行く人間ではない、と考える人。親には黙って相談に来ていた。相談を繰り返すなかで自助会に来ることになった。そこでこんな苦しい思いをしている人が他にもいるんだなとわかった。ここに関わってみようかなと思うようになった。そして徐々に人の関わりが広がっていった。たまたま、中学の塾の先生に会うことになり、そこで働かせてもらうようになって、週に3回行ってる。他にも音楽のつながりができた。この自助会を独立できるようにしようということで代表している。

（以下、話し合った内容になりますが、自助会メンバーの発言には(メ)、上山さんは(上)、斎藤先生は(斎)と表します。また自助会メンバーの発言は複数です。）

《自助会テーマ：「体験を話すこと、聞くこと」》

- (メ) 話している時緊張しているが、自分の体験発表が活字になったものを目で追うとこれが一人の人生かと思う。ありふれている。大した人生ちゃうやん、と思う。客観的に見るとどこにあってもおかしくないひきこもりに至る状況で悩んだ何年間やったんやなと思う。自分のことなのに全く別人の体験を批判するような視点で見ることができた。
聴くにもエネルギーいる。自分がひきこもっているときは他人の辛いこと聴きたくないなと実感があったが、今は体験を話す立場になったという変化があった。
- (メ) 人の話を聞くと人には色々あった歴史があったんやなと思う。自分のしてきたことを聞けるし、自分のしてきたことを振り返れる。バランスの問題。聞いたり、言うことは大事なこと。小さい頃のこと、こんなことしたなあと反省もできる。これはプラスになる。自分が話すときは暴走とめてくれ。
- (メ) 体験を聞いてみて同じ考えの人いると思うと安心できる。自分を責めないで大丈夫なんだなと思える。だから人の話を聞くことはいいことだと思う。最初は出てくるのも大変だったけど、回を重ねるごとに来ることにも慣れてきた。

- (メ) 他の人と同じ意見で、話すときは緊張する。(他人の話を聞くにはエネルギーが要りますか?) そこはあまり共感できないというかわからない。聞いても苦にならないが他人の話は聞いていないことが多い。人に自分から話すことは得意でない。自分の体験は言いにくい。普段の会話は緊張することもあるが場の雰囲気による。職場実習でも、人の持つ雰囲気ですやすやすが違う。
- (メ) 自分は自分の事を言うのは苦手。他の話は別にいいけど、体験になってくるとはぐらかしたり茶化したりする。他人の話を聞くのもしんどい。聞くと思ひ出したり、つらくなったりする。そうすると自分の事を冷静に見られてないと感じる。最近まで人の体験談を聞いたことなかったし、自分のことを話した事もなかった。自分のことを話せないのは、客観性をもたないと伝わらないから。自分の中で整理できていないことを口にしても相手が理解しようとしても難しいと思う。だから考えてから口にしないと自分では嫌。言いたくないわけではない。いろんなことが混同して一気に話してしまう。それだと聞いてもらう人に悪いと思う。話し出すと考えられなくなるから話す前に考えておかないと自分がしんどくなる。
- (上) みなさんがおっしゃることはすごく身に染みて、いろいろ思い出してしまうので、つらい面も正直あります。僕が公の場所で話すようになったきっかけは、5年半前の親の会です。親御さんたちの前で、自分の体験や考えていることを話したんですが、驚くような反響があった。「いい話だった」と。皆さんは気づいていないかもしれませんが、こういった当事者の声は、ひきこもりの子を持つ親が一番聴きたいことのように思われます。なるだけ丁寧に自分の内面事情を話したことで、すごく重宝された。ただ、聞いてもらえるのはうれしいが、体験を丁寧に話すことは、自分の傷をいちいちナイフでえぐることにもなる。話して馬鹿にされるかもしれない。いろんなことから、もっと聞きたいと言われる。でも活動を続けるうちに、あまりにしんどくて、耐えられないなと思う中で、「このしんどさは何だろう」と抽象的・客観的に考えるようになった。自分のつらい話をそのまましても、自分を痛めつけるだけ。
- しかも、それが直接人の役に立つ情報とは限らない。だから、自分の苦しみを通過させつつ、なるだけ一般的・普遍的に語るように努力した。そのような語り方は、誰かに教わったというより、きちんと客観的に語る努力をしないと、自分が耐えられないから。まずは自分の必要です。距離を置くことで、自分の苦しみを少し冷静に見れる。僕は言葉を使うことで、人とのつながりができたんだと思う。がんばって考えたこと、喋ったことが、人とのつながりを作ってくれた。もちろん、それを認めてくれる方々がいたからです。自分が本気で頑張ったことを評価してくれる人たちのお付き合いは、これまで体験したことのないものだった。今日もここにいるのはそういうつながり。まずは自分の苦しいのを聴いてもらう。次は自分はこう思うんだけどみなさんはどう思います? と提案する。重要なのはとにかく「言葉」。しんどくなる状況とは、言葉が使えなくなる状況。絶句して、言葉にならない。しんどいことを言葉で触ろうとすると、耐えられない。どうやって言葉にしたらいいのか。訓練が必要と思う。何かを頑張って言葉にし、それを人に伝えるとは、一種の賭けだと思う。ギャンブルみたいなもので、失敗するかもしれない。今でも、そういう言葉の努力を全面的に否定されることがあるし、笑われることもある。そう

というのは、死ぬまでなくならないと思う。僕は元気に見えるかもしれないが、何も「解決」したわけではない。チャレンジしながら訓練している感じ。たまに分かってくれる人がいて、そういう時は本当にうれしい。逆に、グサッと言われることもある。でもこういう努力なしでは僕は生きていけない。大げさかもしれないが、「言葉」がなかったら生きていけない。

僕は、自分の経験や考えたことを人前で出しているが、みなさんはここに来てくれているだけだと思いますが、みなさんにとって自分の事をしゃべったほうがいいのか、新しく出会う人には話さないほうがいいのか。皆さんは、自分のことを話したいですか。みんなには言いたくないが信頼している人には言いたいとか。それでしんどくなったりしないですか。アルバイトは、履歴書に正直に書いたら落とされる。「不登校」は許されるけど、「ひきこもり」は許されない。言っちゃうとアウトになることがある。本を出すまでのことはすごく細かく告白したが、その後のことはあまり言いたくない。

- (メ) うそをついてまでできない。就職、隠さない。それほどつらい体験かと言えばここをえぐられるほどでもない。両親が分かってくれなかったことが一番辛かった。僕は誰かに言われたというわけではなく自分で追い込んでしまう。当時は振り返りたくなかった。今は振り返るときは振り返る。必要なとき。「つらいときは忘れなさい。」と言われるがじぶんにとっては忘れないことがずっとポジティブ。つらい人生も自分の人生の中で忘れない。つらい思い、感情、人生、忘れるというわけにはいかない。自覚するほうがずっとポジティブ。
- (メ) カミングアウトするかしないか。ひきこもりになったわけでない。仕事、友だち、ねずみ講、・・・考え込んで眠れなかった。いろんなところの精神科。めちゃくちゃ言われた。先生が嫌いになった。頼っているが。パソコン、民間カウンセリング、インターネット。インターネットで自分の病気を調べて東京のカウンセリング。1年半で月に2～3回。グループセラピー、自分の解決策。人に言っていること、言わないこと。ガイドライン決めている。Dr不信多い。今の薬を飲み続けたらパーキンソンになると言われた。ショックだった。Drとの信頼関係を積むこと。
- (メ) コミュニケーション、受容。自分が聞いてほしい。一番聞いてほしいことを聞いてくれる人がいること。ひきこもったのは親の言葉「なぜ前を向かんのか。前を向かないとお前は生きていけん。」「なぜ働かないのですか？仕事をしないのか？」履歴書正直に書く。空白を問われる。感じたまま説明するがわかってくれない。わかってくれなくて殻に閉じこもる。死んでしまいたい。自殺未遂したことある。生きていくだけでしんどい。殻に閉じこもり自分で整理。自分で探していく。生きていくこと。受容が一番大切なこと。聞く側も話す側も。どこか一つ欠けているとどちらかが崩れる。人を信頼したくなくなる。伝えたいからコミュニケーションが大事。初めは伝えたいとは思わなかった。でもここで目良さんと面接を重ねると伝えたいという気持ちになった。伝えたいのは特定な人だけ。心を許せる相手に言える。

《斎藤先生、上山さんに聞きたいこと》

質問：上山さんは自助会に関わっていますか？

（上）親の会での活動から始めた。自分にとって恥ずかしい話が親の会で役に立つ。自助会には関わらずいきなり活動になってしまった。

質問：薬について。医者は詳しいですか？

（斎）薬剤師は名前に詳しい。薬から学んでいる。医師は効用に詳しい。病気から学んでいる。医者の昔の状況は「先生様」と呼ばれていたが今は「患者様」。病気だけを見ればよかったが今はひきこもりであったりリストカッターもくる。口が達者な人も多い。

《斎藤先生より「自助会について」》

うちの病院では自助会はディケアの活動の中で行っている。ミーティングが自助会に当たるかと思う。普段のミーティングでは自分のことを話すことは少ない。初めてミーティングに参加した人の中には出会い頭にいきなり話す人もいる。そうすると嫌がる人もいるので、別にシリアスミーティングがある。そこでは仕事や体験談など話している。参加者が多いことから求められていると感じる。内容をもう少し詳しく言えば、「履歴書の空欄をどう埋めるか」「5 億円あればどうするか」等、自由な発想で話してもらうようにしている。安全性が必要で批判やアドバイスは基本的にはしない。その中で意外と大したことない、同じ経験をしている等、わかってほしい部分はあうんの呼吸で分かり合えたりする。

《検討委員から》

栗田委員：今日は「聞くことが大事」ということを感じた。どうしても聞きだそうとしてしまう。そうすると傷つけることある。聞く姿勢の在り方を問われた気がする。

僕ら自身の自助会が必要なのもかもしれないと思いました。

布袋委員：当然みんな違う体験を持っている。今日のメンバーの中には昔を知っている子が何人かいる。今日は豊かに言葉をしゃべっていた。十分コミュニケーションはできる。先生は言葉が豊かすぎてちょっと困ったところもあったが、楠本さんの話はいつ聞いても染み透る。的確に自分の言葉で話している。今日はシリアスな内容になっていたと思うが、話はよくわかる。冷静に見れていないときの話などは、実に重たい。重たい話などは誰でも一つや二つ持っているがそんな話は忘れたら損で自分の特権みたいなものだったらいい。

《おわりに》

おわりのあいさつ（メンバー）：本日は最後までお付き合いいただきありがとうございました。あっという間の 2 時間でしたが、とても有意義な交流会となりました。検討委員の皆さん、これからも私たちへの応援よろしく願います。斎藤先生、上山さん、今日は本当にありがとうございました。またお会いできる日を楽しみにしています。これから本格的な寒さを迎えますので皆さん、お身体にお気をつけてください。

《 上 山 和 樹 さ ん 感 想 》

（１）斎藤環さんの講演を聴くのは久しぶりでしたが、現場実践に基づいた非常にリアルなお話で、あらためて勉強になりました。情報の一つ一つが、膨大な「ひきこもりバッシング」への「反論」として成立しているように感じました。

（２）自助会と「ほっこり会」では、あらためて自分の「原点」に向き合ったような状態でした。ここでそれぞれのお名前を挙げることはできませんが、参加された方々（特に、発言くださった方々）に感謝します。

▼お昼ご飯の際に交わした会話が、非常に重要なヒントを秘めている気がします。理不尽で突発的な「死の絶望」、《非日常》の開放感・・・。

▼「ヒント」といえば、「ほっこり会」での代表の方の存在は特筆すべきだったと思います（笑）。

▼自助会「知音」の代表としてすでに発言を試みられている方との出会いは、非常にうれしいものでした。

▼取り組んでおられる各人が「パイオニア」というか、——しかしそれにしても、どうしてこれほど皆さんが「無理」をしなければならない状況なのか……。いろんな縮図があったと思います。

（３）目良さんや「検討会」の皆さんをはじめ、田辺の皆さんの雰囲気がとても印象的で、その成り立ちや事情等について、もっと知りたくなりました。（プラスの面も、マイナスの面も）

（４）ぜひ、またお邪魔したいです。



「ひきこもり」だった僕から
（講談社， 2001 ）

交流会（２）．みらいの会を迎えて

日 時：平成 18 年 2 月 24 日 午後 1 時～午後 9 時

場 所：熊野古道～古道ヶ丘

参 加 者：みらいの会 5 名（支援者 1 名）、田辺市自助会メンバー 10 名、ほっこり会 1 名、田辺市
ひきこもり検討委員 2 名、ハートツリーハウス スタッフ 2 名（田辺市ひきこもり検討
委員 1 名）、行政局保健師 2 名、窓口担当 2 名

内 容：

《熊野古道散策》

（みらいの会 5 名、田辺市自助会 10 名、窓口担当 2 名、熊野古道語り部 1 名、和歌山県観光協会 1 名の参加。福祉バスで名所を巡りながら語り部さんの説明を受ける。）

～滝尻王子～



～福定 大銀杏～

～牛馬王子～



Ⅲ－③ 交流会（２）．みらいの会を迎えて

《古道ヶ丘》

（ほっこり会１名、ハートツリーハウスのスタッフ２名、田辺市ひきこもり検討委員２名、
行政局保健師２名が合流）

～みらいの会による演劇、～（語り部さん、観光協会の方も演劇鑑賞）

（あらすじ）とある学校の教室。放課後。このクラスでは盲腸で入院した先生のお見舞いに千羽鶴の数量が割り当てられた。教室では生徒が折り紙をしながら会話をしている。ここでは四人で一つの班なのだが、そこにいるのは三人である。そこにいないもう一人は不登校の「井上君」。彼はなぜ不登校になったのか、彼は今何をして過ごし、何を考えているのか…。三人は推測をしながら彼の話をする。そして彼らは自分たちが持つ不安な気分に気がついていく。



《体験発表》



《代表よりお話》



《食事交流会後、体育館にて清姫太鼓体験》



感想：

- ・今日は一体何をするのだろう・・・と戸惑いながらのスタートでしたが、充分すぎるほどのお楽しみがあり、熊野古道もお食事もお太鼓も満喫させていただきました。
劇も、真剣に観ていただけたようで、とても嬉しかったです。もう少しまともな体験談をお話できれば良かったのですが・・・すみません。
少し離れた土地ではありますが、どこにでも同じように悩む人がいて、それを支えていこうとする人もいて、同じなんだな、と実感しました。京都にもこういう施設があればと思います。
色々な刺激を受けました。ご招待ありがとうございました。
- ・バスツアーは少し長すぎたかと思います。後半は疲れてしまい、お腹が空きました。バイキングはあれだけの料理があって非常に満足です。
ただ、もう少し食べる時間が長くないと、交流と食べる時間の両方ができないと思いました。
あと太鼓はかなりよかったです。食後だけあって運動は必要です。ああいうものならいつでもやりたいです。
- ・今日のみらいの会との交流良かったです。ひきこもりや不登校の団体といっても、立ち上げる人によって、色々な考えや理念があるのだなと改めて思いました。
代表者の方の「保護者の方達からどうすれば自分の子をなおせるか」という問いかけには答えられないという話はわかる気がしました。私は、悩んでいるとついつい万能の答えを出してくれる解決者を求めてしまうが、自分にあった解決法は自分自身にしかわからないと思う。
- ・普段、自分一人だと機会がない限り、行かない所や体験ができたのは、日常と違う感覚や体感、刺激を得ることができたという点で、とても良かったです。
観光に来た気分が地元ということもあったのでまずまずリラックスできたところなどもあり、今日この体験に参加したことに有意義だったと感じました。
交流も含め、今回の様々な事柄はとても貴重だったと思います。
- ・天気具合が心配でしたが、雨が降ることなく、体験ができて良かったです。
みらいの会さんの劇とても良かったです。自分の体験をあのように表現できることはすごいなと驚きました。
今は、あまり上手くいろいろとできないことがあったりしますが、今後の自分が何かしていくうえで元気づけられました。ありがとうございました。またこのような機会があれば参加したいです。
- ・みらいの会のメンバーさん何人かと話ができた。始めは緊張したけど、最後の清姫太鼓は感動したし、参加して良かったと思う。熊野古道散策はたくさん歩いたので疲れた。でも、語り部さんの解説はわかりやすく面白かった。勉強にもなった。
また今回の様なツアーや交流会があれば、ぜひ参加したいと思う。
- ・劇を見て、自分自身の中で、共感する場面を見てすごいことを、しているのだなと思った。でも、それが、どんな暮らしで、しても生きている事、自体が、すごい事だなって思った。きっと沢山の困難や、苦しみが、その人を守っているのだなと思う。
又、色々と、参加したい。生きている限り。
- ・熊野古道の散策で、語り部さんの感じはよかったが話す内容がわかりにくかった（歴史が個人的に苦手）。太鼓の体験はよかった。みらいの会さんと少し話ができた。夕食の時。
古道を歩く中心がよかったかも。しゃべりすぎて、食事に時間がほしかった。
- ・熊野古道をまわったのが良かったです。みらいの会の演劇も内容が濃く、とても良かったです。
- ・また、新しい出会いがあり、いろんな事を学びました。
- ・交流会のみの参加でしたが、非常に良かったです。京都の「みらいの会」の方とも話をすることができ、勉強させて頂きました。今は、ふれ合う人、全てが、勉強になるので、今後とも、こういう機会をもっていただければ、うれしいです。

Ⅲ－④．社会体験活動

④． 社会体験活動

- 長期ボランティア活動を通じた
若者の自立支援プログラム検討のための事業

(内閣府の委嘱を受けて社団法人青少年育成国民会議主催)

9月～3月	1名
-------	----

- 紀南障害者就業・生活支援センター

5月～	1名
7月～	1名
8月～	1名
合 計	3名

- 青年長期社会体験活動

(和歌山県青少年課)

10月～3月	2名
--------	----

⑤. 啓発活動・視察・実習・問い合わせ

○啓発活動

日 付	内 容 『テーマ』	人 数
H17.5.20	日本公衆衛生学会 恵春期青年期におけるひきこもり支援ネットワーク』	100人
H17.6.11～12	京都ひきこもり全国大会	約300人
H17.6.30	田辺市母子保健推進員総会	45人
H17.7.16	心身医学会 市役所が作ったひきこもりネットワークと支援』	150人
H17.7.27	大阪府庁 田辺市における社会的ひきこもり支援ネットワークの実際』	15人
H17.8.24	南紀高校教育対策委員会	約50人
H17.11.23	有田地方SSN研究シンポジウム 不登校児とひきこもり青年にどう援助していくのか』	約80人
H17.11.28	わされん 第4ブロック 学習会 田辺市における社会的ひきこもり支援について』	17人

○視察

H17.7.11	岡山県議会議員	2名
H17.7.12	みらいの会	2名
H17.7.15	田辺市市議会議員	1名
H17.8.31	大阪オレンジの会	1名
H17.9.29	奈良県精神保健福祉センター	2名
H17.11.1	田辺市立芳養小学校 生徒	4名
H18.2.9	和歌山県経営者協会 若年者地域連携事業推進センター 和歌山県商工労働部労働政策局雇用推進課 エルシティオ	3名
H18.2.28	東京都 八王子市 わかくさ福祉会	9名
H18.3.16	大分県 大分市保健所 保健師	1名

○実習

H17.7.20～21	花園大学 学生	1名
H17.9.7	関西福祉科学大学 学生	1名

○問い合わせ

H17.4.15	愛知県東海市 社会福祉協議会	H17.9.22	京都府 京都府議会議員
H18.2.8		#####	
H17.5.6	兵庫県 明石市議会議員	H18.1.11	千葉県 銚子市社会福祉課
H17.5.25	青少年育成国民会議	H18.3.23	
H17.6.10	和歌山県 青少年課	#####	大分県 大分市保健所 保健師
H17.6.16	和歌山県 白浜町議会	#####	京都医療福祉専門学校医療福祉課 学生
H17.6.17	和歌山県 湯浅町教育委員会	H18.2.3	和歌山県 串本町保健福祉課
H17.6.21	和歌山県 健康対策課	H18.2.21	KHJ岡山きびの会
H17.7.6	愛知県 蒲都市役所	H18.2.28	長野県 塩尻市商工課
H17.8.5	衆議院調査局 第一特別調査室	H18.3.15	三重県 四日市保健福祉部
H17.8.29	青森県 青森市役所		

○その他

田辺市ひきこもり相談窓口ホームページ H17. 7～H18. 3月 2,883件アクセス)
紀南新聞 (ひきこもり講演会 本宮)記事)
こころの科学 通巻123号 特別企画 「ひきこもり」 目良宣子：「ひきこもり検討委員会」顛末記. (日本評論社,2005.)
新版 保健師業務要覧 目良宣子 :各論 第3章 思春期保健 ひきこもり (日本看護協会出版社,2005.)
保健師ジャーナル Vol. 61 特集 「ひきこもり」ケースには、こう対応する！ 目良宣子：和歌山県田辺市におけるひきこもり支援」 医学書院,2005)

Ⅲ－⑥. ひきこもり講演会

⑥. ひきこもり講演会

日 程	場 所	講 師	内 容	参 加 者
9/4 (日) 13:30～15:00	本宮 うらら館	宮本 聡 氏 南紀福祉セン ター 精神科 医)	医師による話 ・社会的ひきこもりとは ・病気や障害との違い ・こんなときの対応は？ ・家庭内暴力、リストカット、自傷行為 etc	30名 民生委員 教師 健幸づくりの会（食推） かじかの会（妊気作り委員） ひきこもり検討委員会 5名 その他
9/16 (金) 13:30～15:00		楠本哲也 氏 自助会 知音 代表)	窓口の取り組みについて ・窓口担当者 ・当事者からのメッセージ	11名 民生委員 ほっこり会 ひきこもり検討委員 5名 その他
9/10 (土) 10:30～12:00	龍神 市民センター	山本 朗 氏 紀南こころの 医療センター 精神科医)	医師による話 ・社会的ひきこもりとは ・病気や障害との違い ・こんなときの対応は？ ・家庭内暴力、リストカット、自傷行為 etc	17名 民生委員 教師 ひきこもり検討委員 6名 その他
10/7 (金) 10:30～12:00		楠本哲也 氏 自助会 知音 代表)	窓口の取り組みについて ・窓口担当者 ・当事者からのメッセージ	12名 民生委員 ひきこもり検討委員 6名 その他
10/2 (日) 13:30～15:00	中辺路 保健センター	山本 朗 氏 紀南こころの 医療センター 精神科医)	医師による話 ・社会的ひきこもりとは ・病気や障害との違い ・こんなときの対応は？ ・家庭内暴力、リストカット、自傷行為 etc	37名 民生委員 食推 教師 ひきこもり検討委員 6名 その他
10/21 (金) 10:30～12:00	大塔 健康プラザ	楠本哲也 氏 自助会 知音 代表)	窓口の取り組みについて ・窓口担当者 ・当事者からのメッセージ	30名 民生委員 教師 ひきこもり検討委員 11名 その他

宮本委員の講演（本宮①）

ひきこもりは病名じゃなくて状態を表す言葉。思春期の不安なところの問題として現れることが多い。思春期の始まりが早まってきているがいつになれば終わるのかわかりにくい。時代。その中で社会的ひきこもりが出てくる。特徴として、自信がない。気遣いが多い。

ひきこもりの分類として

- ① 病気・・・統合失調症、うつ病、パニック障害などの症状のためにひきこもっている。これは医療による治療が必要。早期発見、早期治療が必要。
- ② 発達障害・・・広汎性発達障害。診断や手立て。
- ③ 原因なしのひきこもり・・・社会的ひきこもり。いろんな背景がある。



好き好んでひきこもっているわけではない。社会参加したいと思っている。今の状況が不本意。人と関係を持ちたいができない。こういう人たちのために支援が必要になる。傾向として男性が多い。20代以降で起こりやすい。学校（小、中、高）が行きづらかった。家でいるならいいんじゃないの、と周りでは思ってしまうが本人はつらい。

ひきこもると様々な症状が起こる。対人恐怖、昼夜逆転、器物破損、強迫症状。こういった症状に医療の関わりが必要だがひきこもりを治すわけではない。

家族の理解がうまくいかないと悪循環になる。また民生委員など地域の理解がないとさらに大きな悪循環になる。対応を学ぶ必要がある。支援をどこまでするのか。田辺市では人との関係を学ぶ場、関係を持ちやすい場面として自助会をしている。

田辺市では専属の職員がいる。家族はまず、どこに行けばいいかわからない。病院では相談を継続してやれない。行政に相談窓口があることで敷居も低い。家族は話すことが大事。周りは焦らないこと。本人の気持ちを置き去りにしないように。支援は継続すること。ある程度になると卒業かもしれないが、一度ひきこもった人はまたひきこもるかもしれない。そうしたときにいつでも戻ってこられるように細く長い関わりが必要。

本宮でできること・・・健康増進課のひきこもり相談窓口で相談すること。犯人探しは意味がないのでしないこと。

【質疑応答】

（本宮①）

Q. 長期ひきこもりで社会復帰に至った事例は？不登校から続いているひきこもり事例は？

A. 不登校の生徒には色んな関わりが必要。担任が一人で抱え込まないようにチームを組んで取り組む。

目良. 学校に籍がある場合は教育委員会が担当。年齢が若いとつながりやすい。高校生年齢になると自助会にも来てもらえる。長く関わる中で車の免許を取りに行ったり、就労支援を受けたりしている。ひきこもることどれだけの辛さを抱えているか。10年ひきこもった人もいるし長い人では20年という人もいる。

Q. 学校に行っていなくて家にいることはわかっていても、どう対応していいか躊躇するとういった関わりをしていけばいいか？

目良. 保健師や民生委員が動くと言われることがある。例えば、社会参加の機会を提供する。「サークルに来ませんか？」といったような関わりはどうか。家族が社会参加することによって本人が安心して家で過ごせる環境を作ること。家族で安定した関係が作れるようになってから相談に来られるようになればいいと思う。相談に来る人は、子どもの育て方を責められるのではないかと不安に思っている。

A. 家庭に入っていくのは難しい。地域の理解が必要。精神障害者の理解が20年、30年かけて広まってきたように。ひきこもりのほうが理解されやすいのではないかと。まず、本宮全体で理解されること。ひきこもりの相談や関心がある人はいきなり本宮だと行きにくいかもしれないので田辺である講演会や田辺保健所など利用できる。まずひきこもりを知ってもらうこと。早く対応すること。ひきこもる期間が短いほうがあとはいい。

【感想文】

(本宮①)

- ・ 一口に不登校生を登校させることは言うは易し・・・然し結果から（私場合）子どもと話が出来るようになり子どもの本音（？）がわかるようになり、又したいという希望も分かるようになり結局子供の希望が入れられる事により不登校から正式に通学できるようになったこと。一年毎日の家庭訪問の積み上げだったと思いました。何かの参考になれば。矢張り話が出来る人があったらもっと気楽にやれた面もあったのではないかと思います。
- ・ 大変良いお話を聞かせて頂きました。ありがとうございました。
- ・ 宮本先生のお話は、大変わかりやすかったです。目良さんも気さくな方で、今までの取り組み等についてもわかりやすかった。
- ・ わかりやすいお話で、ありがとうございました。義務教育、最後のとりでのような中学校で早く子どもを救ってあげたいと思いました。
- ・ とても良かったです。この様な情報提供は子どもの問題を抱えている家族の元へも知らせて頂きたいと思います。ありがとう御座いました。
- ・ 大変貴重なお話でとても勉強になりました。ありがとうございました。

山本委員の講演（龍神①、中辺路）

(龍神①)(中辺路)

(A) 心の発達

同一性（11～18歳）、アイデンティティ、思春期、他人とどうすればいいか悩む時期。

少子化について・・・シックスポケット。両親（2）、祖父母（4）から物が与えられるため子どもは6つのポケットがいる。豊かな生活を表す。親の関わりが変わってきている。



(B) ひきこもり

(1) 原因

① 精神疾患→医療が必要

統合失調症…エネルギー不足になる。症状として家から出られなくなる。

うつ病…10人に1人はなる病気。やる気がなくなるのでひきこもりの状態になる。

パニック障害…芸能人では円広志が体験を告白していた。外に出るのが息苦しくなったり、倒れたりする。

② 発達障害→評価とサポートが必要。

イメージとしては知的障害。精神発達遅滞。

広汎性発達障害…自閉症。こだわりがあったり、コミュニケーションが難しい。生まれながらに持っている特徴。

例：「あほやな」という言葉が単語は同じでも言い方や、状況などで意味が違って来る。その行間の意味が読み取れない。IQを調べてみてもなにもない。わがままと見られる。それでうまくいかず、ひきこもりとなることがある。

③ 原因なしのひきこもり…社会的ひきこもり。いろんな背景がある。

(2) どんな人に多いか

不登校…学校を楽しめない。本人が楽であればいいじゃないか、という意見があるかもしれないが、そうではない。本人は苦しんでいる。定義は年間30日欠席とあるが、定義に当てはまらない生徒がいる。

(3) 随伴する問題

対人恐怖…有名なもので赤面恐怖や自分が悪臭を放っていると思い込んだり、醜形が気になったり、妄想が起きる。他には他人に嫌がらせをするんじゃないかと気になることもある。

昼夜逆転…睡眠と覚醒が太陽を浴びないとリズムが乱れる。自律神経。元に戻せなくなる。

器物破損や暴言や家庭内暴力…いけないこと。家族は避難も必要。

強迫症状…確認行為、洗浄行為。問題としてまき込み型になることがある。自分だけでなく家族にも強要するようになる。

自罰と他罰 / 悪循環

(4) 理解すべきこと

親戚などからも不登校やひきこもりの相談を受けることがあるが、まず始めに言うことは、「怠け」が原因でないということ。中身が見えないので、理解しがたいかもしれない。本人は現状には満足していない。本人が一番焦っている。

ひきこもり状態の例え①②

① 相撲の水入り…組み合っている状態で見たいには動いていない。寄りかかっているように見えて楽に思えるかもしれない。しかし実際には本人たちはすごくエネルギーを使っている。ひきこもりも同じに思える。

② 水鳥…優雅に泳いでいるように見える。しかし、水面下で足はものすごく動いている。(シンクロも同じ) 外には静かに見えていても内側、見えないところではもがいている。

何かしようとしたとき、もしこうなったら…失敗、うまくいかなかったらどうしよう。先々を考えすぎて動けない。まず一歩踏み出して、見える風景で物事を考えてもいいのに、そ

Ⅲ－⑥．ひきこもり講演会

れができない。あと、原因探し、悪者探しはよい結果を生まない。あのとき～すれば・・・、はダメ。ひきこもりにはいろんなことが重なっただけで、何かあるとしてもきっかけにすぎない。これをこうすれば治る、というものではない。

(5) 回復のために必要なこと

- ・話をする・・・「おはよう」「ご飯できたよ」何でもいい。手紙やメールでもいい。基本は言葉。精神障害の人とも同じ。声をかけることで援助者もひきこもらないようにする。統合失調症は心にひきこもっている。いつも同じことをしている人がいる。あいさつは返ってこなくてもこちらから関わるきっかけはあいさつから。
- ・家族自身もひきこもらない・・・子どもに対して 100%使うのではない。家族自身が趣味や仕事を楽しむこと。その中で向かい合うときはちゃんと向き合うこと。
- ・焦らない、継続する・・・難しい。すぐには変わらない。

(6) 今、できること

- ・相談する・・・田辺市は先進的。
- ・同じ悩みを持つ家族と交流する・・・家族会。無駄ではない。家族の変化が本人の変化になることがある。

○窓口より（目良委員）

小中学校は適応指導教室がある。高校は教育相談があるが長期休みになると相談しにくくなる。ひきこもり窓口に来る年齢が若いほど本人に出会えるのが早い。田辺市では自助会の育成や、就労支援につなげたりしている。

○委員紹介

田城委員・・・不登校経験者や不登校の生徒がいる。ひきこもりも心配していた。予防的な関わりが必要だと感じる。

寺沢委員・・・精神をやっている中で、病気なのかそうでないのか、ひきこもりの人がいた。龍神は不登校支援に熱心な地域。教育講演会など色んな取り組みがされている。現在は人と人との関わりなしで生きていける。経験が少ない。仕事はない。フリーター、ニートが増えてくる。龍神の元村会議員が相談は受けていた。田辺市でも 5 年前から取り組んでいるが想像以上に多い。みんなで考えていかないといけない。担当が替わると違って来るが田辺市の目良さん、保健所の栗田さん、紀南病院の山本朗先生たちに相談をするとネットワークができていいからいいと思う。都市部も山間部も共通していることとして近いところには相談しにくい、というのがある。

【質疑応答】

(龍神①)

Q. ひきこもりは日本だけなのか？

A. 欧米では報告ない。アジア、韓国ではある。儒教や家父長制が影響しているという説もある。日本の中でも歴史的にもともとあったものに「ひきこもり」と名前がついたのか、高度経済成長などによる影響なのか、はっきりとしたことは言えない。）

Q. 以前、3～4 年前、ひきこもりの親から相談があり、保健所に行った。だが「次来るときはお父さんを連れてきてください。」と言われ、抵抗感を感じ、行けなかったことがある。

目良. 保健所は取り組んでいる。しかし、県は人が減る中でやっている。田辺には今、頼り

になる人がいる。

A. 本人来ないと見ないというところもあるがうちは大丈夫。保健所ではこころの健康相談があり、医師が行っている。

Q. 20歳を過ぎて働き盛りのひきこもりが多くなっている。どういう風に働きかければいいのか？みんな思っている。

A. 親がどうとらえているか。恥ずかしいであったり、相談に行くのはイヤであったり、問題と思ってなかったりする。まず行きやすいところに行ってもらうのはどうか。田辺保健所や田辺市の相談窓口。

目良. 田舎へ行くほど周りの目を気にする。家族は本人に触れないように、腫れ物に触るがごとく生活をしている。以前は地域のサークル活動などに参加をしても必要以上に制限してしまっている。そうしていくことで心理的にもひきこもってってしまう。

相談で母親が「仕事を辞めたらいいのかな。」と言うことがあるが「ちょっと待って。」と返す。そうすることで余計に本人を苦しめることがある。自分のせいで母親に迷惑をかけた、と。地域の人や家族が安心して生活できるよう、地域活動に誘っていく。その中で元気になってくる。

Q. ニートって何ですか？

A. NEET (Not In Education, Employment or Training) は教育や職業訓練を受けず、就労もしていない人たちといわれている。社会的ひきこもりを大きくとらえなおしたもののだが、まだよくわかっていない。

目良. 国がニート対策をしている。厚生労働省は若者自立塾。他には内閣府や文部科学省が取り組みだした。この支援には時間がかかる。青年がエネルギーをためること、そういった場所があることが大事。

(中辺路)

Q. ひきこもった場合、親が言ってもでてこない。家族しかないのか。

A. 必ずしも本人を見ないといけないことはない。医者として聞きたいキーワードがいくつかある。医療にかかるにはきっかけは親からでもいい。保健所ではこころの健康相談があり訪問もできる。

【感想文】

(龍神①)

- ・ 今まで、きちんとした窓口があることもあまり知らなかったもので、いろんなことが分かって良かったです。
- ・ 山本先生のお話、とても分かりやすく良かったです。
- ・ 今の所ひきこもりの相談はありませんがひきこもりの人たちにとって友達の手が何ヶ所かにおかれていると云う事で心丈夫に思いました。
- ・ 具体的に解りやすくご教示いただいた。只、ひきこもり障害をもっている方との会話ができないので、理解が困難であると思う。今後少しでもこれらの課題解決のために勉強し役立ちたい。
- ・ 田辺市は非常に広域になったので、旧田辺市と旧町村地区との地域差があると思う。窓口がさらに多くの人々に知らせ、より相談しやすい体制がとれるよう、広報面、地域の人材数の確保などが必要だと感じた。

III-⑥. ひきこもり講演会

- ・ ひきこもりについて分かりやすい内容だった。学校現場にも様々な課題があるけれど、(B) ひきこもりの(2) 原因の3つは全て注意が必要で、在学中から何らかの対策ができたかなと思う。地域の人たち対象のこのような講演会は大切と思う。話にもあったが、気になるけど、どう声かけをしたらいいかわからない人は多いと思うので、少しずつ理解をしてくれる人が多くなると地域のからの支援が広がり、長期のひきこもりなどを予防することが、できるかもしれないと思う。
 - ・ 気軽に窓口相談できそうです。
 - ・ 不登校、ニート、フリーターと「ひきこもり」など戦後の社会情勢の変化を背景にした多くの課題が生じてきています。教育にたずさわるのと、今、私のまわりにはそうした事例をもっていないませんが、今後またこういうご指導いただくことになるかも知れませんのでその御はよろしく願います。母子分離不安と父親の不在感、その辺に要因があるように思えるのですが、また私なりに勉強していきたいと考えています。
 - ・ 田辺市におけるひきこもり支援ネットワークのシステムの流れが良くわかった。ひきこもりの医学的症状や支援について、認め焦らず継続した関わりの重要性について学習できて良かった。
 - ・ お話ありがとうございます。分かり易くとても良かったです。帰宅後すぐひきこもりの息子さんをお持ちの親御さんにお話したいと思います。
少し希望を持ちました。
 - ・ 今日はありがとうございました。「ひきこもり」のような方(私が思っているのですが)、近所にもいます。目良さんのお話では、25才までには、なんとか・・・ということでしたが、大変心配です。田舎だからこそ近所の目を気にし、他人に弱みを見せずに、必死に生きているように見えて仕方ありません。相談窓口がわかり、ありがたかったです。
- (中辺路①)
- ・ よかったと思います。事前にもっと広報(PR)しておいてもらえたらもっといいと思います。例えば、上富田、紀伊民報にPR等。声(ボリューム)がこもってしまって聞き取りづらかったのは残念です。ひきこもりは社会的な問題です。もっと多くの方々にも関心を持ってもらえたら社会もよりよくなると思います。
 - ・ 大変いいお話を聞かせて頂き、勉強になりました。ありがとうございました。
 - ・ わかりやすく、良かったです。これからも、機会があれば、ぜひまたお願いします。
山本先生のお話わかりやすいです。

楠本委員の体験談

(本宮②、龍神②、大塔)

(本宮②)

幼稚園：母親が厳格だった。内気だった。友達と遊んでもケンカをして失敗すると一人で考える性格。押入れに閉じ込められ、なんで閉じ込められるか考えていた。

小学生：これから先の学校のことを考えてい



た。中学、高校3年行って大学に4年行かなあかんのか……。成績が悪かった。みんな外で遊んでいた。自分は家で勉強をしていた。勉強するものだと思っていた。

大阪時代：自動車の販売と整備をした。人間関係のトラブルがきっかけとなり、ふと気づくと「死にたいな……。」「と考えるようになっていた。ある人に相談をすると「やめよし。」と言われ、田辺に帰ってきた。車が好きでこの世界でやっていこうと思っていたが叶わず、社会的地位も失ってしまった。職安に行かなければならなかったが、何が自分にできるんやろ、と考えていた。このころは人目が怖かった。今は人と会うのが楽しい。

音楽：興味はあったがしていなかった。遊びで始めてみた。こういうことをして許されるのか、と思い、自分で頭をどついて姉に止められたことがある。世間の目が怖かった。

ひきこもり相談窓口：自分で見つけ、行くことになるが、母に「お前はそういうところに行く人間じゃない。」と言われた。苦しいときは公的機関に頼ったらいい、と諭した。父親は干渉しない。3、4回親を泣かせる。自分の人生を整理することは苦痛だが何回も繰り返した。今はもうちょっと休もうかな、と思う。毎日が楽しい。ぜいたくかもしれないがこんなにも好きになれた。人生にとって必要な時間。傷ついたことを忘れようとしていたが、傷ついたことが財産、傷つくことで幸せを感じることができる。ブランク、同世代からすると空白な時間だが、これからの人生、わくわくしている。昔の友だちはみんな都会にいる。今の自分より明日の自分は進歩している。

今の問題：ひきこもっている人たちに会うこと。何ができるか。自分はおもしろいこと、楽しいことをしたい。できない自分もいた。今は対応に困る。自尊心がボロボロになっている人たち。行く道は違うがどこか同じな人たち。

○ほっこり会について（家族会代表者が参加し、実情を説明）

- ・娘がひきこもるようになって、何とかしようと殴ったりした。精神病だと思っていた。そんな時、「ひきこもり」という言葉を知った。いろんなところに行ったがしっくりこなかった。田辺は市民対象だとわかっていたが直接押しかけた。そこでほっこり会を紹介してもらった。相談に行くことは心理的抵抗がある。でもそれではダメ。親として飛び込んで行こうと思った。でも地元だと差し障りがある。
- ・完全にひきこもるようになって4年。2年くらいのとき娘が怒り狂った。「このままにするとダメになる。」一緒に泣いた。その後いろいろ相談に行くがどこもしっくりこない。どこかないか……。気づいたら田辺の窓口で座っていた。ひきこもると近所、友だちに話せない。おとなしいので隠そうと思えば隠せる。でもそれではいけない。家族会のよさは何でも話せること。対応が変わってくる。気持ちが楽に、明るく生活できる。

○委員紹介

寺沢委員：やおき。問題の複雑さを感じている。相談を受ける大変さがあり支援者の数がない。この支援を広げてほしい。東京でひきこもり支援をしているタメ塾の工藤さんが、「フィリピンでは15歳から働くからひきこもりはない。」と言っていた。ひきこもりは日本特有で先進国の中から生まれるのか。精神科医でもひきこもりがわかる先生はほとんどない。やおきは本宮うらら館で精神のディケアをしている。紀州レンジャーのバッジを作ったりしている。

(龍神②)

このように能動的に社会参加をすることは、意味深い。

23 歳まで正社員で車業界で働いていた。トラブルがあり、「合わんな」と思い、田辺に帰ってきた。社会的地位を無くすこと、その立場を考えていた。何ができるか、何もできない。このまま部屋にいと死んでしまう。何ができるか。田辺市に相談する。

母は公的機関に相談に行くのは社会的弱者と見ていた。最初は母に隠れて相談に行っていた。小さい頃の思い出として、母に押入れに閉じ込められた。仕事一辺倒の父だった。甘えたかった。

ひきこもっていつも考えていたことは、自分の人生はなんだったんだろうか。肯定できるか。振り返る作業はエネルギーが要る。解決できない問題。

塾の先生、会ってみたいと思い、会いに行く。そこで「手伝いに来ないか。」と言われ行くことにした。

とりあえず好きなことをやってみようということで音楽を始めた。日々が変わるにつれて今は生きている。今が楽しい。26 歳。到底不可能なこともある。大学に行くことはできる。可能なことを模索していく。

(大塔②)

仕事を不本意で辞めることになった。辞めて帰ってきてソーシャルスキルが見られるのが恥ずかしい。人前に出れない。両親も不本意に感じている。そうすると輪をかけて自分が苦しくなる。親戚の中でも自分の事を言われているんじゃないかと想像していた。

一昨年、冬。親とコミュニケーションがない状態。食事は摂るが会話がなし。母も鬼気迫る状態で、自分を部屋から出そうと入ってこようとするので、部屋に蝶つがいの鍵をつけ、入ってこれないようにしていた。それでもしないと自分は安定しなかった。そうしていると、精神的な野垂れ死に状態になっていた。そのとき、偶然目に留まった広告にひきこもり窓口が載っており、電話をした。行政に相談することにまさか自分が、と思ったが、必要だと思い、通うようになった。相談に行く中で、母から「お前はそんなところに行く人間じゃない。」と言われ、相談には黙って行っていた。

数回の相談を経て、自助会に参加するようになった。自助会のメンバーと知り合い、思いや家族の不満を話すようになった。話すことで小さい頃の育て方を思い出すようになり、あるとき、両親に責めてかかった。親は「すまんかった。至らないことがあった。」と言った。親を何回か泣かした。ある程度の距離がとれ、肩の荷が下りた。

そうした中で塾の先生に会いに行った。すると「手伝ってみるか？」と言われ、中学生の面倒を見るようになった。数ヶ月して給料をもらうようになった。両親からもこづかいをもらっている。

今は、当事者同士の関係だけでなく、色んな人たちとのつながりができた。楽器を教えてくれたり、散歩に連れて行ってくれる。

知音の活動について。当事者はどうしても受身になってしまうが、ここでは受身から自らの意思でやっという思いがある。

○委員紹介

- ・尾崎委員…楠本さんがとてもしっかりしていると感じた。両親が理解がある。是非、お会いしたい。大塔にも何人かひきこもりがいる。

- ・佐藤久委員…一昨年、適応指導教室ができた。今年は小中学生が7名来ている。龍神教室もあり、最近やっと出会えた子がいる。子どもどうしたとすごくエネルギーがある。高校は節目になっている。
- ・佐武委員…自発的に動かれていることがよくわかりました。
- ・飯田委員…気持ちを整理されている。
- ・布袋委員…距離間はまだ整理できていないのではないかと。さっき、保健師らしい質問があったがその答えで「誰が声をかけてもあかん。」と言っていたが、こういうものは時期やタイミング、チャンスが大事だと感じる。不登校の生徒とたくさん付き合ってきたが、関わる中でぼそっと話すときがある。阿吽の呼吸や卒啖とも言うがそういうタイミング、瞬間がある。目良さんは何かを持っているのかもしれない。出会いがたくさんなくても理解されることが少しずつ広がっていく。
- ・目良委員（窓口担当）…ひきこもりは時間がとまっているかも知れないが、経済的な援助が必要。あとひきこもっている子はいいい子が多い。非行に走る子はいない。ひきこもりを家族の問題としないでほしい。社会の問題であり、地域の問題。

【質疑応答】

(本宮②)

- Q. お母さんが厳しかったとあるが。なぜ抵抗しなかったか？
- A. すごくかんしゃく持ち。閉じ込められると出れない。「なぜ～するの！」と言われても幼稚園だと何も言えない。今なら言える。説明できる。「～だから・・・。」なぜしかられなければならなかったのか、ひきこもっている間、訴えた。
怖い存在だったが今は冗談を言える仲。こんな僕を許してくれている。今は音楽で表現する。昼間から音をガンガン出して近所迷惑なのに何も言わないでいてくれる。
- Q. 30 過ぎの娘。10 年くらいひきこもり。公的機関を頼ったのはなぜか？ 楠本さんは自己分析されて立派。
- A. 母親は社会的弱者と認めたくなかった。自分は頼らざる得ない状況だった。ひきこもりは社会問題で地域に住む住民にとって公的機関を利用することは何もおかしくはないこと。
- Q. 押入れの話が印象に残っている。いつまで入れられたのか。私も入れられた。でもひきこもらなかった。音楽もする。今となってはそんなこともあったなあという感じ。
- A. 小2が最後。夜中に放り出されたりもした。外にいと父親が帰ってきて助けを求めるが何もしてくれなかった。高校のとき、寒い夜外で一人で歩いていた。誰も話を聞いてくれない。忘れてきている部分もある。忘れてるということは消化できているということ。今はアルバイトで中学生の塾の講師をしている。外交的でわいわいしてる中学生みても、不登校のほうがピュアに思える。授業で怒ると生徒に嫌われる。生き方はたくさんある。中学生の目が生き生きしていない。何をしたいかわからない。目標がわからない。自立できない。学校の中で個性が磨かれる。今、何をしてもいいゆるいなか。自分を律する、自律が難しい。
- 目良：彼は相談に来たとき、本当に死にそうだった。話を聞いてみると、高校のときから死にたいと思っていた。内省する力がある。小さい頃から家族の中で考えることがあった。彼は出会いに恵まれている。人の中で苦しんだが人の中で力をつけている。

A：考えること、エネルギーを使う。ひきこもりだけを考える時期は暗くなる。ほかの事を考えていると苦にならない。他のメンバーの中でどうあればいいのか。わかるだけに言葉が詰まる。

(龍神②)

Q. 親からの厳しいしつけについて。恐怖感があったと思うがその後にフォローはあったのか。

A. やりたいことが本音で言えなかった。それは18歳になっても恐ろしかった。フォローはなかった。

Q. 相談に行こうと思ったきっかけは？

A. このままだったら死んでしまう。何か解決策はあるのか。強い「生きたい」があったわけではない。同年の人には劣っていない。

(大塔)

Q. 記憶力がすごいと思う。よくそんな小さい頃の思い出を覚えている。そのときの感情までおぼえているのはどうして？

A. 過去を振り返って見つめなおす時間が必要だった。今でも過去の感情になるかといえば、そうではない。過去を振り返ることはエネルギーがいる。人生に劣等感を感じていた。目良. 不登校を経験していなくて夢を持って社会人になった。職場の人間関係をきっかけにしてひきこもったが、色々考え出すと過去のこと、家族関係などが色々と思い出され、今の自分の状態を否定的に見るときに他者を責めてしまうことがある。自分の過去をしっかりと見つめ、支援者に何度も語る中で整理されていった。

Q. 一番しんどいときのことを話せるなら聞いてみたい。

A. いじめを受けた。同僚から。みんなから見えないところで暴力。上司に相談したが「自分で解決してよ。」と返された。あと、先が見えて(出世の道)、気が遠くなり、楽しくなくなった。それと、話を心のそこから聞いてくれる人に出会えなかった。これ以上は勘弁してください。

目良. 質問は彼にとって一番辛いことだった。私との相談でも一番最後にこの話が語られた。それが今は色々な大人の人と出会い、その出会いでエネルギーをためつつある。

Q. ①家族も悩んでいる。距離間、せつつかれるとしんどい。

②本人として相談に行くことは大きな壁になる。きっかけは何だったのか。今、相談できない人に何と声をかけるか。これからはピアカウンセリングとして活躍してほしい。

A. ①家族から突き放されて困るのは経済状況。両親が悩んでいると輪をかけて本人は悩む。

②届けたい言葉があっても届かない。自分の状況を考えると、しんどいときに誰に声をかけてもらっても受け入れられない。

目良. じっくり自分と向き合えるようにひきこまれる環境を整える。親の焦りは本人に伝わる。親も気持ちの上でひきこもらないで社会活動してほしい。

Q. 子どもに死にたいと言われると、まごまごしてしまう。中学生や高校生のようにまだ人間形成ができていない子に対してどうすればいいか？楠本さんが相談の中で「死にたい」と言ったときどんなやりとりがあったのか教えてほしい。

目良. 初めに電話をくれたのは12月の終わりですぐに相談できなかった。年明けに予約を入

れるが、楠本さんが死にそうな声だったので心配だった。2 回目の相談が終わった後くらいに「何の資格を持っているんですか？」と聞いてきた。試されている。4 回目、「死にたいと思っていたけれど苦しくても生きていこうと思う。」と話されたのが忘れられない。数ヵ月後のある夜、電話がかかってきて、そこで一番しんどい部分を話された。

継続して出てこれるように雰囲気作りが大切。昨年、私と楠本さんともう一人のメンバーの3人で京都のひきこもり支援先へ。楠本さんは一週間に1回しか外に出かけていなかったのそのとき2時間歩き回りへたった。京都で出会ったメンバーの影響でひきこもりについて勉強し、その後はNHK厚生文化事業団の取材を受けたり、自分から塾の先生や他の人との出会いをもってエネルギーをためてきている。

彼から直接「死にたい。」という言葉聞いたことはないが他の相談では何回もあり、その言葉は頭に残ってこちら眠りにくくなったり心配して家庭訪問したこともある。家族の心配はなおさらだろう。「死にたい。」と言って動かないメンバーに「生きる死ぬを決めるのはあなた。私は代わりにあなたの人生を生きることはできない。あなたのことをわかろうと努力しても完全にはわからない。でも私はこうしてあなたに出会えたのだからあなたには生きていてほしい。」と自分の気持ちを伝えるとともに次回の面接の約束をする。次までは大丈夫かなという気持ちと明日はどうなるかなという気持ちが交錯する。家族もあわてるとは思うが巻き込まれずに本人の死にたいと思うぐらいの気持ちを聴いていくことだと思う。

この講演会にも本来家族の方にも来てもらいたいがなかなか来れないのが現状。それは世間体にある。地域の方の理解とあたたかいまなざしがほしいと思う。

【感想文】

(本宮②)

- ・ ひきこもりの原因になるには、両親なののでしょうか。本人の性格なののでしょうか。両方が重なってからののでしょうか？

(龍神②)

- ・ たいへん良い講演でした。こんごの活動に役立てたいと思う。
- ・ 勉強になりました。これからもがんばって下さい。
- ・ 今日はいいお話ありがとうございました。これからもがんばってください。私たちも協力したいと思います。
- ・ 体験談大変貴重なお話を聞かせていただいて良かった。見事に立ち直られた楠本さんに大きな拍手を送ります。これからもひきこもりで悩んでいる人のために社会への参加を大いに呼びかけて下さい。今後の御活躍をお祈り申し上げます。
- ・ 今までには幸いにしてこんな体験はなかったのであまり感じてなかった。今日体験談をお聞きして今後もしこの様な相談を受けた時の対応のむつかしさも感じた。家族との納得の行くまでの話し合いや社会的な理解などが一番の必要であろうと感じました。 少しずつでも勉強していくように努めたい。
- ・ ひきこもりをされていた本人の話が聞けて本当によかったです。親は、本当に子どものことを悪くしようとしていないですね。また、精神的に強くなるのが全てではないと思います。同意見です。これからもがんばって下さい。
- ・ 20歳をすぎてからひきこもり状態になってしまった楠本さんが今日、この場で大勢の前

で自分の生活のことが語られるまでに成長されたことは、ほんとに素晴らしいことだと思います。まだまだ26歳。これからが人生の出発点。今までの経験をもとにこれから自分の道を自身を持って進んでください。

- ・ もっともっとひきこもり相談窓口の紹介を広めてほしいと思いました。まだ知らない人がたくさんいると思います。私たちもっと勉強して行きます。

(大塔)

- ・ 子育て講演会などで偉い先生たちの話はよく聞いてきたが、今日はそういった話とは違い、とても感動した。涙が出てくる。自分の育て方を考えさせられた。
- ・ 楠本さんの今迄のお話を聞かせて頂き、とても勇気のいること、振り返りの大切さ、様々な人々の出会いがエネルギーとなっていることが、今があるのが、よくわかりました。自助会、知音、親の会と方向性が出て来て、今後も楠本さんのような方が出てくれることを願っています。本人からの待ちも大切ですが、時期をみて、こちらからの呼びかけ、何らかの節目が大きく動いてくれることがあるのではないかと感じています。
- ・ 悩んでいる当人から直接話をうかがえたことは有意義だったと思います。楠本様、おつかれさまでした。場のセッティングとしてはこじんまりとした円座方式も良い方法かも知れませんか。当人もリラックスし、質問ももっと気軽に出来るのでは……。ただ、個人のプライバシーは慎重に守ってみたいです。
- ・ 今は客観的に自分の事を見つめる事ができるように、徐々になってこられているようで、ご両親も嬉しく思われていると思います。一度は社会人として生活してこられたので、又、社会人としても、人と交わるようになれるのも、時間はかかっても、実現される日がくる事を願っております。
- ・ 外に出なければいけないと思いながらそのハードルはこせないものでした。今日は一歩ふみだした思いで少しプレッシャーがありました。でも、この地域の皆さん方もこんなに理解しようとして下さっている。手助けして下さい下さっている方々が多くおられるということがわかり、ほっとした思いがしました。これからはもっとわたしたち親も社会に出て行かなければならないのだということを感じました。ありがとうございました。
- ・ 実体験の話しが聞けて少し「ひきこもり」の人の考えている事がわかった気がしました。いいお話でした。ありがとうございました。
- ・ 一生懸命生活されているのがよくわかりました。
- ・ 昭和はじめの生まれの自分は子育てもほぼ終わり、曾孫も一人いる状態です。ひきこもり→現在病かなと何時も思っています。民生委員の一人として個人情報等の問題もあり、声かけが大変かと思います。担当地域にも一人居ましたが現在ではほぼ良くなっています。
- ・ 経過がよくわかり大変参考になった。それぞれの人の考え方を尊重できる社会（学校と職場、家族）にしなければならない。
- ・ 本人、家族と行政の外に地域社会の関与が大切である事を痛感した。
- ・ 本人の体験談を直接聞くことができて貴重な場を得ましたことに感謝します。目良さんとの出会いは自分から（楠本さん）のアポという点が大きなターニングポイントであったと思うし、いい出会いであったことが嬉しいことでした。「止まっていた自分の時間（人生）が動き出した。」という言葉が心に残りました。

⑦． 思春期講演会

日 時： 平成 17 年 12 月 17 日 午後 1 時 30 分～午後 4 時
場 所： 紀南文化会館 4 階 小ホール
講 演 名： 『 若者たちの SOS 終わらない思春期 』
講 師： 斎 藤 環
(爽風会佐々木病院 診療部長 精神科医)
参 加 者： 231 名



内 容：

《はじめに》

田辺で話をさせていただくのは 3 度目。ひきこもり検討委員会発足 5 周年になりますが、発足の翌年に講演に呼んで頂き、その次の年もタメ塾の工藤さんと話をさせていただいた。先日、日本と EU の青少年会議がロンドンであったが、そこでも田辺市の実践について話させてもらった。私はいろんな場所で田辺市の実践を紹介させていただいている。こういうユニークな活動は他の自治体にはなかなかない。大きな自治体では古くからは札幌、横浜、神戸、最近では京都があるがもともとある NPO や民間の支援団体が自治体と手を結んで支援を立ち上げている。形だけで終わってしまわないかと不安がある。そういった意味で人口 10 万前後くらいの地方都市である田辺市が機能的な支援体制を結べている状況が望ましいのではないと思う。私には経験がないが田辺市にお招きいただく間にそれが確信に変わった。これからの青少年支援のあり方は、こういったもので、地域との密着性がありなおかつ機能的であるべきだという印象を強く持った。日本の青少年対策は最近かなり機動性が高まっていて、問題が起こるとすぐに政策に反映される傾向は高まっていると思うが、EU と比較した場合、ヨーロッパ諸国においては青少年問題を専門とする省庁がある。そこが毎年、青少年政策に関する様々な政策（ユース・ポリシー）をまとめた冊子をつくって配布している。残念ながらわが国には青少年を専門とする省庁が存在しない。それで仕方なくある部分は文科省がやり、ある部分が厚労省、最近では内閣府も加わって青少年対策をしている。いろんな省庁が点でやっちゃっている。点でやる結果として重複した政策を立てられてしまう。非常にやっかい。厚労省は早くからひきこもり問題に対して、ひきこもり対策のガイドラインを作成し都道府県に配布している。その一方で文科省もひきこもり問題に関心を向けている。これは生涯教育の視点から。またその一方で内閣府は労働問題、ニートの問題に絡めて青少年対策をしている。てんでバラバラで統計も複数あってまとまりが悪い。非常に困ったことだと感じている。もちろん何でも外国がいいと言うわけでない。EU のような政策を立てる場合は青少年局の対象年齢はだいたい 24 歳までになっている。24 歳だと今の日本においてひきこもり問題やニート問題の半分くらいは取りこぼすことになる。ひきこもりで言うと 30 歳以上の方がもう 3 割を越えてしまっ

ている現実がある。日本で青少年専門の省庁をつくるとすると今言ったように年齢の問題がある。かといってバラバラでしているとそこは曖昧にすることができるが同じ問題に関して複数の政策とか統計が出てしまって非常にややこしい。何とか上手くできないかと思っている。その中で一つの理想的モデルと言っていると思う田辺市ひきこもり検討委員会はいろんなスペシャリストがネットワークを組んで色々な形で相談の受け皿を作っていく。家族の相談には窓口が対応したり、家族会が対応したり、当事者には自助会が対応したり、フリースペースや作業所が対応する。このように多様な受け方ができ、規模が大きすぎない分、小回りが利く。いろんなメリットがあると思う。このモデルは広く応用できるもの。残念なのは、なかなか他の自治体に広がっていかない。今あるのは非常に小規模の民間組織か大規模すぎる公的機関の支援ネットワーク。どちらも機能性は劣る。

《思春期全般について》

スライド、凶悪犯の推移。なぜ犯罪の話か。事実に近い認識を持ってほしい。青少年犯罪における強盗、殺人。強盗は増えている。これには事情があって、ある種の万引きは強盗に含まれるようになったので一概には言えない。殺人は変わらず、低い水準。昭和30年代のピークからすると4分の1以下になっている。こういう状況がある。マスコミは最近の若者は凶悪化、凶暴化していて、一方で無気力化、ひきこもり、ニートになっていると言う。これは矛盾したイメージで、事実とは無関係。一つ言いたいのは若者の凶暴化はフィクション、嘘だということ。日本の若者が殺人などを起こす比率は国際的に見ると最も低い。むしろなぜ日本の若者はこんなにおとなしいのかと不思議がられている。マスコミのイメージ誘導に乗らないで、何が一番問題かというとき、凶悪化はもってくるべきではない。問題は凶悪化という反社会性ではなく、非社会性のほうだ。

《変容する思春期・青年期》

【アイデンティティの拡散】

自分の自分らしさや、自分の社会的ポジションといった自分が自分であるという連続性の感覚がアイデンティティ。昨日の自分は今日の自分であるといった、多くの人には当たり前の感覚かもしれないが、これが当たり前にならない人もいる。たとえば、極論すると多重人格という病気があるが、この病気の一部の人たちは昨日の自分が今日の自分じゃなかったりすることがある。アイデンティティの連続性が分断される可能性がある。そういった意味でアイデンティティは健康の目安として大事だと言われている。2、30年前あたりから言われていることとして若者のアイデンティティが拡散してきている。自分の自分らしさや、ポジショニングが曖昧化してきてよくわからなくなっている。だからこそ自分探しという言葉が一方で流行ったりするし、もっと言えばアイデンティティという言葉が声高に言われるようになった背景にもアイデンティティの危機的状況があったと言える。

【社会的弱者化する若者】

弱者化と言うのは教育社会学者の宮本みち子さんの本のタイトルからお借りした言葉。若者と言うのはメディアだけを見ていると、活発で勢い良くて我が物顔で振舞っていると思われる人もいるかも知れないが、統計的に見ると、若者はむしろ社会的には弱者ということ。失業率は高い（12%以上）し、経済力に非常に弱い。いろんな意味で弱者化している。個々の若者が無気力化しているというより、社会の構造的な要因によって弱者のポジションに追いやられていると考えたほうがいいのでは、というのが最近では有力な説になっている。

【薄く広がる幻滅感・絶望感】

最近の中学生や高校生のアンケートなどでは「がんばっても報われない」といった悲観的な見方が7割から8割を占めることが多い。これは日本特有なもので、青少年問題では日本と近い韓国で同じアンケートをしても、韓国の方がはるかに、若者は希望に満ち溢れている。自分の未来に対して楽観視している。なぜか日本の若者は未来に対して悲観視している。

【反社会性よりも非社会性の傾向】

さきほど述べたように、今の若者は、凶暴化というよりはむしろ異常なほどおとなしくなっている。犯罪を犯したり人に迷惑をかけることを反社会性と言うが、反社会傾向は今の青少年の関しては第一の問題ではない。若者の犯罪が問題ではないと言うわけではないが、今はむしろ、反社会性より非社会性が問題になってきている。非行少年、不良グループの犯罪も減ってきていると言われている。ますます、不登校、ひきこもり、ニート、広く捉えると他にもあるがそういった非社会性の傾向の方が増えてきているのが現実になっている。

【以上の変化は、1970年代から進行】

自分の経験からや様々な統計を見てもそう。70年代後半はターニングポイントだったのではと思う。

《若者における非社会的傾向》

時代を代表する若者に関するキーワードを拾っていくと若者の非社会性を表す言葉が多い。以下はそのサンプル。

【不登校（12万人）】

もともとは「学校恐怖症」という病気だった。それが自分の意思で学校に行かないということから「登校拒否」と言葉が変わる。さらに最近では自分で選んで学校に行かないというわけではない、行きたくても行けないという現場の声からもっとニュアンスがニュートラルな「不登校」という言葉になった。これはある種の非社会性、不適応を表す言葉でもある。数は12万人とも言われているが、横断的な数なので、縦断的に見るともっと多い。

【おたく（240万人）】

ある種のマニアでマンガやゲーム・アニメなどに没頭して社会参加や対人関係を積極的にもともしない内向的な傾向を持った人のことをおたくと呼んでいる。80年代に命名された。アニメやゲームファンが急増し始めた時代を象徴する言葉だった。しかし、1989年の連続少女殺人事件でおたくのイメージが地に落ちた。その後、様々な識者や文化人の方々が啓蒙に努めた結果、おたくというのはそんなに悪い人たちではないという理解が広がり、さらに最近では「電車男」のドラマのおかげもあって、おたくのイメージがかなり向上した。おたくの人たちは240～280万人存在しているとも言われており、一大消費者層になっている。消費者であると同時にクリエイターで今の日本の文化の一部を支えているとよく言われている。ゲーム文化やアニメ文化はある意味、現在日本の中で唯一海外に輸出できる文化といわれている。その担い手のおたくたちは社会的地位が上がってきている。非社会性ゆえに差別され、おとしめられてきた人たちがある種復権を果たしてきている。まだまだ偏見などあるがもともとおたくとは差別の言葉だった。そのことを忘れないほうがいい。

【フリーター（400万人）】

87年にリクルートの社員が作った言葉。フリーアルバイトの略称。いろいろ統計はあるが500万人とも言われる。社会問題と言っているのか分からないが、正規雇用が人の道として正しいと言いたい人にとっては嘆かわしい事態なのかもしれない。

【パラサイト・シングル（1000万人）】

社会学者の山田昌弘さんが1997年に「パラサイト・シングルの時代」という本を出して広まった。親元に同居して（「寄生」して）結婚しない若者のことで、光熱費や家賃など生活のインフラは親に依存して、家庭を持とうとしない男女。国勢調査の結果で1000万人いるとわかった。新しい統計では1200万人いるとされ、増加傾向にある。パラサイト・シングルは和製英語だが、同様の生活スタイルは海外にもある。呼び名が韓国ではカンガルー。イタリアではマモーニ。マモーニは英語ではホテル・ママ（「ママ」というホテル、の意）。ちなみに「ひきこもり」は国際的にも「h i k i k o m o r i」で流通している。

【ニート（52万人）】【ひきこもり（41万世帯）】

一種の流行語として生まれ、少なくとも「ひきこもり」は流行り言葉として消費されつつある。

＜＜「ニート」とは何か＞＞

小杉礼子（「労働政策研究・研修機構」副統括研究員）の定義：

（N E E T = Not in Education, Employment or Training）

仕事をせず、失業者として求職活動もしていない非労働力のうち、15～34歳で卒業者かつ未婚で、通学や家事を行っていない者（2005年の『労働経済白書』）

イギリスで生まれた言葉だがイギリスでは誰も知らない言葉。イギリスでは16～18歳まで

で仕事や学校、トレーニングに行っていない全ての若者をニートと呼ぶ。日本のニートとは異なる。日本人向けに作られたニート概念でイギリスとは似ても似つかない。日本版では日本の特殊事情が反映されていて、例えば年齢の上限を34歳までにしている点。イギリスでは34歳はもはや青少年とはとても言えない。日本では30歳で成人すると30年前に言われた。いまや成人年齢は35歳、あるいは40歳なのかもしれない、あるいは一生成熟しないかもしれないとも言われるくらい、日本では成熟が困難の問題が起こっている。34歳にしたのはフリーターやニートに30代が増えてきたという実情が反映されている。本当は40歳までだったかも知れないが、それではもはや青少年対策とは言えなくなってくる。イギリスのオリジナルよりは年齢層が10倍くらい広がっていることを知っておいてほしい。現在全国で85万人とされる。

《わが国のニートの特徴》

【男女比はほぼ同率】【最終学歴は中学卒もしくは高校中退が多い】

【親との同居率が高い】

働いていないので当たり前かもしれない。親の経済力や住居に依存せざるを得ない。

【六割以上が現状に焦りを感じている】

これは大事。「ニート」と聞いたとき、五体満足にくせに働きもしない怠け者と反射的に感じる人が多いかもしれない。「ひきこもり」にしても同じように思われている。体は丈夫にくせに、精神的にも大した病気じゃなくせに、いったい何やってんだ、と思う人が多いかもしれないが、実際には6割以上の方が焦っているということ。これでも少なすぎると思う。私は9割以上のニートが焦りを感じているはずだと思っている。こういう統計では、しばしば浅いレベルの結論しかでない。それで6割と言うのはかなり大きいのかなと想像していただけたらと思う。

【求職活動をやめてしまった理由としては「なんとなく（四三・四％）」が最多】

不登校にしてもひきこもりにしても最近「なんとなく」が多い。「なんとなく」は一つのキーワードかもしれない。

【一度も求職活動をしたことがないニートの、してこなかった理由としては「人づきあいなど会社生活をうまくやっていける自信がない（四三・一％）」が最多】

ニートも対人関係の問題をはらんでいることがお分かりになるかと思う。

昨今、若者の非社会性を表す言葉が多数できたせいで変な階層化が生まれていると感じている。フリーターだからニートよりまし。ニートだからひきこもりよりまし。これは大変残念なこと。ニートかひきこもりかなんてことはあんまり本質的な問題とは思わない。しいて言えばニートは経済学的な概念からきた言葉であるし、ひきこもりは心理や教育現場から出てきた言葉。どっちがどっちの上か下かなんてことを言ってみても始まらない。ただ、ニートとひきこもりの近縁性についてだけは知っておいてほしい。あとでニートと

ひきこもりの違いで説明する。

【フリーター数とニート数の推移】

各省庁がてんでに統計を取っているので内閣府と厚生労働省が別々に数字を出していて、2倍近い開きがある。フリーターに関して言えば2004年で厚生労働省は213万人だが内閣府では417万人。ニートでは厚生労働省では64万人だが内閣府では84万人と出ている。ニートは国勢調査で割り出せるはずだからこんなにずれるのはおかしいはず。なぜか内閣府は多めに見積もる傾向がある。

《不登校問題について》

不登校問題にあえて触れるのは不登校問題について考えるとき、実は思春期問題に対する考え方がかなり集約されている。ひきこもり、ニートの話をする前に不登校問題について十分ご理解いただきたい。

【減少傾向は事実か】

2001年に13万9千人で一つのピークがあったが、翌2002年からようやく減少に転じて12万人台に減ってきた。そのままトントン拍子に減っていくかといえばそうではなくずっと12万人台で推移している。実はここにはからくりがある。一つは週5日制。これで登校圧力が軽減された。週に6日はいけないが5日なら行ける、という生徒は多かったと思う。もっと大きいのは登校の数え方が変わったこと。保健室登校や適応指導教室の参加が出席に認められるようになった。統計の取り方が変わった。多少は減少しているとは思いますが言われるほど減ってはいないだろうという見方がいいのではないか。

【「中1ギャップ」の問題について】

不登校の内訳を知ってほしい。中学生だけで10万人以上。比率でいうと中学生の比率が圧倒的に多い。この変化が起こるのは中1から。小学生から中学生にあがるときに不登校になることが多い。このことから「中1ギャップ」と言われている。いろんな説明があるが決定的なものはない。ある程度わかれば歯止めできるかもしれない。中1ギャップを考えると、おそらく高校、大学にも同じ問題があるだろう。

高校生・大学生の不登校問題。思春期を迎えたある種の若者にとっては学校に行くよりも行かないほうが自然であるということがありえる。そういったときには高校生や大学生の不登校と呼ばれる。しかし留年や休学と言ったいろんな言葉で隠されてしまう。統計は難しい。

【不登校に対する「治療」のあり方】

大事なことでいくつかの原則がある。一つには本人主義に陥らないこと。治療を受ける際、最初は病院に本人が行きたがらないので親御さんだけが行く。親御さんだけでは治療にならないので本人を連れてきてください、とはよく言われる。私はそこを逆手に取りたい。むしろ本人が一番最後でいい。とりあえず親御さんの相談をじっくりやる中でどういう変化を起こせるか模索していただくのが一番大事。この問題意識はひきこもりやニートに対

しても共通する問題意識である。本人抜きの治療、診療を積極的にする必要がある。なぜなら、これは不登校に多いことで、本人は病院に連れてこられてしまうとあっさりと「自分は病気なんだ」と認めてしまう。これが問題。本当は病気じゃなかったかもしれないのに病院に連れてきたがために「自分は病気かもしれない」と思って、本当に病気になってしまう。こういう病気を医原病と呼ぶ。つまり医者にかからなければ病気にならなかったということ。これを防ぐには一つしかない。本人を最初から、無理に病院に連れて行かないこと。それしかない。親御さんがまず相談に行って「じゃあ次は本人を連れてきてください」と言うか「それだったら～して、様子を見てください」と言えるか。色んなアドバイスを受けながら対応を適正化していくことで本人がよくなっていくならばその方は医療が必要でない方ということになるかと思う。治療を考える際にはワンクッションを置く。周りの方が相談に行って、本人が行くのは一番最後にする。こういう配慮は是非やっていただきたい。残念ながらほとんどの医者は本人主義になりやすい。しかし不登校やひきこもりのケースについては、最初は親御さんだけで相談に行くのが望ましい。

【診断・分類よりも関わりつつ考える姿勢を】

不登校やひきこもりにおいて最初は診断や分類がむしろ妨げになることが多い。ある種の先入観を持つことで対応の方向が決まってしまう。これは非常に大きな弊害。最初は～だったけど…だったのか、と変わっていく過程が大事。私は分類はあまり意味がないと考える。知識を蓄えるよりまず関わること。関わりを持つ姿勢がないとそもそも支援も治療も不可能。関わるができる最初の第一人者はご両親。親御さんが両方ともどうしても無理なときに初めて治療者であるとか第三者の関わりが必要になってくる。

【「登校刺激の禁止」問題】

あまりにも一時期言われすぎた。かつては強制的、暴力的な登校刺激が認められていたときがあった。それを払拭する意味では「登校刺激の禁止」のスローガンは良かった。これは聞いた話だが、あるときから不登校に関わりを持ちたくない先生が「登校刺激の禁止」という言葉を自分の都合に合わせて使うようになってきた。不登校がいても「登校刺激は禁止」と言って関わらない先生が出始めた。それではやっぱり困る。関わっていただかないと始まらない。そこで2003年に開かれた「不登校問題に関する調査研究協力者会議」の中でこの「登校刺激の禁止」に関して異議申し立てをした。別に反論したのではなくケースバイケースだろうということ。

【再登校よりも「子供が元気になること」を！】

親御さんは自分の子どもが不登校になったとき、一番あわてるのは「どうやったら再登校してくれるか」にこだわるから。しかし、これは間違い。再登校の是非かではない。大事なことは子どもが元気になるかどうか。この問題意識もひきこもりやニートにも関わってくる問題意識になる。その人が元気に明るく過ごしているかどうか。ここに焦点を当てていただきたい。となると答えは多様になる。学校を休ませてフリースクールに行ったほうが元気になる子もいれば、元の学校に戻ることで元気になる子もいる。いろんな子がい

て様々。そこに対して大人の側が、例えば学校反対論者は「学校なんて絶対行かないほうがいい」、これはこれで一つの押し付けだがそれをしようとする。一方で古いタイプの支援者は学校に行かなければならないということで無理にでも行かせようとする。色んな発想があるがいずれにしても、価値判断の押しつけは間違いだと思っている。私が言えることは関わっていく過程の中でその方が何によって元気になるかだんだんとわかってくる。こうなってくると不登校やひきこもりという言葉はどうでもよくなってくる。関わることで何がしてあげられるか、何をすれば元気になるか、それだけを考えていただく。最初は失敗をしてもだんだん軌道修正が効いてうまくいくようになっていく。不登校は再登校よりもまずは元気、これを大事にしていきたい。ほぼ同じことがひきこもりでも言える。社会参加よりもまずは元気とは言わないがせめてくつろいでいただく。本人が家の中でくつろげる状態を作ってくださいというのが私の治療目的である。目標設定の方向付けを変更することで別の風景が見えてくる、これは大事なことでないでしょうか。

《社会的ひきこもりの定義》

【六ヶ月間以上、社会参加せず、精神障害を第一の原因としない】

期間を設定したのは過剰診断を避けるため。例えば一週間ひきこもったから社会的ひきこもりです、といったことを避けるために六ヶ月と設定した。

【※ ただし「社会参加」には、「就学」「就労」のほか、「親密な仲間関係」も含まれる】
社会参加はいろんな捉え方があっていいと思うが、ニートとの差異化を図る意味で（社会的ひきこもりの言葉を採用した時は、まだニートと言う言葉はなかったのだが）、ひきこもりでは家族以外に親密な仲間関係をもっているか否か、これで判断する。家族以外に親しい友だち、恋人がいるか、この点はきわめて重要。ニートとの一番大きな違いはこの「人間関係の有無」になる。大きなニート集合に、ちょっとだけ小さなひきこもり集合が入っている。今問題になっているのは、「ニートなんだけどひきこもりじゃない状況」、これはあるのか？答えは「ある」。対人関係があればニート問題として扱い、対人関係が全くなければひきこもり問題として扱う。これが最大の違い。

【精神障害を第一の原因としない】

統合失調症やうつ病のような、それ自体がひきこもりを引き起こしてしまうような病気にかかるとその病気のせいでひきこもってしまうことがある。この問題では治療法が全く異なる。注意していただきたい。

【※診断名、臨床単位とは言えない】

「ひきこもり」は病名ではない。ひきこもりとは不登校やニートも同じで、状態像を表す言葉。

《社会的ひきこもりの特徴》

【不登校との関連性は高い】

一度不登校をした人が長期化してひきこもりに至るケースはだいたい15～20%。

【1970年代後半から増加】

全国で数十万から百万人と推定される。最近出た統計では41万世帯とあるがこれはかなり控えめに出た数字。ひきこもり百万人説は私が言い始めたことだがまだ撤回する必要に迫られてはいない。

【比較的、男性事例に多い】

だいたい7～8割で男性が多い。

【どのような家庭のどのような子供にも起こりうる】

不登校と同じで、こういう家庭でこういう子に育てれば起こらないなんてことはない。家庭にも様々あって例えば戦前の家父長制みたいな厳しい家庭があれば、すごくリベラルな家庭でも起こり得る。かなり幅があり、統一されたイメージが持てるかと言えば私には持てない。元々内向的だったり、非社交的だったりする子が多いのは事実だが、じゃあ社交的に育てればとか、明るい子にすればとか、そういう方向で予防するのは無理。どうしてもなるときはなってしまう。あえてこのことを言うのは、不登校を含めてひきこもりに困っているとき、どうしても多くの人たちが「犯人探し」をしたがる。「誰のせいでひきこもったのか」、これは非常に不毛なのでやめていただきたい。はっきりした原因がないことのほうが多い。

【しばしば著しい長期化（数年～十数年）に至る】

数年単位から十数年や20年ひきこもるのも珍しくはない。今回の講演のタイトルには「終わらない思春期」とついている。ちょっと奇妙な言葉に聞こえたかもしれないが、例えば私の臨床では小学校以来一度も社会参加することなく10年、20年経ってしまったと言う人が珍しくない。一様に共通していることは、ある意味でこころの成長が止まっていること。ひきこもった時点でそれ以上の成長や成熟が非常に困難になりやすい。これがひきこもりやニートのある種の問題と言っているかもしれない。成長が止まることを端的に言うとひきこもりの場合はコミュニケーションスキル、相手とやりとりする技術が低下することで非常に多い。知識や常識は持っているが生身の人間同士の中に入っていくことはすごく苦手で成熟が遅れる。こういった技術や成熟が起こるのは人間関係の場面で人々に触れながら、慣れていくものなので、なかなかそういう機会に恵まれないひきこもりの人たちがそういう状況に陥ってしまうことは避けられないと思う。私が「終わらない思春期」で言いたかったのはその点。

【長期化とともに精神症状が、あるいは家庭内暴力などの問題行動が出現しやすい】

こうなると精神科医の出番になる。

【ひきこもるきっかけは多様だが、長期化のパターンは共通点が多い】

私はひきこもりのイメージとして、入口と出口がたくさんあって、途中は一本道、と考え

ている。いろんなきっかけからひきこもりは起こる。抜け出す経過も 100 人 100 様だったりする。はっきりしていることはひきこもっていく過程、ひきこもり状況が続いていく過程には共通点が多い、極論すればワンパターンであるということ。そういう傾向を指摘できる。

【長期化に至った事例が自力で社会参加を果たすことは著しく困難】

「絶対にできない」とまでは言わないが非常に困難。私が今まで見聞した範囲では三例ほど全く自力だけでなんとかした人がいる。しかしどれも、身近にたまたま親切な人がいて助けてくれたりと、一概に自力だけとも言えない。いずれにしても、本人以外の外からの介入、手助けなしでこの問題に取り組むことは非常に困難であろう。

《ひきこもりの統計資料》

厚生労働科学研究事業「地域精神保健活動における介入のあり方に関する研究」

【本人の平均年齢：26.7歳】

30歳以上が3割以上。どの支援団体に行っても30歳以上になるとは難しいとよく聞く。確かにひきこもったまま30歳を超えてしまうと、態度がすごく投げやりになったり、かなり絶望的になったりしがち。そういう現実がある。

【性別：男性が76.4%】

【小・中学校いずれかの不登校経験者：33.5%】

いろんな見方があっていいと思うし、この数字は比較的少ないと言えるかもしれない。私が10年前に調べたときは半数以上が不登校経験者だったことがあった。

《よくみられる精神症状》

【不登校】【対人恐怖（自己臭 視線恐怖 醜形恐怖）】【被害関係念慮】【強迫症状】

【心気症状】【不眠と昼夜逆転】【退行・家庭内暴力】【抑うつ気分】【希死念慮・自殺企図】

ひきこもりの分類は賛成できないが、どうしても分類するとすれば、対人恐怖タイプか強迫症状タイプに分かれると思う。強迫症状タイプでは外が不潔で出られない、お風呂に入ると10時間くらい出てこないという方もおられる。しかし、いざひきこもりから抜け出すとけっこうエネルギーが高く、いろんなことができてしまうことがよくある。そういった意味では強迫症状の方が対人恐怖の方より外には出にくかったりするが、出てしまうと予測のつかない行動ができることがある。なので一概にどっちがどっちとは言えない。こういう症状があることをご理解いただきたい。

《鑑別診断》

【統合失調症（もっとも重要）】

これが基礎にあると、もはや薬物治療は欠かせない。見落としてひきこもりとして対応してしまうと取り返しがつかないミスにつながる恐れがある。大げさに言っているのではな

く、この病気は早期発見、早期治療が有効な疾患。もし早期発見できるとかなりの程度で回復できる。有効な薬もある。ある精神科医によると、うんと極論すれば発症して数時間以内に対応できれば完璧に治せると言う。それは無理でも発症して数日、数週間以内と言うのが早期発見の目安かと思う。この病気はひきこもりを引き起こす。英語で「社会的ひきこもり；ソーシャル ウィズドローアル (social withdrawal)」という言葉はそもそもうつ病や統合失調症でひきこもった状態になったときに表現していた言葉。統合失調症に関しては幻覚と妄想がある。これは大事。ひきこもりの場合でも被害妄想的訴えはしばしば見られる。近所の人が自分の悪口を言っているとか。この程度ならどちらかはわからない。もっと他の状況を詳しくつめていかないとわからない。統合失調症ではっきりしていることは幻聴が有るということ。幻の声。これがある場合は統合失調症を疑わないといけなし、そうでないとしても他の疾患がないか時間をかけて鑑別する。

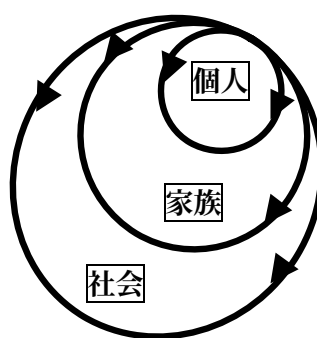
【スチューデント・アパシーと退却神経症】【回避性人格障害】【境界性人格障害】

【思春期妄想症】【うつ病】【分裂病質人格障害】【循環性気分障害】

《ひきこもりシステム（図1）》

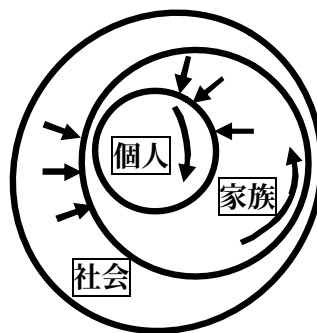
私がひきこもりを考える際、図式を用いて考える。通常、個人と家族と社会は接点を介して影響を及ぼしあって活動している。ひきこもりが起り始めるとまず個人が社会からはずれていく。ほぼ同時に家族ともはずれていき、最終的に家族も社会とはずれていく。なぜ、家族も社会からはずれていくか、ひきこもっている本人を丸抱えにして誰にも相談しないで自分たちだけで何とかしようとしている状態を、家族の社会からのひきこもりと呼んでいる。最終的にばらばらになってしまう。このばらばらになってしまった状態をひきこもりシステムと呼んでいる。ほとんどの場合、ひきこもっている個人は家族と同居している。世話になりながら、動けない、働けないと困っている。悪いことに、このばらばらの状態は、すごく安定性が高い。

図1 ひきこもりシステム模式図



「健常」なシステム・モデル

円はシステムの境界であり、境界の接点においては、システムは交わっている。つまり、3つのシステムは相互に接しあって連動しており、なおかつ、みずからの境界も保たれている。



「ひきこもりシステム」

システムは相互に交わらず連動することもない。システム間相互に力は働くが、力を加えられたシステムの内部で、力はストレスに変換されてしまい、ストレスは悪循環を助長する。

一旦この状態になってしまうと、なんとかシステムをくっつけようとしてもすぐ反対方向の力が働いてまたばらばらになる。このシステムはバランスを保とうとし続ける。

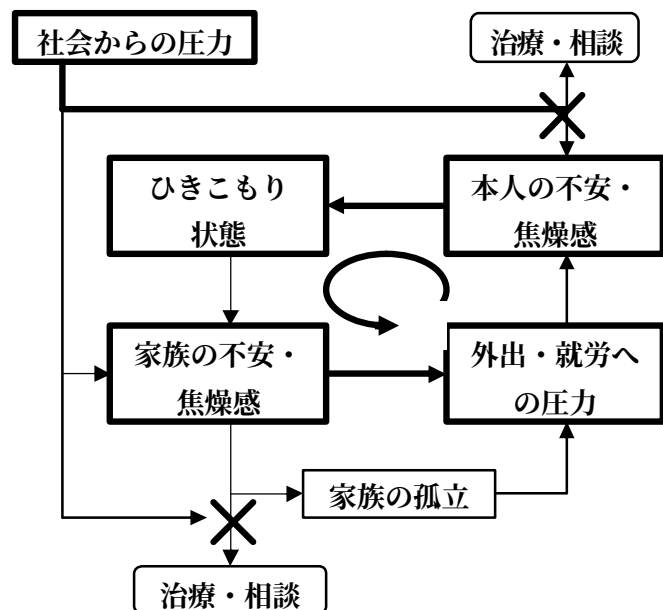
それを覆すには人工的・人為的な努力しかないというのが私の考え方。ちなみに、いきなり個人を家から出して単身生活をさせようとする人がいる。これは一人暮らしをさせれば自活の必要性に気づいてなんとかするようになると期待があるからだと思うが、その見通しは甘いと言わざるを得ない。まさかいないと思うがこれからそうしようと思っている方がいればやめていただきたい。理由は二つで単身生活はより長期のひきこもりを引き起こす可能性が高いということ。もう一つは単身生活でひきこもっている人に対しては、支援の方法がないということ。訪問ができると思うかもしれないが、訪問支援は同居している家族が家にあげてくれるからできるもの。一人暮らしの家のドアの前で少しでも粘ったら、善意はともかく、やってることは悪質な訪問販売とたいして変わらない。だから孤立だけは防いでいただきたい。私の目標はあくまでも個人と家族の接点回復をしてから最終的には社会と家族と個人の接点が回復していくこと。

《社会的ひきこもりの悪循環（図2）》

なぜ、ひきこもりシステムは安定性が高いのか。大きな理由としては悪循環が考えられる。まずひきこもり状態がある。そうするとご家族は例外なく不安、焦燥感を感じる。ここから先が問題。次には本人に対してプレッシャーをかける、恥をかかせる、厭味を言う等、いろんな手で本人を家の居心地を悪くし、いたたまれない気持ちしようとする。これはある意味常識的な発想で、発想自体が病的であるとか、倫理にかなっていないとか言うつもりはない。とにかく、家族が自分の不安解消のために本人のプレッシャーを与えると、それにより本人はますます家族に対して不安、焦燥感を感じてひきこもり状態が続いていくことになる。

お分かりのとおり、家族が自分の不安解消のために本人のプレッシャーを与えることをしなければうまくいくかもしれないということ。そうはいっても難しいこと。一步一步理解を深めていくほかないと思う。

図2 社会的ひきこもりの悪循環模式図



《社会的ひきこもりの治療的対応》

【治療的対応の三段階】

【①家族相談（情報提供）】

私の方針は最初から本人を連れてきてはいけない、というもの。もちろん本人が来たくて来る分には歓迎をするが、最初の段階で本人がすすんでくることはほとんどない。できるだけ最初は家族相談で迎えていただきたい。実際には家族相談だけで改善するケースはけっこうある。いかに家族対応が大事かがわかると思う。ひきこもりの過程においてきっかけは様々であれ、ひきこもってしまった後の過程は単純でシンプルなもの。そこで治療者がある種の推測や提案をすることはかまわないと思う。確かに本人に会わなければ「診断と治療」はできない。でも本人に会わなくても「判断と対応」はできる。当面はこの「判断と対応」路線でいく。家族と話し合いながらフィードバックしてやっていく。よりよい対応を求めて相談を続けていく。私はブリーフセラピーの専門家ではないが、ブリーフセラピーの3原則は適応の幅が広いので覚えておいてもらいたい。一つ目は、今上手くいっているときは何もしない。二つ目は、かつて上手くいったことがあればまたそれをしてみる。三つ目は、今上手くいってなかったらそれをやめる。これは簡単なようでいて、意外と難しい。人間は機械ではないので、上手くいっていないのに、その手段に固執してしまうことがある。我が子に対する叱咤激励はその典型的な例で、ここで叱ってはいけないとわかりつついながら、ついつい声を荒げてしまう。歯止めが効かなくなるのが人としては自然のこころの動きだが、ひきこもり対応において言えば、ただ自然体でいるだけでは失敗することが多い。親御さんにとっては上手くいっているかどうか分からなくなってしまうことがある。傍目に見ればどう考えても上手くいっているのに親御さんからするとマイナス面ばかり見えてしまう。我々からすれば長年ひきこもっていた方がディケアに行くようになることは革命的变化と言ってもいい。しかし親御さんはそれを見ない。見るところはまだ働けないなどそういった「できない」ところ。見方の違い。今できている事を評価しないで、まだできていない事ばかり見るのはおすすめできない。できている事こそ見てほしい。これが難しいのは親御さんのこころの奥底で、うちの子が働けないはずがない、と思っているから。これくらいできて当たり前と考えてしまう。

【②個人治療（個人精神療法・薬物療法）】

親御さんが上手に対応していると本人が病院に来るようになる。特別な技法はなにもない。あるかもしれないが私はその必要性を感じていない。ひきこもり対応に大事なことは家族対応が50%以上だと思っている。本人が病院に通うということは半ば自分はこれから変わらなくてはならないと自覚があるということ。それに対して方向づけをする必要性を感じない。我々ができることはせいぜいこの医者はそこそこ信頼できるかもしれないと思ってもらうことで、周りも病院に通う事を願っているから通ってやろうかと思ってくれれば大変ありがたい。最悪なのはいきなりお説教をすること。まだこんな医師

がいる。大変残念なこと。そういうところで最初から治療に絶望してしまい、もう病院なんて絶対に行かない、なんてことになりかねない。世の中にはいろんな医師がいて、いろんな対応があるのでそう簡単にはあきらめてほしくないと思う。個人的治療においては特別な治療があるわけではない。ひきこもりに特効薬はない。

【③集団適応支援（デイケア・たまり場）】

通常の治療では本人の選択に任せる、というのが多いのであまり積極的に取り組まないがひきこもりに関しては集団適応の支援を1回は試みるようにしている。

ここまでの三段階を聞いて、「あれっ」と思われた方がいるかもしれない。就労支援が抜けている。私は直接的な就労支援は行わないスタンス。「そろそろ仕事をしてみてはどうかな」とは言わない。私が言うのは「そろそろ仲間と付き合ったりとか、グループに参加してはどうかな」くらい。ある意味そこまで行けた方に対してはゴールに達したと考える。求めがあればヤングジョブスポットやジョブカフェ、最近では若者自立塾など情報提供をする。これには治療は、価値判断とは自由でありたいと考えるから。「健康な人は働くべき」と言うのは一種の価値判断なので無理に押し付けることはしたくない。些細なことのようにだがこの判断は大事なこと。ひきこもりにしてもニートにしても最終的な動機付けは本人のためにも触れずにとっておく。それはなんといっても就労のことだ。ひきこもりにしてもニートにしても、最後のゴールが就労だということは、本人にもとっくに分かっている。でも親御さんはそれ（本人がわかっているということ）をわかっていない。それが問題。親御さんから見るとお子さんが全然何も考えていないように見える。これはありがちな誤解のパターン。なぜ親御さんはそう考えるか。それはひきこもっている本人が親御さんに不信感が強くてなかなか自分が考えている事を言えなくなっているから。むしろ本心を見せまいと頑張っている。働けないから家賃収入のためにマンション建ててとわざわざ言う人もいるが、実際には気持ちとは裏腹なことが多い。親御さんは、心に余裕がないと、本人の言葉を本気で受けとってしまう。就労を考えないひきこもりはいない。裏腹な発言があれば「よっぽど働きたいんだな」と感じて欲しい。せめて親御さんや支援者は余裕を持って就労以外の自由な発想で関わって欲しい。本人が自分自身で動いていると感じるようになること。そうでないとどんなことをしても長続きしない。分かっているのに我が子に押し付けてしまう。押し付けは動機を奪ってしまう。やってほしいのは外堀を埋めること。ただし、何もかも先回りして言いすぎるのはよくない。それではたして働くのかと思うかもしれないが、とりあえず集団に慣れていくこと。その結果として、最終的に仕事に行くことが多い。就労の手前が大事。何をしておくべきか。仲間作りで楽しめるか。ニートも対人関係の問題が大きいと言われている。だからこそ、ここでワンクッション入れて欲しい。人に慣れていく。最終的には効率がいい。

もう一点大事なこと。一人でいるときに楽しむ力。ひきこもっている人は家で遊んで

いる、という誤解があるが、私の印象では一人でいても呆然として、何もできなくてじっとしていることが多く、楽しむどころじゃない。ここは焦りの塊で葛藤している。もしくは葛藤を感じたくないの、あえてところを麻痺させている。ネットを楽しんでいる人なんて1割もいない。だからこそ、一人の時間を大事にしてほしい。読書か映画か音楽を勧める。手塚治は若い漫画家に「良い本をたくさん読み、良い映画をたくさん見て、良い音楽をたくさん聴きなさい」と言ったという。このアドバイスは非常に有益なものだと思う。趣味がない人でも読書なんかだったら始めてくれる。だからといってすぐ仕事を始めるわけではない。趣味を持つことで、一人の時間がより豊かに充実したものになる。ひきこもって一番怖いのは過去の時間が真っ白に何もないまま過ぎてしまうこと。非常に過酷な体験だと思う。それを埋めるのは仕事をして読書しても同じことだと思う。そうしてくると何らかの形で社会と接点がある人は就労を意識してくる。空回りした過去と違い、仲間と過ごしたりする中で充実した日々を送ったあとであればもう少し具体性をもったイメージーションが生まれてくる印象がある。そういった意味でも、周りが就労の促しをするのはやめていただきたい。過激な提案かもしれないが分かっていただけだと思う。

《家族の基本的心構え》

【本人が安心してひきこまれる環境づくり】

せめてこれだけは覚えて帰ってほしい。このとおり。これを聞いてギョッとした人はひきこもりはまだ怠けじゃないかと思っている。どれだけ苦しいかわかっている人にはここからくつろぐことがどんなに難しいかわかるかと思う。せめて家族が、本人の苦痛の原因にならないでほしい。昼夜逆転の原因は、体内時計もあるかもしれない。でも一番は心理的要因。家族と顔を合わせたくない。そうすると時間をずらすのが一番早い。家族との関係はとにかく大事。良くなると昼夜逆転が直ってしまうことがある。前進の第一歩。家族ががんばっても安心できないときもある。本人が一番自分を責めている。ところが「安心させるように」と言うとうわかったつもりになってしまう人がいる。放置や放任は絶対にまずい。過干渉と同じくらい悪い影響がある。じゃあどうすればいいか。本人にかまっていただきたい。ただし傷つけないでいただきたい。難しいですが、これが唯一の正解。どうすればいいか。覚悟と根気が必要。時間がかかる。対応を変えてもすぐにはよくなる。非常によくいっても2、3年かかる。すぐ成果がでなくてもあきらめずに続けてください。長くできないことはまだ始めないで下さい。家の中が急に変わるのは本人にすると不気味。少しずつ変えていく。

【覚悟と根気 信じて待つ】

本人の向上心を信じる。それがないと思ってしまうから説教してしまう。必ず向上心を持っている。目に見えないものは信じるしかない。

【「怠け」「甘え」「わがまま」などは禁句】

第一歩。この言葉は非常に傷つく。信頼関係が3ヶ月ぶんくらい崩れる。そうならないためにふだんから心がける。批判、恥をかかせてもダメ。気持ちに余裕がないと言ってしまう。余裕を持つこと。

【まず両親が一致団結する】

多くの場合、お母さんが一生懸命だがお父さんが足を引っ張っている。逆はあんまりない。もとは逆だったが、とうとうお母さんがあきらめて、逆になったというパターンはある。一致団結しないと、あまりに効率が悪い。その意味でも、本人への理解において、一致していただきたい。お母さんは接点多いから失言しても挽回できる。お父さんは点でしか接していない。それなのに失敗してしまう。挽回のチャンスがない。お父さんはピンポイントで間違いを起こさないように。もちろんお父さんにも言い分はあるかと思う。「誰のおかげで」とあるかもしれないが、ひきこもっている人にとっては生活できて当たり前。ことさらに言われると反発してしまう。本人の気持ちを代弁すると、感謝半分、うらみ半分。ひきこもりは人生の失敗と考える。なんでこうなってしまったか、はっきりした理由がないと育て方の失敗にぶち当たる。コミュニケーションがとれれば解消できる。恨みは消すことができる。関わりを損ねるとエスカレートし、暴力に至ることもある。

【北風より太陽】

厳しい接し方より暖かい接し方でひきこもりの殻を解かしていきましょう。

【愛情より親切】

皆さんがなぜ30歳を過ぎた子どもを養ったりするのか、他人のことなら何も言わないのに我が子に対しては小言を言ったりするのか。そういったものは全て愛情によるもの。その愛情の使い方が不適切なときがある。愛情がいらないとは言いません。しかし、今のところ愛情は置いといて、とりあえず小手先の親切に徹していただきたい。相手を不愉快にさせない配慮。配慮を積み上げていってほしい。そうすることで安心してひきこもれる環境が整ってくる。

【受容の枠組み設定】

これまでは受容の話。受容には限界がある。ここまでは受けられるがこれ以上は無理と言う線引き。絶対的に必要。あまり絶対と言う言葉は使いたくないがここでは使う。受容の枠組みができないならはじめから受容なんてしないほうがいい。主にお金と暴力。

【金銭管理は一定額に】

ひきこもっているとお金がない。ニートもそう。おこづかいはどうすればいいか。おこづかいは必ずあげてほしい。ある人の言葉を借りるなら「お金は薬」だそうです。お金をあげないということはあなたは社会参加をしなくていいよと言っている様なもの。お金をあげない人に理由を尋ねると、いずれ金の必要を感じて社会参加をするだろうと期待しているようだが、それはまったく根拠がない。お金がない生活に慣れてしまうだけ。

あげるときは月給制であげてもらいたい。つまり、決まった金額を定期的に渡して欲しい。ほしいときにほしただけあげるのは間違い。理由として二つの間違いが起こる。一つは浪費傾向。もう一つはお金がいらなくなってしまう。親が楽でいいと思うかもしれないがこれが一番危険。「僕はもう何もいりません」と言い出したとき、一番危険な状態。ひきこもっている人はある状況に陥ると仙人みたいな生活になることがある。少しだけ食事をして後は寝るだけの生活。ここまでいった人が欲望を取り戻すのは難しい。欲望と意欲は同じ。何も欲しい物はないけど仕事だけはしたい、なんて人はいない。欲望と意欲は根っこが同じなので刺激を与え続ける必要がある。そのためにお金は必要。言ってみれば欲望に水をあげ続けること。くれぐれもあげないとか欲しいだけあげるなど安易な発想にならないようにしていただきたい。

【暴力は徹底拒否】

昔は専門家ですら親が我慢して受けなさいなんて言う人がいた。今でもそういうことを言う人がちょっといるが今ではそれはナンセンス。暴力には徹底拒否しかない。受ければ受けるほど相手も自分も傷つくだけで不毛な経験にしかない。徹底拒否だけが答え。受ける必要性はない。徹底的に拒む。拒むと言っても、避難するとか場合によっては警察に通報するとかそういう意味で暴力に暴力で対抗してはいけない。それは間接的に暴力を肯定することになる。暴力否定とは自分は決して暴力は振るわないこと。そうしなければ暴力の連鎖が起こってきて、その連鎖はなかなか終わらなくなる。

【原因追及・犯人探しは禁物】

はっきりした原因はない。時間を無駄にするのはもったいない。今の状況を変えるにはどうするかを考える。

【親もプライベートを楽しむ】

親が楽しむこと。心の余裕を持つことが必要だし、本人に対しても社会参加の楽しさのモデルとなってほしい。ひきこもっている本人は介護老人ではないので四六時中そばに付き添う必要もない。親御さんは親御さんなりの社会参加をしながら、傍らで本人に付き合っていけばいい。ほどほどの距離を保つ。旅行に出るのもありだろう。しょっちゅう面倒を見てなくてもなんとかなるもの。あるいは期間限定で離れるのもいい。たとえば母の入院がきっかけで、本人と父親の関係が改善することがよくある。要するにときには離れて距離感を保つことはそばにいることと同じくらい大事だということ。

《コミュニケーションの回復》

【「会話」がすべて】

会話をたくさんすること。難しいと言われる方が多いかもしれないがだからといってメモや電話やメールに頼らないでほしい。メインは面と向かっての会話。

【会話の糸口について】

全く話していないという方もおられると思う。それでも目標は高く、それに向けてアプ

ローチはできる。やってみないと始まらない。まずはあいさつ。「おはよう」「ただいま」「おやすみ」当たり前なことだがちゃんと毎日言えるかどうか。部屋の中まで入って言う必要はない。部屋の外から声をかけるので十分。あくまで本人のプライベートな空間を尊重してやること。あいさつから発展が難しい場合のすすめかたとして三通りある。

【一番目は「誘いかけ」】

「外出しましょう」でもなんでもいい。色んな言葉で誘いかけてほしい。別に応えてくれなくてもいい。とりあえず親御さんに敵意がないこと。本人の存在が必要なんだよという肯定的メッセージになるのでやっていただきたい。

【二番目は「お願いこと」】

ひきこもっていると家族にとっては意外かもしれないが、本人には家族に対して引け目を感じている。家事を頼むとやってくれることがある。大事なことは言いっぱなしにすること。ダメならすぐに引っ込める。やってもらうことが問題じゃない。どうすればコミュニケーションできるかの話。100回言って1回やってもらえたらいいくらいの感じ。

【三番目は「相談事」】

親御さんのプライベートな相談、家族にとって大事な相談をしてほしい。普通、この発想はでてこない。これは、まだ本人を半人前だと思っている証拠。いざ相談してみると的確な答えが返ってきたりすることがある。まずはやる。やってみないと始まらない。相談事のいいところは必要としていてと感じてもらえる。さらに一人前として評価しているという最大限の肯定的メッセージになる。本人は決して悪い気がしない。答えてくれないときは引かなければならないが答えてくれる可能性は高いと言える。

今のは一般論で、どういう形でコミュニケーションのきっかけがひらかれるかは各家庭によって様々で、うちの家族会では、親御さん同志でいろんな答えを出し合っている。ある家庭では麻雀、ペット、競馬、何がきっかけか家庭の文化、家庭の有り様が様々。むしろ皆さんのご家庭の創意工夫が活かされてくる。

【相互性と共感性を大切に】【断絶の場合はまず挨拶の励行から】【率直かつ誠実な態度で】【「これみて悟れ」式は不適】【本人からの訴えは、さえぎらずに最後まで聴く】【話題の選択：まず話したいという態度を示す】【将来、仕事、学校、過去の栄光、同級生の噂話、などは禁物】【ニュース、スポーツ、芸能界など時事的なものは可】

《支援のネットワーク》

【家族会】【電話相談・メール相談】【訪問支援活動】【居場所作り】【グループホーム】

《集団への適応促進》

【デイケア】【たまり場・居場所】【自助グループ】【グループホーム】【家族会】

《おわりに》

今日話したことは家族の中でどういう対処をすればいいかという話でした。支援組織についてこの田辺市は日本で最も先進的な地域ですので省略させていただきます。

今日はあくまでもレシピ集といいますかヒント集といいますか、こういったものに基づいて皆さんがよりよく創意工夫をしていくための土台として活かしていただければ嬉しく思います。

質 問：

Q. お金を使うことはいいとありましたが、いくらくらいがいいですか？

A. あえて言わなかったのは家庭の経済水準によって使える水準がまちまちで幅広いから。5000 円から 10 万円まで幅がある。平均 2～3 万円くらい。親が高齢になり年金生活になると押さえ気味になるかもしれない。大事なのはどれだけ長期間維持できるか。高い金額を設定したとしても 1 年しかもたないのであれば非現実的。例えば 10 年くらい払える額。家族と相談して決めていただくのが良い。

Q. 教師を目指している。不登校からニートの問題が起きていますが。教育現場でやることはどういったことですか？例えば友だち関係を作っていく上で大事なことがあれば教えていただきたい。

A. 専門外なので非現実的な話になるかもしれない。基本的に家族主義。非婚率が高いのは家族に原因の一つがあると思っている。結婚が当たり前でなくなった。就労も同じことが言える。家族の中で教育をなされていれば就労に移行することは難しくはないと思っている。しかし就労の自明性自体が崩れてきているので難しいかもしれない。教育の中で何ができるか、例えばお金の問題、経済の問題を現場の人からリアルな話を聞くとか、インターンシップを取りいれるとか、私じゃなくてもみなさん言っている。私は密かに考えていることがある。今言ってきたことと反対の方向で、むしろ教育の中では人間は就労しない自由もあるということを教えてほしい。ただ何となく就労して当たり前となっている。タブーかもしれないが就労をしない選択肢があることをはっきりさせたうえで自分がどう生きるかと考えたほうがはっきりとしたモチベーションで選択しうると思う。就労しなかった場合にどうやって生き延びるかを考えてアドバイスをすることもある。ひきこもりが長引いてくるとどんな支援をしても社会復帰は難しいかな、と思われるときがある。そうしたときどうすれば社会復帰できるかという支援だけではまずいと思う。同時にどうしたら働かずに生き延びられるかも考えていかないといけない。あるご家庭では 30 歳を超えた本人にマンションを与えて別居した。そして 30 年間毎年 100 万円与える事を契約した。こうしたやり方に私は虚をつかれた。今までにはなかったやり方。これからはこういう発想はありだと思う。どれだけ長期間、親御さんがどういう支援でき

るか。この点を、一度しっかりとリアルに考えていただく。これは保険をかけるという意味であり、悲観論ではない。誰にでも働けない可能性はあるし、そのときどうやって生き延びるべきか考えることはむしろ安全策として欠かせないことだと思う。こういう話をするとうつになる親御さんがいる。働かなくても生きていけると考えるひきこもりの人が出てくると考える方がいるかもしれないがそれは誤解。ひきこもりの問題は働かなくても食っていけるからひきこもるのではなくて、ひきこもりの苦しみは働いていない自分に対して自尊心が維持できない苦しみがある。生き延びられないかもしれない恐怖と同時にどうやれば自分のプライド、存在価値を維持できるかという二つの苦しみがある。苦しみを解除するために、あえて万が一働かなくてもこんな生き方ができますよ、と提示することで問題は自尊心だけになる。問題を縮減することは手続きとして大事だと思うしそうした議論がしやすい土壌を作るために教育の現場で教えてもいい。何となく人間は働くものだというだらしない自明性のもとで教育がなされるよりは働かない自由があるかもしれないというやや哲学的な議論になるかもしれないが、これもありではないかと考えている。

Q. いろんな中学校で14歳の就労体験をやり始めていますがどうですか？

A. 14歳のときに色んな体験をするのはいいと思うがそこに過大な期待はしない方がいい。結果として「就労なんてごめんだよ」と思う生徒がいてもおかしくない。経験すればみんな仕事に動機付けられるといった楽観主義はまずいと思う。あくまでも経験と知識が広がることに価値を置く。それが将来の仕事につながるからというわけではない。さらに付け加えたいこととして14歳の就労体験を持ち上げている人の中にある種の体験主義の人たちがいるのではないかと危惧している。体験主義とは人間は生でいろいろ体験すれば変わるものだというある種の信仰。そういった信仰は現場では無効化しつつある。どうやって乗り越えるか。体験が無意味だとは言わないが体験主義に信望することはちょっと危険かなと思う。

Q. 家族にとって暴力の対応が一番難しいと思うので詳しく教えてください。

A. 家庭内暴力はひきこもりの一割くらいに伴うことがある。伴った場合はこれまでの適切な対応が全て無効になる。ひきこもりそのものの対応は難しいが家庭内暴力の対応はとても簡単。（『社会的ひきこもり』『ひきこもり救出マニュアル』に掲載されている）。

＜＜家庭内暴力への対処法＞＞

【予防：退行させない】

【初期：刺激せずに対話をこころがける】

意外に親からの刺激で暴力が起こることが多い。止めるのは簡単で刺激をやめること。

【慢性期：家庭の密室化 ＋ 本人の退行 ＝ 慢性的暴力】

身内で抱えているから密室化になる。密室化を壊せばいい。

【密室化の予防法】

【(1)第三者の介入】

あかの他人の前では家庭内暴力は起こらない。他人を家に入れればいい。これは大事なポイントになる。

【(2)司法（警察通報）の介入】

難しいと思うかもしれないが意外に簡単。失敗する人は失敗のポイントがある。警察は暴力があった直後に呼ばないと行けない。有効なのは警察が何かしてくれるからではない。警察は何もしてくれない。民事不介入がある。むしろ警察は何もしてくれないほうがいい。大事なのは本人に対して「暴力を受けるつもりはない」と家族の覚悟をアピールできること。警察には来てもらうだけ。暴力の直後は本人も反省してるから恨まれることは少ない。そして暴力があったときにはこれからもこうすることを宣言することが大事。

【(3)避難】

失敗したケースは逃げ方がまずい。本当に逃げるためではない。態度表明が大事。

《避難の三原則》

【(1)暴力直後の避難】

失敗するのはタイミングが悪かったりするせい。もちろん逃げっぱなしもいけない。

【(2)避難直後の連絡】

直後は電話で連絡する。親から見捨てられたと思って自暴自棄になるのを防ぐため。電話で「あなたを見捨てたわけではないが暴力とは共存できないので止めるまで帰りません。」と話す。

【(3)帰宅のタイミング】

本人の感情は暴力の後、何段階かに変化する。直後は後悔しているので「もうしないから帰ってきて。」と言う。しかしこのときはまだ帰ってはいけない。次が怒りの段階。しばらく続くとあきらめの段階。このときに一時帰宅を繰り返し、本格的に帰るようにしていく。このようにやってみるとほぼ家庭内暴力は完璧におさまる。専門家すらいない。マニュアル的に対応できる。家庭内暴力でつまづかないでほしい。簡単な問題は簡単にクリアしておいてもらいたい。

Q. 最近の対談や御著書のなかで「ひきこもりについてよくわからない人は関わらないでほしい。愛する自信がないならせめてほっといてほしい」とありましたが、それを読むとどきりとする。仕事として関わるのはいいのですが一歩踏み込んで彼らを愛する、ということが我々検討委員や担当者ではできているのかドキリとしてしまう。その真意を教えてください。

A. 検討委員会のみなさんは愛があるに決まっているわけですし、ひきこもりの理解は世間をはるかに凌駕し一般的な医療の現場の人からは想像も及ばないほど愛に溢れた活動を展開されている。問題は生半可な関心では困るということ。今のくだりは今年の春に出した『「負けた教」の信者たち』と言う本の前書きの言葉。ニート支援にしてもひきこもり支援にしても生半可な問題意識の人ほど「最近の若い者は…」意識で関わっている。それが本人を萎縮させてしまっている。「最近の若い者」意識は当事者も持っているわけで「俺は情けない」という論理を誇張させてしまっているところがある。ろくに知りもしない人がこの問題について分かったような口をきくことは残念かつ情けないことで、しかも有害ですらあるということ。他の領域では無視できることがあるが、この問題に関しては声がでかい人の発言には影響力があるし、しかも声がでかい人が正しく理解しているとは限らない。そういう人の口封じ、一種の厭味として強烈な表現だったかもしれない。検討委員会で関わっている人たちは色んな愛情を持って色んな方向性に関わっていると思う。一番困るのは無知であるということ。

感想：

- ・ お医者さんへ不登校の人を連れて行かないほうがいいという言葉が心に残りました。
- ・ 結、非常に有益。多くの私の知らないことを知ることができました。
- ・ 初めて参加させていただきありがとうございました。思春期の男の子がおり、来年から就職しますのでひきこもり、ニート等に感心がありました。わかりやすく、勉強になりました。
- ・ 斎藤先生のお話はとてもわかりやすく、あっという間の3時間でした。最後の質疑応答の家庭内暴力への対応の仕方などとても参考になりました。ありがとうございました。
- ・ 大変参考になりました。特にひきこもりの傾向がある子どもへの接し方で、正しいと思っていたことが、まちがいであったことがわかり、これからの取り組みを考えさせられました。
- ・ ひきこもりの過程、対応等わかりやすく教示いただいた。今後の地域社会の課題解消のために役立てたい。「すばらしかった」に終わらず実践できるよう心掛けたい。
- ・ お話が具体的で、実践出来るわかりやすい内容でした。ありがとうございました。
- ・ 私にとってとても参考になるお話をうかがいました。ありがとうございました。
- ・ 大変参考になるお話をありがとうございました。息子が13才～21才ひきこもっています。お話を聞いて、あきらめて、放任していたところがあったと感じています。お聞きした事を一つ一つ、実践していきたいと思います。

- ・ ひきこもりについての具体的なお話でよくわかりました。対応の仕方、金銭面、親の心の持ち方等、本人の心の様子も改めてお聞きし理解できましたように思いました。就労までの過程もわかりました。心新たに対応して行けたらと思います。
- ・ 大好きな斎藤先生のお話を3回も聴けるなんて最高にうれしいです。・・・というのは単なるファンの発言なのですが、サポートする側の原則というのは何度省みても足りることはないと感じました。
 コーヒー美味しかったです。クッキーも帰ってから楽しみに食べます！
- ・ あたりまえのことをあたりまえに考える。親として親が変化することの必要性を感じました。子ども4人ありますが私も毎日「あいさつ」することを大切にしています。子どものSOSを早くキャッチしたいと思いました。
- ・ 「社会的ひきこもり」の第一人者の講演会が開催されたこと、大変良かったと思います。
- ・ 私は来春から精神科の病院の看護師として働くので、将来何か役に立つはずだ！！と思いお話をきかせて頂きました。今回は引きこもりに関して、中心にお話をして頂きましたが、患者さんと接するときのポイントだな・・・と思うこともたくさんありました。
 また患者さんだけでなく、自分の周りのフリーターをしている友だちにも、学校が辛いときには厳しいことを言ってしまっていたので・・・それは、自分でも後で反省しましたが、きっと友だちは傷ついたであろうと思います。
- ・ 高齢者のひきこもりについて取り組んでいますが、本日の青少年の問題と共通点も多く、同じ状態での症例も多いと思いました。まずは、対人との家族が本人よりも大切な問題だと思いました。ディケア、たまり場は今、とても大切な所ではないでしょうか。
- ・ 貴重な話が聞けて、良かったです。ひきこもり等に対してどうすればよいかということ具体的に話していただき、とてもわかりやすかったです。
 ひきこもりになった人に対して受容の心を見せ、「どんな状態になってもあなたが必要だ」という姿勢で向かうことが大切なのだと思います。家族やまわりは、ひきこもりの状態は異常な状態だから、あせりを感じ、余計に追いつめることになることがあると思います。そうでなく、家庭がゆったりと支える、そのようなゆとりを持ち、問題とつきあう必要があると知りました。私は教師をしています、不登校に生徒がおちいった場合、やっぱり焦りを感じ、先に先にと解決を急ごうとしたことがありました。それが間違いだったと思います。今後、そのような生徒に出会ったら、今日の話を参考にし、対応していきたいと思います。
- ・ 幼稚園に勤めています。（今、具体的にひきこもり等に関わっているわけではありません）ひとりの時間を楽しめるように。家族との接点を！それができたら家族とともに社会との接点を！安心してひきこもれる家庭を！など。思春期・青年

Ⅲ－⑦．思春期講演会

期の話でしたが、幼児期の成長の段階と全く同じだと感じました。「過干渉と放任は同じ。」「かまってあげて下さい。」「ひと言ひと言が幼児にもあてはまることで、ホントに本当に感動！私が持っていたことは間違いではなかったんだ！といううれしさを感じました。「向上心を信じて待つ」「仕事なんか一生しないよ」→本当は何か仕事をしたいと思っている。やんちゃしている幼児と同じ。他人とのうまい折り合いのつけ方の練習をさせたいと思っています。親たちは、1年生入学が近くなると、字を教え、計算を教え、英語習わせようかーと大騒ぎですが「人生で必要なことはすべて幼稚園の砂場で学んだ」という本があるそうですが（読んでません）ホントに！学べる幼児期をつくってやりたいと改めて感じました。練習がいるんですよね。親も子も。（働かなくても生きていく方法も考えてー。うん！そうだ！）あいさつ①誘いかけ②お願い③相談・・・ああっこれもだわっ！ここへメモしてもあかんか……。でも、もう書いたからおぼえました。

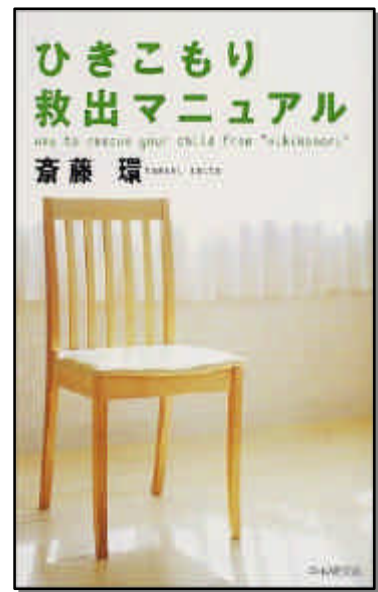
斎藤環氏著書（講演で紹介された著書）：



「負けた」教の信者たち
ニート・ひきこもり社会論
(中央公論新社、2005)



社会的ひきこもり
終わらない思春期
(PHP研究所、1998)



ひきこもり
救出マニュアル
(PHP研究所、2002)

⑧． 軽度発達障害学習会

日 時：平成 17 年 12 月 21 日 午後 3 時から午後 5 時

場 所：田辺市民総合センター 4 階 交流ホール

講 師：宮 本 聡（南紀福祉センター 精神科医、田辺市ひきこもり検討委員）

参 加 者：23 名

参加者所属：田辺市ひきこもり検討委員、紀南障害者就業・生活支援センター、ふたば福祉会、ハートツリーハウス、ひきこもり自助会知音、県発達支援センター、田辺保健所、西牟婁振興局、和歌山県立南部高校龍神分校、みなべ町役場、田辺市

内 容：『発達障害の医学的理解－新たな視点に立って－』

1. 精神発達の構造

A. 周りの世界をより深く広く知っていくこと（認識の発達、理解の発達）

B. 周りの世界とより深く広く関わっていくこと（関係の発達、社会性の発達）

2. 精神発達とは①知能が明らかに平均より低く②そのために生活適応が困難な状態にあり③それが成長途上に現れるもの。正規分布をする。

3. 自閉症とは①ことばの問題②対人関係の問題③こだわりの問題を 3 歳以前に示す。

4. 精神遅滞・自閉症を生物学的にどのようにとらえるか？

精神遅滞→A の遅れ（認識の発達が平均に及ばない）

自閉症→B の遅れ（関係の発達が平均に及ばない）

5. 正常発達（定型発達）・精神遅滞・自閉症の関係

6. ここから見えてくるもの

広汎性発達障害

100 人 100 様、いろんなタイプ。孤立型、受動型、積極奇異型。知的、個性。

対応について

① ことば

・意味の伝わり

・耳からは苦手、視覚的がいい。構造化すること

・表現力、ニュアンス。エコラリア（おうむ返し）、時間差ででることもある。

② 対人関係

・協調性

・問題行動は暇なとき起こりやすい。スケジュール化も必要。ルール理解も。

③ こだわり

・こだわりをいかす。川崎先生は 365 日毎日同じでもいいと言う。

・こだわりをとめることも。置き換えることも。

・タイムスリップ（フラッシュバック）、記憶をよく憶えている

・多飲水、薬に注意

まとめ

・脳機能障害

・構造化

Ⅲ－⑧．軽度発達障害学習会

- ・ 珍しい
- ・ タイムスリップがある
- ・ 行動特性
- ・ 発達の遅れ
- ・ 生涯にわたる→障害にしてくれない

注意欠陥多動性障害

支援の対象にならない。手帳対象にならない。今後の課題。

- ・ おさまってくると考えられている。ちょっとのおっちょこちょいが残る。
- ・ 6、7歳を乗り切れば、経過は良好。
- ・ 3分の1が治癒し、3分の1が少し残り、3分の1が精神科にかかる。アルコール、薬物、反社会性で精神科にかかる人、本質なのか、どうなのか。特別支援教育の期待。

学習障害

学習障害は軽度発達障害に含まれている。

社会人になれば字が書けなくても他の方法はある。

軽度発達障害

高機能広汎性発達障害・・・生涯続く。福祉の課題。

ADHD、LD・・・成長とともにおさまることがある。

子どもの対応

2次障害の予防としては、自己評価の低下を予防すること。年相応の振舞い方の指導。

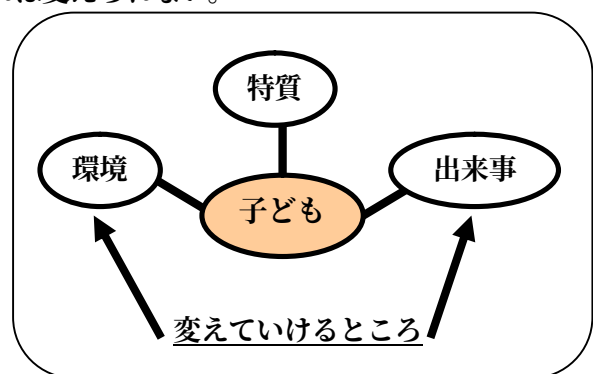
変えていけるところ

特質・・・その子がもって生まれたもの。これは変えられない。

○環境・・・家族、兄弟、友だち、学校、地域。

○出来事・・・ライフイベント。

我々にできることはある。



手帳について

療育手帳は知的だけ。ICD-10に病名。

広汎性発達障害は精神手帳の可能性。就労支援。

LD、ADHDは制度なし。

ポラリスについて・・・発達障害支援センター、全国で23番目。

質 問：

- Q. 大人のADHDについて。受診を勧めると怒られた。その人は片付けられない、人間関係が難しい。
- A. それなりの生活をしてる人に病院は何かないと難しい。それにADHDを診る人がいない。医療不足。他の可能性を探ることも。
- Q. ADHDの薬について。リタリンが有名。集中できるのか？他には何があるか？
- A. 6歳から、乗り切るために対応していくことが一番。薬の副作用で食欲がなくなる、らしくなくなる、肝機能、あとチックがある人には使わない。
他の薬として抗うつ剤、抗てんかん剤、精神安定剤（意識レベルを下げてしまう）、あくまでリタリンが使えない場合。リタリンは目覚めを良くする。覚醒レベルが低い（仮）、リタリンであげる。
- Q. 田辺では6.3パーセントより低いのでは？判断、Drは言いにくい？LDの事例があれば教えてほしい。
- A. 小学校低学年、学習困難がある。読字障害だどどの教科も低い。病院に来る人はわかりやすい。WISCのホームページ。確認してほしい。そんなに難しくない。
- Q. 3分の1はひきずった人たち。就業センターに来る。集団、チームで動きたいがどう注意すればいいか？
- A. LD、ADHDはそんなに難しくない。病名の理解と開示。
アスペルガーや高機能自閉症は難しい。理解はしてくれるがコミュニケーションがどれだけでできるか。ケースワーカー、頼れる人を作る。（やってみたらやれるかもしれないが）グループはあかんかも。一人のほうがいいのかも。
- Q. LDの支援の方法は？
- A. 基本は普通学級の中で。マンツーマンが必要な場合があり一人一人の特性に応じた指導方法がある。2次障害、負担を減らす。マンパワー。一人で40人クラスでは不可能。
- Q. 読字障害だと知的だと思われませんか？
- A. 低学力。知能は変わらない。知能テストでは書いたり読むテストは少ない。手帳をもらうために低くすることはある。まず、障害のことを誰が言っているかが重要。

感 想：

- ・ 本を読んでもわかりにくい事（理解できない？）が多かったのが、今日のお話を聞いてよくわかりました。制度としてのサービスがない中で変えていける場所を出し合って、話し合っている場がほしいですね。現場の教師がとても困っているということをよく耳にしますが、話し合えるネットワークがあまり無いようです。ぜひ市の方でも積極的にこういう機会をもってほしいと思います。



田辺市ひきこもり検討委員会 平成17年度) 議題

第1回 (H17. 5. 29) 出席者28名	第2回 (H17. 10. 29) 出席者21名
・役員、小委員選出 ・田辺市ひきこもり相談窓口について ・平成17年度事業計画について	・平成17年度上半期事業の報告 ・平成17年度下半期事業について
	

小委員会 平成17年度) 議題

第1回 (H17. 4. 21) 出席者10名	第6回 (H17. 11. 17) 出席者10名
・交流会、研修会の報告 ・平成16年度のまとめ ・平成17年度にむけて	・思春期講演会について ・青年の状況 ・体験発表と質疑応答
第2回 (H17. 6. 23) 出席者10名	第7回 (H17. 12. 8) 出席者 7名
・窓口の支援状況について ・今後の支援の方向性と課題	・思春期講演会について ・就労支援の状況と今後
第3回 (H17. 7. 21) 出席者 8名	第8回 (H18. 1. 19) 出席者 9名
・相談状況 ・家族会状況 ・心身医学会の報告 ・自助会について ・平成17年度事業 (合併地域への啓発活動、斎藤環氏講演会) ・事例検討	・思春期講演会、交流会の様子について ・みらいの会との交流について ・今後の窓口の方向性について (ニート支援を含めて)
第4回 (H17. 8. 18) 出席者 8名	第9回 (H18. 2. 23) 出席者 7名
・支援の評価方法について ・就労、体験等他機関の事業の紹介 ・前回の委員会の課題 (1週間のスケジュール、家族会の社会性、自助会と知音の関係)	・全国大会に参加して ・まとめの冊子について
第5回 (H17. 9. 22) 出席者 9名	第10回 (H18. 3. 16) 出席者 8名
・平成17年度事業 ・合併地域啓発活動の様子 ・支援の評価方法について ・その他	・みらいの会との交流報告 ・まとめの冊子について

田辺市ひきこもり検討委員会 平成17年度 活動

日 程	内 容 / 講 師		場 所	参加者					ページ
				検討委員	当事者	家族	その他	合計	
H17.9.4	ひきこもり講演会	講師 :宮本 聡 氏	田辺市本宮	5			25	30	Ⅲ－⑥ P. 56
H17.9.16		講師 :楠本 哲也 氏	田辺市本宮	5		2	4	11	
H17.9.10		講師 :山本 朗 氏	田辺市龍神	6			11	17	
H17.10.7		講師 :楠本 哲也 氏	田辺市龍神	6			6	12	
H17.10.2		講師 :山本 朗 氏	田辺市中辺路	6	1	2	28	37	
H17.10.21		講師 :楠本 哲也 氏	田辺市大塔	11			19	30	
H17.12.17	思春期講演会 講師 :斎藤 環 氏		田辺市	22	3	19	187	231	Ⅲ－⑦ P. 69
H17.12.18	青年交流自助会	斎藤環先生・上山和樹さんを迎えて	田辺市	4	8	12	1	25	Ⅲ－③ P. 44
H18.2.24		みらいの会を迎えて	田辺市中辺路	4	10	1	4	19	Ⅲ－③ P. 51
H17.12.21	軽度発達障害学習会 講師 :宮本 聡 氏		田辺市	7	1		15	23	Ⅲ－⑧ P. 93
H18.2.19	第1回社会的ひきこもり支援全国実践交流会 (エルシティオ全国大会)		和歌山市	田辺市からの参加人数					Ⅲ－⑨ P. 98
				9	2	4	3	18	
H18.3.25	私のしごと館 《見学、仕事体験》		京都府	4	12	7	2	25	

第1回社会的ひきこもり支援全国実践交流会

日 時：平成18年2月19日（日）
場 所：和歌山市民会館（和歌山県和歌山市）
参加者：18名（検討委員、家族、その他）
《感想》



自分は、社会的引きこもり者を支援するスタッフとして、新任であり、知識や経験も本当にまだまだ不足しているなと感じました。今日は、全国の色んな人達や施設、団体の話を聞けたことが良かったです。自分は、今、精神のこと、心のこと、引きこもりに関することを日々勉強中です。今後とも、学びを深めて、一人でも多くの人の役に立ちたいと思っています。

分科会は期待した内容でなく残念でした。各地域、機関によって対応がまちまちで相談員の専門性や関係機関とのネットワーク支援体制に差があり、改めて田辺市はスゴイと思いました。

子どもの心が動くことを考えよう。たとえば、お茶わん一つからでもと聞いて、少し気持ちが楽になりました。一度断られても気にせず、今までのように声をかけていこうと思いました。今日は参加できて良かったです。

全国各地から来られていてこの件に関して改めて驚かされました。支援者の方々が多く参加されておられたようでした。私たち家族にとっても心強く思いました。秋田先生のお話、ヒントになることが多く、良かったです。あせらず、ガソリンの補給に心がけたいと思います。

講演に参加しました。それはよかったと思うし、勉強になりました。しかし、おわりの会でのシンポジウムは参加していないのでチンプンカンプン。もう少し工夫してほしい。

私のしごと館 体験・見学ツアー

（主催：和歌山県経営者協会若年者地域連携事業推進センター）
日 時：平成18年3月25日（日）
場 所：私のしごと館（京都府精華・西木津地区）
参加者：25名（検討委員、当事者、家族、その他）
《感想》



今回は田辺のみなさんと一緒に行けて楽しかったです。普段はごく一部の人しかかわりのない当事者にとって、いい体験になったと思います。内容的にも「しごと」というより新たな「体験」という感じで楽しめたのではないのでしょうか？また、いろんな立場の人と交流できる機会をつくっていきたいと思いました。引率者も一緒に楽しめるような企画を今後もふやして下さい。
しごと館のあまりの立派に驚きました。その割には「しごと」に結びつく内容ではないのが残念です。

声優としてやっていける自信ができました。このツアーには現在のところ、意見はありません。
しごと館はもうひとくふうが必要だと思う。

さまざまな仕事を体験し、その中から、興味のある、自分に合った仕事を見付けるきっかけにはなったと思う。この様な試みが増え、集団で行動する場が増え、その中で他人と行動することに慣れる最初の一步だと思う。

職業適性診断システムが本格的で、多様な角度から詳細に適正を絞っていく過程に驚いた。自分にとって仕事って何だろうと考えさせられました。
実際にやってみないと感じる事のできない物を体験を通して感じられたので良かったです。建物がすごく立派でした。

ガラスの絵付けは、思ったより楽しかった。館の中は広くて、けっこう迷いました。
もっと時間があれば他の体験もしてみたかった。

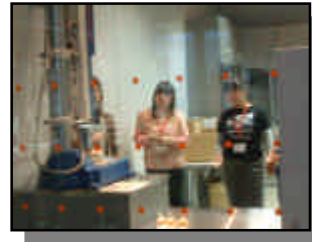
普段体験できないような内容の職業体験が出来、貴重な経験をさせてもらい、とても良かったです。また機会があればこのようなツアーを組んでもらいたいと思います。

今日は朝がすごく早くてしんどかったけど、仕事体験は楽しかった。その後は中を色々見て回って、「しごとシアター」を見て、思っていたよりおもしろかったので良かったと思う。こういう機会があって良かったと思うし、また自助会でも色々なイベントが出来たらいいな、と思った。

大きな建物でした。
危険な仕事、目立たない仕事をしてくれている人々の苦労や努力に支えられて、生きているんだと思いました。目良さん、松下さん、今日はありがとうございました。

組みも体験、思ったよりむずかしく・・・でも頭の体操になりました。
又チャンスがあれば他の体験もしたいです。ありがとうございました。

いい天気にもまれ、今日はよい体験ができました。大変たのしかったです。ありがとうございました。



消防官の仕事はやってみて自分がどれだけどんくさいかわかった（苦笑）。でも、消火のシュミレーションをやってみて一通りの作業がわかった。大変だった。もう少し見てまわる時間がほしかった。
パソコン診断が自分の性格通り出た気がする。

選択した体験を終えたらけっこう暇だった。体験のほうは思っていたよりも難しかった。体験としては良かった。時間までかなりあったので1Fか3F、企画展示室でのカーコレなど、展示物をみたり休憩を摂ったりしながら2時まで過ごした。残りの時間までしごとシアターに入ろうとも思ったが、やめて3Fで摂り損ねた昼食を食べて集合時間がくるまでマターリしてました。でも約3時間は長いようで短かったです。

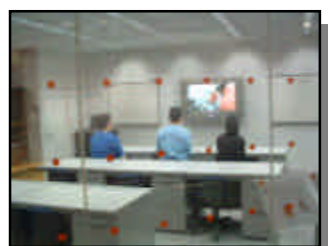
とってもいい思い出になった。介護一つでも、沢山の苦労があるけど、それを体験することによって、すごく役に立った。だから、コミュニケーションを一つとっても人の温かみや、優しさがわかる。だから、人の為に立つことが、何よりも大切だと思った。これから、沢山の苦しみがあると思うけど、人を支えていける自分になりたい。人との関わりの中で得ているものはきっと役に立ち、人を考えたりしていけるのだと今回の中で学んだと思う。今を生きていく中で。

私にとってしごと館を体験できたことはとても良い体験でした。ありがとうございました。

建築家の仕事を体験してみて、とても奥が深かったので興味がわいた。その時間の体験者は僕一人だけだったから少しさびしかった。
そのあとにやった適正診断テストはかなり当たっていたのでびっくりした。

素直に面白かったです。時計もきれいに作れて、持って帰ってこれてよかった。バスもいつもより一回り大きいので、リラックスできた。また、こういう機会を作っていけたらと思います。

よかったです。



⑩. 田辺市ひきこもり相談窓口担当者感想

五年を経過して

田辺市 健康増進課 ひきこもり相談窓口担当 目良 宣子

専任の窓口担当者となってから早5年が過ぎました。当初3年間は一人で担当し、検討委員会の委員であり事務局ということで、相談を受けることへの不安と病気を見落とさないかという責任感と、委員会をどのように運営していくかと考えながら、事務量の多さに目の回るような毎日で眠れない夜も数え切れないほどでした。

3年目の秋、一睡もできなくなり倒れたとき、「飲みに出てこいよ」と自宅まで声をかけてくださった検討委員さん、「目良さんが倒れないうちに増員を」と声をあげてくれた家族の方、当事者の背景の見極めに不安だった時、忙しい診療時間の合間をぬぐって診察してくださった精神科医、緊急事態に同伴訪問して下さった精神保健福祉士、私の泣き言を怒らずに聞いてくださる委員長、副委員長さん方、支援者を支援してくださる多くの関係者の方々に支えられてきました。

ここ2年間は担当者が一名増員になり、随時色んな事を相談し合える状況になり、二人三脚で支援を進めていく中で、支援の方向性が広がってきたように思います。

5年間を思い返し考えてみると、人間社会と言うのは、誰もが一人ではなく誰かと支え合いながら、互いに補完し合いながら生きているものなのです。当り前のことですが、その当り前がなかなかうまくできないのも現実です。より身近な家族だからこそ、期待度が高まり、こじれてくることもあります。人と人が適度な距離をとりながら接することも大切です。

「自己を知り人を知る」「他者は自分の鏡である」今年度の青年自助会が京都みらいの会との交流会を終えたバスの中、ある青年が「目良さん、自助会を作ってくれてありがとう」「人は皆成長するんだね」「感謝の気持ちを忘れたらあかんなあ」と語りました。胸に熱いものがこみ上げてきました。「自助会はあなたが作ったもの」「私も少し成長したかな?」「出合いをありがとう」5年前とは違う自分を発見中のこの頃です。

来年度は更に支援の充実を目指したいと思います。

ひきこもり相談窓口を担当して

田辺市 健康増進課 ひきこもり相談窓口担当 松下 直樹

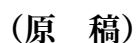
私が田辺市のひきこもり相談窓口の担当になり、早2年が経ちました。窓口開設後支援の広がりを見せる中で3年間は目良氏が一人で担当し、相談件数の多さや家族の方の熱心な要望からこの立場を与えていただいたことはこちらにきてから知りました。それだけ何も知らないところから始めたひきこもり支援ですが今となっては自分なりに感じていることがありますのでここに記したいと思います。

一番感じるのはひきこもり支援でベースとなるのは個別相談で地道に継続した関わりが必要になるということでした。特に、宿泊型の支援がない田辺市においてはいかに支援を継続できるかが重要で、本人はもちろんですが、たとえ本人でなくても家族の関わりや家族自身が新たな視点を持つことでさまざまな変化が起こることを実感してきました。

今年度は当事者支援の特に青年自助会での関わりが中心でした。集団での関わりになりますが、参加してくれた方には謙虚に平等に接する事を努めてきました。この中ではもうすでに「ひきこもり」という言葉は意味がなくなる気がします。悩みを持つ若者が色々な話をし、さまざまな体験を積んでいきます。私はその一員として接してもらえた気がします。この自助会が存続していく中でも個別相談の必要性は問われます。また、こういった自助会のような集団を対象とした支援や、社会体験の場を支援することはまだまだ未開拓の部分が多く、今後の発展に期待しています。そのかわり、窓口では個別の相談を更に充実させていくことが求められてくると思います。

最後に、あっという間の2年間であまり振り返ることをしなかったのですがこのまとめの冊子を検討委員の方や窓口担当目良氏と作成する中でこれまでしてきたことを振り返ることができました。一つ一つが田辺市の特徴である他機関とのつながりが発揮されたもので、同時に個別相談を大切にした支援でした。この支援に深く携われたことはこの地域に住む自分自身にとって非常に大きなものでした。これから、どのような形でひきこもり支援に携われるのか思案中ですが、ここで学んだことはこれからの自分を支える礎になると感じています。

保健師ジャーナル [2005 年 12 月発行 (Vol.61 No.12) 医学書院]
特集 「ひきこもり」 ケースには、こう対応する！
—保健師ができる支援について考える



和歌山県田辺市保健師 目良 宣子 105



『和歌山県田辺市におけるひきこもり支援』（原稿）

和歌山県田辺市保健師 目良 宣子

田辺市（人口約８６，０００人）では、１０代から３０代（思春期・青年期）を中心とした「ひきこもり」「社会的ひきこもり」に対する支援を展開している。

《田辺市ひきこもり支援の体系（図１）》

『ひきこもり検討委員会（以下検討委員会）』（平成１３年１月設置）と『ひきこもり相談窓口（以下相談窓口）』（平成１３年３月開設）が支援体系の柱となって、本人や家族を支援している。

相談窓口の担当者は、当初保健師１名が専任となり（平成１６年度から１名増員）、専用電話の受付は平日の午後２時間（ＦＡＸ・メールは随時受付）、できるだけ来所による面談につなげ、継続支援を行っている。本人が直接来所することが困難であることから、家族への支援から問題解決への糸口を見出していく。

相談窓口では、ひきこもりの背景を見極め、①精神疾患（統合失調症や感情障害等）、②発達障害（中等度以上）、③社会的ひきこもりに分類する。①と②については、各機関とのネットワークを通じ、それぞれの背景にそった連携先を紹介するとともに、既存の社会福祉制度（公費負担制度、手帳等）の活用につなぐ（どの場合においても、家族あるいは本人の了解を得て）などの調整を行なっている。③については、家族は１カ月に１回、本人に出会えれば２週間に１回をベースに継続相談している。また必要に応じて、家庭訪問を実施する。また詳しくは後述するが、家族会・青年自助会・居場所（デイケア）・就労支援を紹介していく。

人格障害など精神疾患との境界があきらかでない人、あるいはＡＤＨＤ（注意欠陥多動障害）やＨＦＰＤＤ（高機能広汎性発達障害）、アスペルガー障害など発達の課題を有する人など、現状では活用できる社会資源がないので、社会的ひきこもりの支援として継続している。

不登校や休学中から相談が入り、継続的な支援をしてきた場合の社会参加は早い。できるだけ早く支援のルールに乗っていけるように、また家族が孤立していかないようなシステムが必要である。

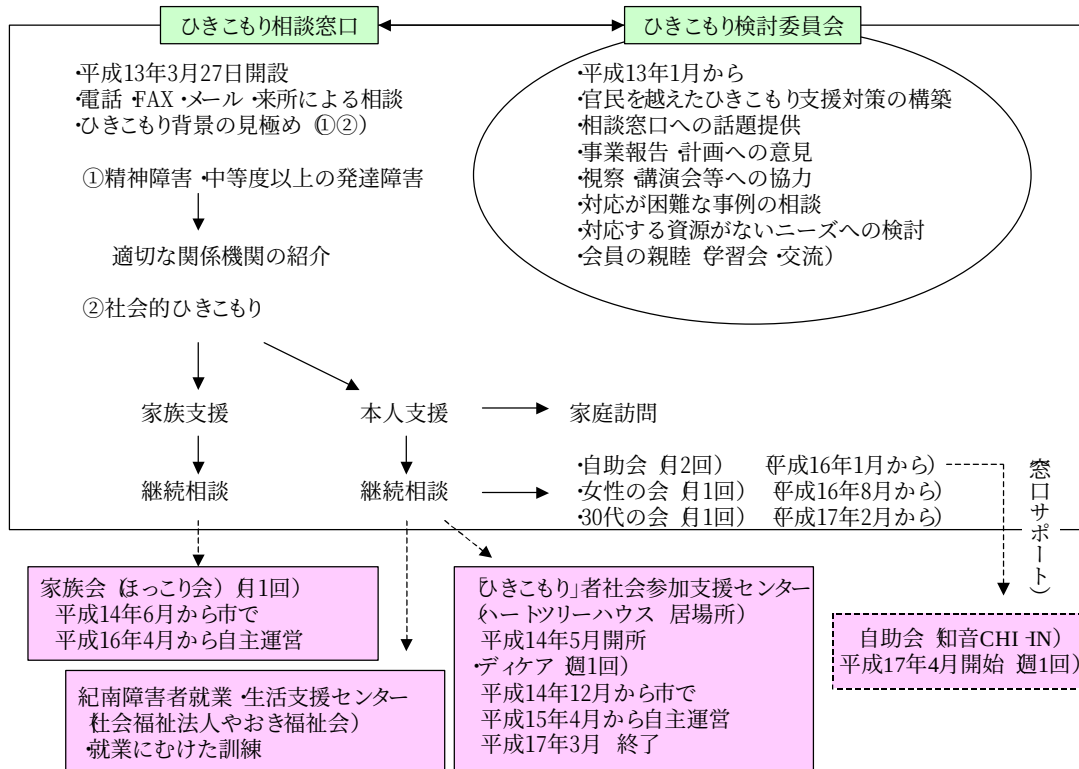
また精神疾患の早期発見と早期に医療に繋ぐことと、見落とされてきている軽度発達障害児者への適切な対応が、精神保健、母子保健、学校保健活動の中でも大事なことである。

検討委員会は、ひきこもり支援を多角的に検討していくために、官民の医療・保健・福祉・教育等関係者、家族会代表や当事者代表を含む３３名体制で構成している。（図２）のとおり、年２回の開催だけでは実質的に機能しにくいので、１１名を小委員会委員として月一回委員会を開催して、その結果をその他の委員に報告している。委員会では、困難事例の検討や、窓口での相談のニーズから、家族会・居場所・デイケア・自助会・就労訓練等の必要性について意見を求め、官民の協力の下徐々に支援先を構築してきた。



Ⅳ－（１）．保健師ジャーナル（原稿）

図 1) 田辺市相談窓口支援の流れ 実線枠外は民間実施)



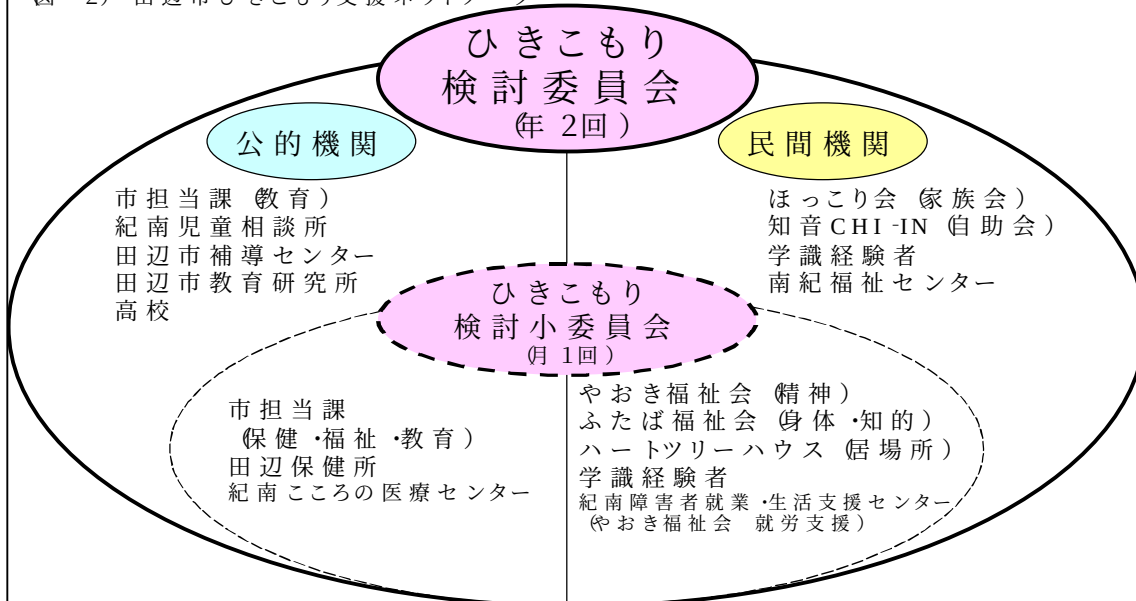
※田辺市が「社会的ひきこもり」としてとらえている状態

背景の①を除く、6ヶ月以上自宅にひきこもって社会参加をしない状態が続いているもの。

軽度発達障害、人格障害、義務教育（高校・大学生等）以降の休学中を含む。

不登校からの長期化、不安や緊張・恐怖感が強い、意欲や活力の低下、万能感が強く失敗を恐れて回避、他罰的・自責的・依存傾向等様々なタイプがある。

図 2) 田辺市 ひきこもり支援ネットワーク





《継続相談》

相談は、必ず援助を継続していくことができるように、次の約束をする。そのためにも、勇気を出して相談に来られたことへのねぎらいを忘れず、「相談に来てよかった」「楽になった」「次も来たい」と思ってもらえる関係を作っていく。初回面接の大切さ、傾聴と受容、1回の面接だけでこちらが必要とする情報を把握してしまおうとするのではなく、2～3回かけて情報を整理するくらいのつもりで関わっていく。来談者がひきこもりの当事者ではなくても、ケアを必要としているのは目の前にいる方ということも忘れずに、来談者のペースに合わせながら、関係作りとともに、ひきこもりの背景を見極め、本人や家族等の状況や課題を丁寧にみていくことが大切である。

《支援の方向としての視点》

3人集まれば集団にする、仲間づくりをするという方向ですすめてきた。家族会も青年自助会も、居場所も、デイケアも、全て3人になったら集団にしてきた。

また支援活動は、自分だけで抱え込まない、支え手を1つでも多く広げておく。支え手が網の目のように重なりあって社会が築かれているというシステムにしていく。

個人や家族、地域や社会を総合的に見ながら支援策を構築していくという方法は、すべての保健福祉活動に共通するものである。

《家族相談から家族会へ》

社会的ひきこもりの家族が、3家族集まった14年の6月、家族会をスタートし、平成16年4月から自主活動として独立した。

家族が互いに話をし、一人ではないこと、励まし合ったり慰め合ったり、家族と支援者との相談の中だけでは得られないものがそこにはある。

通常は家族教室などを開催し、その卒業生から家族会へと発展するケースが多いように思うが、田辺市では、家族教室は実施せず、最初から家族会として、支援者が面接で把握している家族らの出会いの場として開始した。家族会では、支援者はできるだけ口を出さず、家族らが語り合える雰囲気作りに徹した。家族の中から、「こんな話が聞きたい」「医療や福祉について知りたい」等希望があれば、検討委員に協力してもらうなどして知識の提供に配慮してきた。家族会の中で話し合われた内容で、更に悩んだり考え込んだりする家族に対しては、定期的な相談日を時には早めたりして、面接の中でフォローするようにした。

家族会を行政の中から独立に向けたのは、行政の中での活動には制限があり、自由性が乏しいことと、家族会自体の社会性を目指したいと考えた（社会への啓発にもなるからである）。家族らで活動していくと、もし生産性のある活動をしたい、青年らへの資金集めをしたいというときでも動きやすいし、そのことで家族自身も本人から外へ目を向けることができる。また、田辺市だけではなく、周辺市町村の方も入会できる。平成16年4月から、相談窓口担当職員が増員されるにいたったのも、家族会の力が大きかった。

《本人相談からデイケア・青年自助会へ》

家族相談を継続していく中で、本人の相談につながっていく。本人と面接が出来るようになると、ゆっくりした関係づくりから始める。本人が自分から語りだすのを待



には待つことも大切である。会話は本人のことから遠い日常的なことから始め、徐々に本人の関心の高いことや好きなことに話題を発展していく。支援者と本人の間での緊張感が緩んでくると、少しずつ人間関係を広げる為、仲間を紹介する。

急に居場所へ通うというのはむずかしいので、青年が３人集まった段階で、デイケアとしてスタートした（平成１４年１２月から平成１７年３月終了）。その中の１人は、すぐに学校へ行けるようになった。デイケア（民間実施）は当初１０人位の青年が出入りしていて、その中の青年の１人が、「みんなと語り合える場が欲しい、心の内面を語り合いたい」と言い出した。デイケアの場でそのことを提案したが、うまく伝えられず、何とかしてほしいという数名の青年からの相談によって、平成１６年１月から青年自助会の育成ということで、相談窓口の職員が関わる形でスタートした。

《言葉で語ること》

相談の中では、はじめのうち自分の今の状態を、親や先生、友達など、みんな他者のせいにして、いっぱい吐き出す傾向にある。他者への攻撃が、だんだんと自分に向かっていく。私がこういう考え方だから、こんな性格だからこうなってしまった等、泣きながら語ることもある。そのうちそういう自分を、「こんな私だけど、こんな私でオーケーよ」と受けとめていくようになる。そういう状態になるまでに、支援者との間では、心の奥底にある相当な部分まで話し、心の中を言語化して、きちんと表現することができるようになっていく。

しかし、集団の中に入ると語ることができない。お互いに、「最近あの人来ていないけどどうしているんだろう」と相談の中では気にしているのに、直接出会ったときに聞くことができない。仲間の中でそうした気持ちを伝えることができるように、人間関係を調整しながらすすめている場が青年自助会である。

《青年自助会の中で気をつけていること》

まずは自己紹介。名前を言うことから始める。

ルールが３つある。①言いたくないことはパスをしよう。②人の意見に対しては批判をしない。③自助グループの中で語ったことや聞いたことを外部ではもらさない。話しても家族だけ。このことで当事者自身が守られることと、家族の中でのコミュニケーションの度合いが支援者側にわかる。

《青年自助会の中で起こること》

ルールを決めているのにもかかわらず、話し合いの中で、攻撃性の高い青年は、「治る気あるのかよ」とか言ってしまう。言われた青年は顔の表情がびくびく動いたりして、すごく緊張感が高くなるが、言っている青年は言われた青年の反応に気がつかないで、繰り返し言ってしまう。「じゃあ自分はどうなの？」と口をはさんだら、自分に置きかえられると、「いやあ僕もできていないな」と言って止める。青年同士のやりとりをどこまで見守るのか、やりとりにどこまで耐えられるのかなど思いながら、途中でやむをえず介入する。こういった調整をしているが、そのさじ加減がポイントである。この支援者の調整に気づいている青年もいるし、言われた側の青年に「ゆっくり考えたらいいいんだよね」と助け船を出す青年もいる。それは自分に向けての言葉という側面もある。



それぞれの関係が多少ぶつかる。ぶつかった場面での対応、更に個別の面接の中でフォロー等、人間関係の調整を続けていくと、時に不思議なことが起こる。それまで全然話さなかったのに、あれだけ一方通行に言われていたのに、青年同士互いに、携帯電話のメールアドレスの交換をしていたり、「今度〇〇へ行く？」等のやりとりをしていたり等、ここでの出会いが、プライベートな付き合い（カラオケ・ショッピング・互いの家を訪問等）に発展していく。

ぶつかることは大事である。一度ぶつかって、互いに気持ちの中で整理ができると、それが次の人間関係を生んでいく。だからフォローは必要であると考え。放置していたら傷ついたままで終わっていたかもしれない。そういう調整役をしていながら、経験を重ねることで、人との間で折り合いをつけていく方法を学んでいくのである。

《青年自助会の取り組み（表1. 話し合いのテーマの移り変わり）》

当初自由に話し合う場として設定してきたが、テーマがないと会話がすすみにくかったため、SST(ソーシャルスキルトレーニング)を取り入れて、1回目は支援者側でテーマを設定して、2回目からは青年らが自分たちで話し合いたいテーマを決めて実施してきた。平成16年11月から平成17年4月までのSSTに1回でも参加した青年は14人、1回平均7～8人の参加（常時の参加は3～4人で、入れ替わりがある）である。支援者は2人、リーダー・コリーダーとして、場を調整している。

1回目は皆が経験したことのある「学校」のことで話し合うことにした。テーマは《学校でイヤだったこと、おもしろくなかったこと》。皆がいやな体験をしている。友達関係、先生、体育、クラブ、いじめ等。抑うつ的になったり、死にたいと思ったりした。人間関係はしんどい。自分の好きなことができたらいのに・・・しかし一人では何もできない。ということで、テーマは、《一人じゃ何もできない》になった。

2回目は、《家族について考えていること、感じていること》で話し合うことになった。家族はありがたい存在である。経済的な援助、距離をとってくれている、配慮がある。しかし罪悪感につながることもある。早く恩返しをしたい。それは親の為に自分自身が幸せになることか？けんかばかりしている。家族とまったく話さない。友達の家は家族が温かい。家族を前にして思ったこと話せない・・・ここでテーマは、《どうすれば親と話し合うことが出来るか？》になり、他人であっても家族であってもやはり人間関係はむずかしいということで一致した。

3回目は、《ひきこもりとは？》で、昼夜逆転の状態を体験している青年が多い。ストレスはどうやって解消する？働いていない罪悪感。自分の存在感がどうでもよくなる。自分の価値観をくずせない。自分に向き合うしかない。テーマは、《自分のことは好きですか？》にうつった。

4回目は、《生きるとは？》ということで、自分探しである。今の状態を受け入れるところから始める。幸せになる為に生きていく。死ぬのが怖いから生きている。生きているのではなく生かされている。今より幸せになったら親も喜んでくれる。自分の幸せが他人の幸せ、社会の幸せもわかるのかな。テーマは、《幸せとは？》になり、小さな幸せから大きな幸せまで、物事の捉え方によって変わってくるということになった。

5回目は、《自分を大切にとは？》で、自分の知らないところで輪が広がっていたりする。休憩の仕方が分からない。一歩踏み出したことで苦しみを味わう。歩み出さ



なくても苦しみを味わう。自分のことを全部出したいけど周りが聞いてどう思うか？自分の意見を言うだけではなく人の意見も聞く場。N0は言いにくい。遠まわしだと余計に傷つく。自分は自分、人は人。伝える努力はする。限界がある。聞く姿勢がいる。ポーズもしんどい。100%の理解は無理。一緒じゃないのに共感されるのもいや。付き合いの中で自分を守る方法を身につけた。話せない人は無理に話していいものか？フォローしてあげられるのか？自信がない。ひきこもりを深く考えたくない。深みにはまるとしんどい。自分のことも大切にしたいし、仲間も大切。人は自分の鏡になってくれる。人を知ろうとすると自分の理解が深まる。

6回目は、難しいテーマだが、《人との関わりについて》話し合うことになった。『死にたい』は『生きたい』ことの裏返し。『死にたい』ことを簡単に出すのはどうか？聞いた人が被害者になる。『打ち明ける』『打ち明けない』の関係があること。『笑い』も暴力になりうる。人にどう思われているのかが気になる。ということからテーマは、《人の目を気にするか？》にすすみ、人の目には外見的なことと、内面的なことがあること。価値観の違いがある。相手に気持ちを伝えることは難しい。他人ならほっとけるが肉親となると何とかしたい。肉親には期待感がある。親が変わってくれること。自分が変わる。できることからする。嫌なものは嫌。我慢するとたまってくる。気分転換も大切。頭は忘れても体は覚えている。親に対してあきらめていることもあるがあきらめきれない。一番大切なことは思いやり。人を大切にすること等発展した。

7回目は、就労支援を受けている青年が、ハローワークで仕事を探し、面接試験を受けたことを報告してくれた為、《働くということって何？》というテーマで話し合うことになった。内職やアルバイト体験。好きなことをやってみたい。でも失敗するのが怖いこと、不安があること、人とうまくやっていけるか等、必ず人間関係の話になる。『ある程度』とか『ええ加減に』ということばも出てきたが、どうしても人間関係の問題にぶつかる。この時参加している青年7人が皆仕事をしたいと思っていること、車の免許を持っていない青年は皆免許を取って自分で自由に動きたいと思っていることが確認できた。

8回目は、《自分のこと、語れているか？》9回目は、《今、一番悩んでいること(言える範囲で)》と進めていく中で、自動車学校に通い始めた青年が2人、もうすぐ行こうと思っている青年が2人、アルバイトを始めた青年が1人、就労訓練を受けている青年が3人になった。

自助会に参加している青年からは、自助会を「一人一人の心が触れ合って、一人一人のエネルギーがたまる場所」「たくさんの思い、たくさんの感情、混ざる場」「交流できる、最終的に人を伸ばす場」「治るのではなく、成長する場」

(表1. 話し合いのテーマの移り変わり)

第1回	【学校でイヤだったこと、おもしろくなかったこと】→【一人じゃ何もできない】
第2回	【家族について考えていること、感じていること】→【どうすれば親と話し合うことができるか】
第3回	【ひきこもりとは？】 →【自分のことは好きですか？】
第4回	【生きるとは？】【幸せとは？】
第5回	【自分を大切にとは？】
第6回	【人との関わりについて】 →【人の目を気にするか？】
第7回	【働くということって何？】
第8回	【自分のこと、語れているか？】
第9回	【今、一番悩んでいること(言える範囲で)】



「自助会は心の中の空間、空間がなければ押しつぶされそうになる」「ひきこもりが悪いことかなと思ってきたが、ひきこもってもいいと思えるように、自分を見つけられるようになった」等の感想がある。

《青年自助会の発展》

平成17年4月から、居場所実施のデイケアが閉鎖されたことから、青年自助会の青年らが、独自で会場を借りて、1週間に1日、交流を図る機会を持つために、会に「知音(ちいん=こころの底を打ち明けて話することができる友の意)」と名称をつけて、集まることになった(本来の青年自助会の一步を踏み出した)。当初調整役として希望され、支援者が関わったりしたが、そうすると各青年対支援者の関係が強くなり、青年自らの自立を阻む為、青年らで話し合った結果、支援者は必要に応じたサポートという形で待機することになった。まだまだ試行錯誤ではあるが、青年を主体とした独自の活動を見守っていきたいと考えている。

《就労支援の必要性》

自助会の青年(平成16年度21名)のニーズとして、約6割が就労を希望している。仕事がしたくて面接に行っても顔が上げられないから、面接に何回かチャレンジしているけれども、なかなか採用されない。そんな状態の青年が、自分の力を精いっぱい発揮でき、やりたいことを社会の中で実現していけるような仕組みを、地域の中で選択肢の1つとしてできてくればいい。

現在、社会福祉法人やおき福祉会の紀南障害者就業・生活支援センターに青年を紹介して、ジョブコーチがついた就労に向けての訓練を受けている。数ヶ月の訓練で自信がついたり、意欲がわいてきた青年は、自分でハローワークに出かけて、何回かの面接後、アルバイトを始めた。また、外出時に帽子をはずせなかった青年が、かぶらずに出かけることができるようになったり、衝動性のある青年が、感情をコントロールする力が付いてきたり等、就労体験が魔法の力を持っているように感じる。

いきなりハローワークへ行くのは難しいけれども、訓練を受けてから一般就労につながるっていくことができるような仕組みが、社会的ひきこもり青年への支援に必要である。

《これまでの支援の総括》

全般的に支援を通じて感じたことだが、集団活動と平行して個別面接を継続してきた青年は、自分で感情をコントロールして行動を決定していく力をつけていくということである。支援者は、青年の自らの力を信じて、自ら動き始めることを見守りながら、付かず離れず適切な距離をとりながら関わり続けていくことが大切である。そして毎日青年と付き合っておられる家族と共に(毎日ではないが)青年と付き合いながら、家族や青年から学ぶ姿勢を忘れず、時には支援者自身も自分の心と向き合っていくことも必要である。

集団活動は、7から8人(多くても10人まで)が育成しやすい。人数が増えてくると更にグループ分けをするなどの工夫がいる。また集団の空気が固定化されやすいときには、第三者の介入を求めるなどの工夫もいる。新しい人が打ち解けにくい雰囲気は作らない。とにかく集団として動かしていくことが大切である。そのためには、



年間スケジュールで形態を決めてしまうのではなく、その時々に応じて柔軟に変更していく姿勢が求められる。それは、できるだけ参加者の主体性に合わせられるのが理想的であろう。そうして参加意識を高めていくのである。

行政における支援のゴールは、仲間ができて、会話ができて、メンバーが支援者とだけつながるのではなく、お互いに話し合えるようになる力がついてくこと。人との関係の中でどう折り合いをつけていけるか、自分は自分でいいんだと思っていけるか、人を人としてどう受け止めていくのか、そういう人との関係をとる力をつけていくことである。そして青年が自ら「もういいよ。」と離れていくまで、また疲れたときは再び戻ってこられるような、細くとも長い関係をつないでいくことが大切である。就労支援等地域の社会資源を活用し、或いは就学・就労へと社会参加し始めた青年が、人間関係に安心できるまで、面接相談の間隔を徐々に伸ばしながらも支援を継続していくことである。

《今後の支援》

ひきこもり支援には、国家的な財政的支援がないこともあって、ニーズがあるにもかかわらず、全国的に行政の中でも民間の中でも支援が発展しにくい現状がある。

市で初めての「ひきこもり相談窓口」として、お手本のない道なき道を分け進みながら、活用できる資源は目いっぱい活用して、更に新たな社会資源を創り出す機能を担ってきた。地域にさまざまな社会資源を生み出してきた近隣の関係者、利用者を通して、共に関わり続けていく関係者のエネルギーを吸収しながら、共にエネルギーを出しあえる有機的なネットワークを存続していくことが大切である。

今後は、当事者のニーズである就労支援を、医療・保健・福祉・教育・労働・経済・親の会・青年自助会等、多くの関係機関（関係者）が智慧を出し合って構築していかなければならない課題であり、相談窓口はその発信源として機能していかなければならないと考える。

《参考文献》

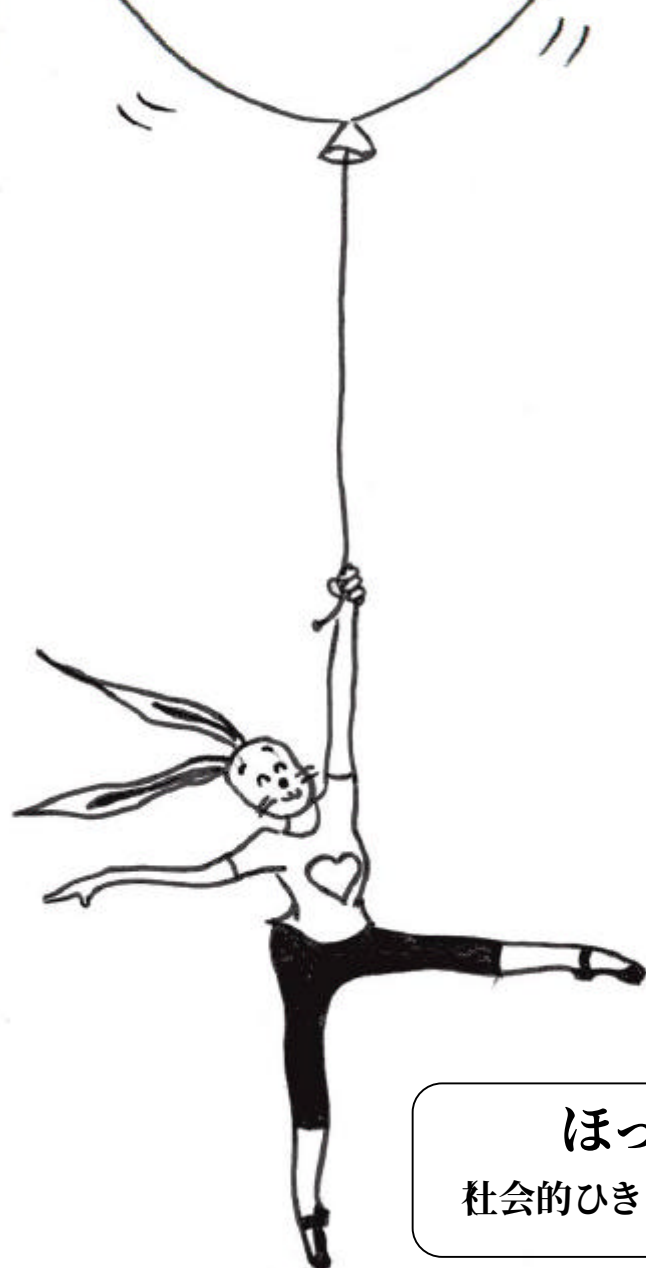
新版 保健師業務要覧
（日本看護協会出版社,2005）
目良宣子：各論 第3章
思春期保健 「ひきこもり」



こころの科学 通巻 123 号
（日本評論社，2005）
特別企画「ひきこもり」
目良宣子：「ひきこもり検討委員会」顛末記



家から こども が
でられない
家族 でかかえこまないで
ほっこり しませんか



ほっこり会
社会的ひきこもり家族の会)

社会的ひきこもり青年の居場所

ハートツリーハウス

Heart Tree House...

木々が地に根を生やし
枝の1本1本が広がり
豊かに実ることで
大きくなっていく...

そんな風に心も育っていければ...

★ 利用対象

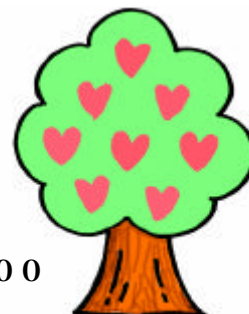
「ひきこもり」状態にある青少年

★ 対象年齢

15歳～30歳代までの男女
見学、体験利用も可能です

★ 開所時間

月曜日～金曜日 13:00～17:00



since 2002

〒646-0038

和歌山県田辺市末広町8-23

Tel & Fax 0739(25)8308

E-mail: heart-h@mb.aikis.or.jp

URL: <http://www.aikis.or.jp/~heart-h/>



田辺市ひきこもり検討委員会 【設置要綱】

【設置】

第１条 思春期・青年期にある者（以下「青少年」という。）にみられる「ひきこもり」の問題について、関係機関が相互に連携して一体となって取り組むことを目的として、田辺市「ひきこもり」検討委員会（以下「委員会」という。）を設置する。

【検討事項】

第２条 委員会は、前条に規定する目的を達成するため、次に掲げる事項について検討等を行う。

- （１）「ひきこもり」の状態にある青少年についての支援活動に関すること。
- （２）前号に規定する青少年に関する問題点等について検討すること。
- （３）「ひきこもり」の予防活動に関すること。
- （４）「ひきこもり」に関する研修や研究会に関すること。
- （５）前各号に掲げるもののほか、委員会の目的達成のために必要な事項に関すること。

【組織】

第３条 委員会は、委員３６名以内で組織する。

２ 委員は次に掲げる関係機関の職員のうちから、市長が委嘱し、又は任命する。

- （１）社会福祉法人やおき福祉会
- （２）社会福祉法人ふたば福祉会
- （３）民間支援団体
- （４）紀南こころの医療センター
- （５）南紀福祉センター
- （６）田辺保健所
- （７）紀南児童相談所
- （８）田辺市教育研究所
- （９）田辺青少年補導センター
- （１０）主任児童委員
- （１１）田辺市母子保健推進委員会
- （１２）知識経験ある方
- （１３）紀南六校代表
- （１４）南部高校 龍神分校
- （１５）ひきこもり家族会代表

- （１６）当事者代表
- （１７）子育て推進課
- （１８）学校教育課（幼稚園・小・中学校関係）
- （１９）児童育成課
- （２０）生涯学習課
- （２１）健康増進課

３ 委員の任期は、２年とし、再任を妨げない。

【会議】

第４条 委員会の会議は、保健福祉部健康増進課長が関係機関の要請その他必要に応じて招集する。

２ 委員会は、委員会の委員の代表による小委員会を設置し、定期的に会議を開き、その結果は委員会へ報告する。

３ 委員会は、必要があると認めるときは、委員以外の者の意見又は説明を聴くため、その者に委員会への出席又は文書の提出を求めることができる。

【委員長及び副委員長】

第５条 委員会に委員長１名、及び副委員長２名を置き、委員の互選によりこれを定める。

２ 委員長は、会務を総理し、委員長を代表する。

３ 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるとき、又は委員長が欠けたときは、その職務を代理する。

【事務局】

第６条 委員会の事務局は、保健福祉部健康増進課に置く。

【その他】

第７条 この要綱に定めるもののほか、必要な事項は、委員会が別に定める。

附 則

この要綱は、平成１７年５月１日から施行する。

田辺市ひきこもり検討委員会 【平成17年度 委員名簿】

	選出区分	備考 選出団体、役職名)	氏 名
委員長	1 社会福祉法人ふたば福祉会	社会福祉法人ふたば福祉会	米川 徳昭
副委員長	2 社会福祉法人やおき福祉会	社会福祉法人やおき福祉会	寺沢 啓三
副委員長	3 学識経験者		布袋 太三
小委員	4 社会福祉法人やおき福祉会	紀南障害者就業・生活センター	横矢 弥生
小委員	5 社会福祉法人ふたば福祉会	社会福祉法人ふたば福祉会	野長瀬 祐樹
小委員	6 民間支援団体	ハートツリーハウス	篠崎 恵子
小委員	7 田辺保健所	精神保健福祉相談員	栗田 直嗣
小委員	8 紀南こころの医療センター	医師	山本 朗
小委員	9 学校教育課	田辺市	中本 克彦
小委員	10 児童育成課	田辺市	佐藤 真
小委員	11 健康増進課	田辺市 ひきこもり相談窓口担当	目良 宣子
	12 民間支援団体	ハートツリーハウス	酒井 滋子
	13 紀南こころの医療センター	精神保健福祉相談員	和田 光弘
	14 南紀福祉センター	医師	宮本 聡
	15 紀南児童相談所		古川 茂代
	16 田辺市教育研究所	教育相談担当	佐藤 久美子
	17 主任児童委員		佐武 末子
	18 田辺市母子保健推進員		酒井 知津代
	19 学識経験者		西田 孝道
	20 学識経験者	龍神行政局 民生児童委員協議会会長	五味 貢
	21 学識経験者	龍神行政局	山本 尚司
	22 学識経験者	大塔行政局	尾崎 史予水
	23 学識経験者	大塔行政局 民生児童委員	谷口 敬子
	24 学識経験者	中辺路行政局 民生児童委員	飯田 公子
	25 学識経験者	中辺路行政局	横矢 豊子
	26 学識経験者	本宮行政局	九鬼 聖城
	27 学識経験者	本宮行政局	芝 栄子
	28 紀南六高校代表	田辺商業高等学校	上野 剛志
	29 南部高等学校龍神分校	南部高校龍神分校	田城 麻紀
	30 家族会	ほっこり会	愛瀬 典子
	31 当事者	ひきこもり自助会 知音	楠本 哲也
	32 子育て推進課	田辺市	塩本 幹子
	33 生涯学習課	田辺市	小川 雅則